
訳有りの記憶喪失でも生きていける

駄作工場長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

訳有りの記憶喪失でも生きていける

【Nコード】

N8335V

【作者名】

駄作工場長

【あらすじ】

全身を大怪我した状態で発見された少年。そんな彼は記憶喪失だった！？しかも気づけば貴族の屋敷で執事になっていた……。唯一残されたのは名前だけ、今、前代未聞の物語が始まる……。かもしれない。現在、解雇中……。

独自設定、原作改変などが含まれます。ご注意ください

タイトルが違いますが旧題「執事にされた記憶喪失少年」です

番外編は幻想入り・・・？

プロローグ（前書き）

どうも、過去から学べない馬鹿、駄作工場長をしている者です。今回もいつもの発作が起きて完結できるはずの無い新作……。もうさ、寛大な人だけ読んでください。私はもう知らない！

プロローグ

「君、大丈夫！？今手当てするからね！」

綺麗なブロンドの女性が大怪我をしているらしい俺を抱きかかえる、
どうやら近くにいる人間に指示を飛ばしているらしいが・・・そこで視界が真っ暗になった。

「う、ん？ここは・・・」

次に目覚めたのは薬品の匂いが充満する場所、白い天井には蛍光灯が設置されており部屋を明るく照らしていた。おそらく病院なのだろうが・・・如何せん身体が痛い、すぐに動けるような状態では無かった。

「あら、起きたみたいね。気分はどうかしら」
「あなたは？」

見覚えが無い、まあ当たり前ではあるが・・・。

「私はミリア・オルコット、あなたは？」
「ご両親に連絡しなくちゃいけないのよ」

「・・・・・・・・・・」
「どうしたの？」

わからない、自分が何者なのか。記憶を探っても何も出てこない、家族も、思い出も。

「お、思い出せないです。なにもかも・・・」

「あらあら、それは大変ね。名前はどうか？」

どうにか探る、それだけはすぐに出てきた。

「き、如月音羽きづらつきおとね」

「如月君ね、あとは覚えてないのね？」

「は、はい。それ以外は・・・あの、俺はどうなるんですか？」

一番気になることを尋ねる、おそらく孤児院行きだろうと思っていた俺の耳に驚くべき言葉が飛び込んできた。

「家で働いてみない？ 孤児院に行くよりは良いと思うわよ」

ブログ（後書き）

なんかさ、一巻から読み返したら衝動的に書きたくなったというww

今までもこうやって始めてさ、何回も失敗してるのにね。やっと「IS・ゴースト」で克服できたと思ったのに・・・orz

多分、向こうで行き詰ったときにこっちを更新すると思います。

過去から学べない私を誰か許して！

1 始まり（前書き）

ゴーストが投稿の一手手前で消えたショックから立ち直れないままです

1・始まり

「は？」

わけがわからない、ただそれだけだった。普通ならば見ず知らずの子供などを面倒みるよりは預けてしまったほうが良い。まして働かせるなど……果たしてそこまでの余裕があるのか？

「簡単な話、執事をやってほしいのよ」

「いや、正直俺はまだこんなですし」

事実、10歳程度なのだ。どうやら知能レベルは高いみたいだが……できるのだろうか？

ポケットに入っていた身分証らしきものには11歳とあったが、戸籍記録に俺の存在は無いらしい。

つまりは「存在しない人間」ということだ、はっきり言って面倒ごとなのは目に見えている。

「細かいことは気にしなくても良いわよ、まあ執事と言うよりは護衛だけだ」

む、むう。ここは好意に甘えさせてもらうのが得策なのか？戸籍が無いんじゃない孤児院にも預けられないし、この人にも要らぬ迷惑を掛ける。

「やります」

「はい、よろしくね」

こうして、俺、如月音羽の新たな生活が始まった。

1・始まり（後書き）

原作5年前からです、えっと・・・セシリアは10歳ですね

2 初仕事（前書き）

短い！

2・初仕事

「もしもの為に私の娘を守ってほしいのよ」

そうして連れて来られた場所は大きな屋敷、門の前にいるのだが・
・外壁の端が見えないとはどういうことなのだろう？まあ、気にしている暇は無いのだが・え、娘・・そりゃあ、11歳には自分の身を任せられないだろうけども。

「今日から配属になりました、如月音羽です。よろしく願いします」

ひとまず、最初の挨拶は大事だね。これから世話になるんだ、助けてもらった恩もある、全力で頑張ろう。

「軍隊みたいね、その挨拶」

「ふへ？ああ・・・そうですね、以後気をつけます」

うゝむ、一体以前の俺は何をしていたのだろうか？気になるなあ・
・まあ、気にしても仕方ないか。

「・・・・・・・・・・」

なんなんだ、この俺をじゅつと見つめてくる金髪の娘は？「この娘をお願いね」ええっ!？

すごい警戒されてるんですが、軽く睨まれてるし・・・やっていけないのかなあ。

「お、お嬢様でよろしいでしょうか？」

「セシリアと付けるのをお忘れなく、あなたが執事ですの？」
「はい、全力で仕えさせて頂きます。音羽とお呼びください」

く、年下にとは・・・いや、仕事だから仕方ないか。ああ、こんなきつい感じの子を相手にか・・・。

旦那様は媚売ってるような感じだし、そうならば自然にこうなってしまうか。女尊男卑の社会の極端な例か。

「では、紅茶を」

「！はい」

移動するセシリアお嬢様（なんか抵抗が・・・）を確認しながら専属メイドのチエルシーさんをお願いし、自身はテーブルの準備を・・・！
！ああつ、もう座ってる！つと、運んで・・・。初日でこんなにできるかああああ！！

「はあ、はあ、はあ。・・・ふう」

「もう少しゆっくりでも良いですわよ？」

「はい、善処致します」

う、恥ずかしい・・・むう、だって早く出したかったし。どうせならすぐにできたてを出したいじゃないか、息をぜえはあやってたら意味無いが。

「あなた、名前は？」

「は、如月音羽でございます」

「そう、ではこれからよろしくお願い致しますわ」

「は！なんなりと申しつけください」

うん？好感触・・・なのかな、そうだったらいいなあ。

2 初仕事（後書き）

多分、次の更新は遅くなります

3・初日終了

「は~~~~」

どうにか初日の仕事を終えて、入浴中。え、早いって？そんなの知るか、俺は疲れたの！

「はああ・・・なんとかやれたけど明日からが本番か」

今の時間は午後11時、もう既にほとんどの人は就寝している。早く俺も寝なくてはいけないな。

明日は6時から起こしに行つて・・・学校に送つて・・・その間にまた色々をやつて。

「・・・銃器の携帯は強制って言われたしなあ、そこまでなんかなあ」

どうやらオルコット家はその筋では有名ならしい、ミリアさんは大企業の社長だつて言うし。なんでそんな人が道端に倒れていた人間を見かけたのかはわからないが、まあ、感謝はしてる。でも、全身が赤く染まつてるほどの怪我だったのに俺が目覚めますまでの数時間でほぼ完治してしまつていたらしい。

「まあ、気にしてもしようがないか・・・？」

なんかカラカラって音がしたぞ、誰か来たのか。こんな時間にとは誰だろうか。

「お疲れ様、どうだった？」

「ミリアさん、まあ、なんとかです」

なんとかとしか良いようが無い、なにせほとんど30点（自己評価）だったからなあ。まだまだ改善すべきところはある、仕える主に心配されるようでは意味が無い。というか笑いだ。

「って、まだ起きてるんですか？」

「さっき片付け終わったところでね、社長は大変なものよ」

まあ、有名な大企業レベルだとそうなのだろう。まあ、上に立つ人間ができる奴じゃなければ成り立たないとは言っし……。俺って記憶喪失なんだよな？

「そうだ、音羽君の記憶喪失って全生活史健忘みたいよ」

「自分に関することだけ思い出せないって言うタイプですか？」

全生活史健忘（Generalized Amnesia）

発症以前の出生以来すべての自分に関する記憶が思い出せない（逆方向性・全健忘）状態。自分の名前さえもわからず、「ここはどこ？ 私は誰？」という一般的に記憶喪失と呼ばれる状態である。「記憶喪失」と同視されている。障害されるのは主に自分に関する記憶であり、社会的なエピソードは覚えていることもある。

多くは心因性。まれに、頭部外傷をきっかけとして発症することがある。発症後、記憶は次第に戻ってくることが多い。治療としては、催眠療法で想起を促すことなどが行われる。

（Wikipediaより抜粋）

「やっぱりね、てか詳しいのね」

「うーん、もどかしいなあ」

「時機に戻るわよ、それまではここで頑張ってみなさい。あなたならできるわ」

はい、まあ、やってみるしかないよね。もし戻らなかったらここで正式に雇ってくれるって言うてくれたし。

「じゃあ、おやすみなさい」

「はい」

「どうか、セシリアをお願いね」

それが何を意味しているのか、その時の俺には想像もつかなかった。

3・初日終了（後書き）

もう少ししたら飛びます

4・とあるいつもの

「お帰りなさいませ、セシリアお嬢様」

一年も経てば仕事も身に着く。え、時間経過が早すぎる？誰が自分の醜態なんか晒したいんだよ。

笑われたんだぞ年下に！まあ、一つ下くらいどうってことは無いけどさ。

「さてと、チエルシーさん浴場は？」

「いつでも入れます！」

最近風呂に帰宅後すぐに入るようになったセシリア、うん、風呂は良いよ！疲れがとれるからね。

ちなみに、俺は名前や見た目からして東アジア系。おそらく風呂好きから日本人らしい。というかDNA検査で日本人に一番近かったらしいが。

「音羽」

「はい」

最近だったらこれだけで何を要求されているか一発でわかる、今は『風呂上りのアイスティー』だ。

個人的にはアイスボックスなのだがなあ、まあ意見はしないけど。

「やはりこれに限りますわ、ねえ？」

「個人的にはピノですがね」

「それは何ですか？」

「日本で販売されている氷菓です」

やっぱり意見する、うん、雪見大福も良いよね！アイスが好きなんですか？もちろん！

「そのうち食してみたいものです」

「そうですね」

「結局執事らしくありませんわね、音羽」

勝手に言ってくれ、自分でもわかるけどさ。まあ、仕える身なのに敬語使わないとかは納得だけどもっとフリーダムでも良いと思うんだ、やるときはやるけども。

「あ、そういえばアイスクリーム店ができたらしいですね」

「早速休日に向かいますわよ！」

なにぶん、甘いもの・アイス好きってことで打ち解けたのも大きい。最初に比べて結構話すし。

最近では暇な時間にちよつとしたお菓子を作って出すこともある、しかも中々に好評だ。

ミリアさんもこの前はサンドイッチを持っていったし。作った甲斐があるというものだ。

「その前にヴァイオリンです、あともう少しですからそんなに落ち込まないでください」

「はあ、やらなくてはいけないと分かっているても憂鬱ですわ」

まあ気持ちはわかるけどさ、どっちかって言ったら俺だってやらせたくないよ。

オルコット家が舐められるのが嫌だって気持ちは同じだから仕方ないけどさ。

「そついえば来年の6月にはもうリニアトレイン開通ですね」

「お母様が招待されていますわ、本来ならばわたしも行きたかったのですが」

まあ、企業トップとか代表に対してのお披露目式だからなあ。いくら娘でも無理だろう、その日は確か運動会だったっけ。

4・とあるいつもの（後書き）

やべえ、フラグや（両親の）

5・いつもなオルコット家

もはや日常と化した燕尾服執事が掃除機片手に歩き回る光景・・・俺だよ。

なんかこう座ってらんないんだよね、お掃除ロボットと一緒に掃除機を走らせる。

「~~~~」

え、係の人に任せろって？俺の暇つぶしを取らないでくれ、後は全クリアしたP P版IS/V Sくらいしか無いんだ。何もすることが無いときに裏ルートとかまで行っただし。することが無い。

「ん？ありや、壊れてんのか」

突然その場で回転・・・わ、ここまで高速で回転できるものだったか？何故か独楽のように回り始めたお掃除ロボットを掴み自室に向かう。暇人の力をとくと見よ！

「ふゝむ？ああ、シャフトが曲がってるのな」

暇すぎた結果身に着いた器用さでドライバーやピンセット、ペンチを動かす。手先が器用になったは良いけどこれが暇人の末路と思うと空しい。普通は暇だからって専門書を読まないと思うが・・・それしか無かったという現実。身に着いて損はしないけどさ、なんか悲しいのは俺だけか？

「マスター、お嬢様が呼んでいます」

「え、そう？わかった」

絨毯が敷き詰められた廊下を先導して走るのはサポート用ロボット
のメタルギアmk?。いや、できるかな。って休暇のときに2日
でMGS4をクリアし、3日で急造したんだ。女尊男卑の世の中
でもああいうゲームがあるのは嬉しいところだ。

「ただいま来ました」

「音羽、ちよつと相手になつてくれませんか?」

そう言つて手渡されるのは一本のラケット、セシリアの手にはラケ
ットとシャトルが握られていた。

mk?はなんか得点板の近くに移動してるし、バドミントンしろと?

「まず着替えさせてくれ」

「すでに準備していますマスター」

ワイヤー状のアームには運動用のジャージが握られている、なんで
ここまで完成度高いんだろうか。

というかこの光景が普通になっているのだから凄い、セシリアに至
つてはお気に入りらしい。

「つと、その前にお客さんか?」

「そうみたいですわね、数は「7」です」そうですか」

名家である以上その遺産は莫大なものになる、無論それを狙う輩は
必ずいる。その令嬢となれば狙われるのは当たり前である、人質と
しての利用価値に奴隷としても。そんな奴らからの守護を命じられ
ているのが俺なんだがな。

「mk?、セシリアを連れて中へ」

「了解です」

「音羽、頼みましたわよ」

「終わったら続きをしましょう」

足元に敷き詰められたタイルの一つ、注視しなければわからないレベルで飛び出ているそれを踏む。オルコット家本邸に設置されている自衛用のガンストックの一つ。それが目の前に音を立てて展開される。

「守られる」のではなく「攻める」

これが長い間オルコット家が生き残ってきた理由らしい、ミアさんも一度組み手してもらったけど強かったし。そのときに銃器の扱いも基本から叩き込まれた・・・。

「とはいえ、まだ11の子供には撃たせられないよなあ」

俺は12だが・・・。

ストックに立て掛けられているM4カービン（硬化ゴム弾）を構える、なあと精々痛いだけだよ。当たり前所悪いと骨にヒビ入るけど。

「もらい！」

特注のドラムマガジンからゴム弾が絶え間なく供給され、木の陰や柱の上などあちこちの侵入者の額を撃ち抜く。流石に子供に人殺しはさせない、というか殺さずに撃退できるのならばそうする。

「ぴぎゃ！」

「ふみゃ！」

「んのわあ！？」

「ぎゃあ！？」

「ぬぶ！」

「ウゾダンドコードン！」

あゝあゝ、どさどさと地面に落っこちてくる侵入者（笑）。そりゃあ額に大きい衝撃が走れば普通にはしてられないよな、なんか聞こえたが無視するけど。

「さてと、そろそろ来たらどうだい？」

「素晴らしいな、流石オルコット家のと言ったところか」

拍手をしながらこちらへ歩いてくる男、身長は高すぎて俺じゃあ頭は触れられないか。というか2mは普通に超えてるよなあ・・・正直そんなでマッチョとか気持ち悪い。さっさと倒してしまおう、うん、そうしよう。

「マスター、こいつら纏めておきます」

「ああ、わかった。セシリア、もうちょい待ってな」

「はい、急いでくださいね？」

「りょーかい」

え、大男空気って？知るかそんなもん、勝手に入ってきて邪魔しやがった奴に平等に対応すると思ったら大間違いだ。

「無視すんなコラー！！！」

「はいはい、逆ギレ乙！っ」と

ベキゴスドゴ！

ラリアットをしゃがんでかわし、隙を見つけたらそのまま足を引っかけ転ばせる。もちろん足首の関節は外して、じゃなきゃ逃げる

からね。ついでに後頭部を肘で殴りつける、はいおしまい。

「いつ見ても上手くやりますわね」

「ははは、じゃあmk?頼む」

「はい」

気絶した大男をmk?が引きずっていく、ちなみにこれも日常の一部だったりする。いや、普通じゃないだろうけどさ。

「じゃあ、やりましょうか」

「ええ、負けませんわよ!」

今日もまた賑やかなオルコット家です、と。そういや明後日はリニアラインの記念式典だったけか、今日から1週間はミリアさんがいないから俺が管理してる。といっても全部の指揮権はセシリアにあるんだがな、なんでも有事のさいは全て任せるんだとか。やっぱ出来る人は考えが違うね、用心にこしたことは無いってことだよ。

「さあ、手加減しませんよ?」

「勝つたら今日はわたくしが夕食作りますわよ!」

え、それは防がねば!

5・いつものオルコット家（後書き）

あゝ、両親フラグ！

ちなみに名前呼びしてるのは仕事振りが認められたから・・・
と言う名の実はフラグ立てだったり（展開の都合上によりまだ見せません）

6・とある朝の風景（前書き）

のどかだねえ・・・

6・とある朝の風景

「ふああゝゝゝ、朝か」

午前5時、俺の一日の始まりだ。いつもはもう少し寝てるんだがミリアさんが式典参加で不在のために俺が実質仕切らねばならない。

「mk?、皿並べておいて」

「はい、マスター」

あゝ、午前の仕事終わったらmk?の整備しよう。もしもの為にREXみたいにしよう、うん。

つてその前に窓開けなくちゃならないな、雇ってる人員が少ないし他の人は休ませたいから俺が率先してやる。

「それにしてももう二年ちよつとになるのか、早いなあ」

俺がボロボロの状態で病院に運ばれ、ミリアさんに雇われて執事兼護衛をしてもう二年。思い返せば言葉にできないほどに助けてもらった。

「一生かかっても返せないなこれは、つてやべもう七時だ!」

八時にはセシリアを学校に送らねばならない、しかも俺が起こすことになってるんだよ!遅刻なんてさせられない、いや、いつもこんな時間だけでもさあ。

「おっはようゝ、朝だぞ。起きろゝ!ふぐわ!」

「五月蠅いですわ、もう少し静かにできませんの!?」

うん、騒がしく起こしたから枕を投げつけられた。当たり前か、朝から元気が出るようにと思ったんだがなあ。

「ホント、執事らしくない執事一位も領けますわ」

「いやあ、それほどでも」

「褒めてませんわ！まあ、護衛としては優秀ですが」

とふざけている暇も無いか、さつさとしなければ遅刻してしまうし。それにそんなことがあれば帰ってきたミリアさんにボコられる。それだけは勘弁したい、なにせ娘のことになるとあの細身の体からは想像できない力出すから。

「さあさ、今日は味噌汁に納豆とたくあんに卵焼きとほうれんそうのおひたしですよ」

「あゝ、今日は納豆ですか」

誰だ、貴族らしくない朝食だ！って言ったやつは、いくら資産があつてもいちいち高級なものばかり食べるわけないだろ。それに日本食ブームらしいから良いんだよ、味噌汁は気に入ってるらしいし。納豆が苦手らしいけど。

「好き嫌いはダメだぞ、綺麗でいたいならしっかり食べる。いいな？」

「わ、わかってますわ。まったくもう、卑怯ですわその言い方」

「なんか言ったか？」

「なんでもないですわ！」

なんだろうか、ここ数ヶ月俺と会話してるはずなのに語尾が小さくなることがある。今時はそういうのが淑女のたしなみなんだろうか、

俺はわからないから指摘しないけども。

「今日は音楽発表会が9時からなんですから、急いでください」

「8時には会場入りでしたわね、音羽、車の準備を」

「はいさ〜！」

え、なんで未成年が運転できるって？するわけないだろ、mk？に任せるんだよ。一応AI載せてるからそれくらい簡単だし。

「マスター、準備終わりました」

「行きますわよ！」

「おし、mk？出してくれ」

向かうは音楽発表会が行われるエルウィンホール！

6・とある朝の風景（後書き）

あと2・3話で急展開の予定

7・日常への亀裂

さて、到着したはいいが・・・Dの35つてどこだ？親の代わりとして入ったはいいが、広すぎてわからん。

というか小学生レベルの奴が親代わりに観客席にいるってのも不思議な話だが。なにに、案内板によると、おおすぐそこだ。

「ふう、これで落ち着いて見れる」

ふかふかの座席に座り、腕時計を確認する。そろそろだな、確か合奏でヴァイオリン演奏だったっけか？

いまだにこういう高級椅子には慣れない、気持ちよくて寝ちゃうんだよな。今日は寝る暇なんて無いけども。お、始まったみたいだ。

中学クラスのグループの次に小学生クラスの順番だ、流石中学生と言ったところだった。

「それでは最後に『チゴイネルワイゼン』です」

確かサラサーテ作曲1878年の作だったか、ギャグマンガから舞台まで幅広く使われる誰もが一度は聞いたことがあるはず。mk？にアラームで鳴らされたときは驚いたけども。

た~~~~~~~~

特徴的な始まり、う~~~~んなんともサスペンス劇場な感じ。おお、手さばきが上手くなってる。俺の場合はPCかmk?で弾くから全然弾けない・・・別にいいさDTMで。

「お疲れ様、良かったよ」

「と、当然ですわ!」

帰りの車の中で向き合いながら談笑する、付き添いで練習して良かったな。終わったあとは拍手喝采の嵐だったし、できたらミリアさんにも聞いてほしかったな。まあ、録音はバッチリだしあとでメールで送ろう。うん、そうしよう。

「よし、じゃあ今日は久しぶりに腕振るっちゃうかな」

「お母様にも聞かせてあげたいですわ」

「ん、じゃあさっさとメール送るか、ちょい待ってな」

ケータイを胸ポケットから取り出す、このときほどこの行動を後悔したことは無かった。

緊急ニュース速報が画面の下を流れる、そこに表示される『リニアトレイン試乗車事故、生存者不明』の文字。

「どうしたのです、そんな蒼白にして」

「まあ、待て。まずは戻ろう。mk?、急いでくれ」

落ち着け、まだ詳細は分からないんだ。いや、おそらく信じたくないという拒否反応からなのか、それとも突然すぎて感覚が麻痺していたのか。

「お嬢様！音羽さん！」

「わかってる。セシリア、早く来い」

「なにが……」

客間に入った瞬間、その場にいる誰もが口を閉ざした。テレビ中継される悲惨な事故現場を、陸橋の一部が砕けリニアトレインが地上13mから転落。炎上している光景を。

「そ、そんな……お母様……」

「待て、セシリア、気をしっかり持て。まだ決まったわけじゃない」

いや、誰もがこの映像を見て生存者がいると言えるわけがない。画面いっぱい火の赤が広がり、今まさに燃えているのだから。車両は炎に包まれて黒煙だけが立ち上っている。

「チエルシーさん、セシリアを向こうへ」

「はい、確認をお願いします」

結果は悲惨だった、1週間後に届いたのは両親の遺体が見つかったとだけ。確認には俺だけで向かった、無論、セシリアに見せられる状態ではなかった。おそらく、一番大変なのは明日からだろう。

「ただいま戻りました」

重苦しい空気が客間を埋め尽くす、もう誤魔化せない。言うしかない。

8・離別・決意・出発

「そう……ですか」

オルコット家本邸はいつも以上に暗い雰囲気が充満していた、だが、泣くことは許されない。

目の前のテーブルにはミリアさんの自室にひっそりと仕舞われていた遺書がある。そしてその内容は思いもよらないものだった。

「もし、これが読まれているのなら私はこの世にいないでしょうね
おそらくこれを読んでいるのはセシリアとチエルシー、音羽君でしょうね。」

あれこれ書く前に言っておくわ、ここに書かれたことは絶対に行くこと。

例え不満があっても必ず。

まずはセシリア、あなたはもう十分自分で立つて生きていけるはず。
勿論、まだ子供のあなたには大変かも知れない。

それはわかってる、でも一つだけ。あなたの名、オルコット家を守り抜いてちょうだい。

おそらく遺産目当ての親戚が大勢来るでしょう、いや、もう来たかな？

ただ、あなたの帰る場所をあなたが守ってちょうだい。これが母である私からの最初で最後のお願ひ。

チエルシー、幼馴染であるあなたにはセシリアの傍にいて支えてあげて。

酷かもしれないけど、あなたに教えたことを使つて。
メイドであるあなたに頼むのは正直悪いと思つてる、だけど、どうかお願い。

音羽君、あなたは拒否してしまうかも知れない。

あなたの気持ちもわかるけど、残念ながら私が残したものではない。
たのことを守りきれない。

私が生きていたなら護衛を頼めたのだけれど、右目のこともあるから。

あなたがこれを見た翌日、あなたを解雇して日本に移住させます。
あなたには生きていてほしい、そのための手段なの。
許してちょうだい、今のあなたを守るほどの力が無いの。

「そ、そんな」

「まあ、そりやそうか。戸籍無し・記憶無し・右目は軍の兵器、隠すのが難しいか」

つまり、俺は無理をして守られていたということ。俺という一人の人間のために。

一年前にあつた誘拐事件、その時に発現した右目の擬似ハイパーセンサーらしきもの。

ドイツで生み出された技術らしい、そんなモノを持つてる人間を秘匿するなど普通の人にはできるわけがない。

「わかりましたお母様、音羽、チェルシー。わかりましたわね」
『はい』

もし、俺が残ればオルコット家が危険に晒される。結局は俺が出て

行くしかない。

俺ができる恩返しはそれしかない、まだ幼いセシリアを置いて出て行くのは気が引けるが。

「気に病む必要はありません、あなたには生きていてほしい。それだけです」

「ッ・それ言ったら卑怯だよ、わかったよ。ただし、ここを頼むぞ」

「わたしもいます、心配しないでください」

手続きや屑な親戚を脅してスッキリしたとある9月の朝、場所はロンドン・ヒースロー空港第三ターミナル。一応あれこれやっている内にあつと言う間に三ヶ月、まあ親戚共は掃除できたし大きい心配事は無い。頑張ってイギリスの代表候補生になってやるって言ってたし、あの目は本気だ。

「じゃあ、セシリアのことお願いします」

「お任せください、何があっても大丈夫です」

チエルシーさんがいるし、もう大丈夫か。あとは俺が生きていけるかだ。

「じゃあ、セシリア」

「ええ、でも、たまには連絡くださいね」

「わかってるって、元気だな」

「はい！音羽もお元気で！」

搭乗口へと歩く、振り返ると涙目のセシリアが手を振っていた。俺も振り替えず、おそらくもう二度と会えないだろう。二年という短い間だったが、一生俺はあそこで過ごした思い出を忘れないだろう。最後にセシリアへ向けて敬礼をする、さようならセシリア。そして、ありがとう。

俺を乗せたジェット機が名残惜しそうに飛行機雲を作りながら空へと飛んでいった。
救ってもらったこの命、絶対に無駄にしない。必ず生き延びる！そう決意した俺を乗せ飛行機は遙か遠くの日本へと向かっていった。

8・離別・決意・出発（後書き）

次回から新生活の始まりです

9・主人公設定

きんぐおとけ
如月音羽

年齢（原作開始時）・17歳（年上）

性別・男

容姿・灰色がかった肩までかかる黒髪（変装のつもり）そのため
女子と間違えられることがある。赤いフレームのスクエアレンズの
眼鏡をかけている。基本的に左サイドテール。

身長・176cm

体重・測定不可

全身に怪我をし路上に倒れていたところをオルコット家当主、ミリ
ア・オルコットに保護される。

身の安全のために匿われ娘であるセシリア・オルコットの執事兼護
衛として暮らす。

二年後、セシリアの両親がリニアラインの事故で還らぬ人に。

音羽自身とオルコット家の安全のために遺書によって解雇、日本へ
移住。

隣家の織斑家とは親しく、一夏やその友人の弾に音兄と慕われる。
プレイしたゲームに登場したメタルギアmk?を実際に作ってしま
うなど手先が器用だが、曰く「暇人の末路」らしい。

護衛をしていた経験から銃器の扱いに長けている。また、素手での
格闘戦も得意で1対多は特に強い。

執事兼護衛を始めて一年経ったところにセシリアとともに誘拐された

時に、右目の空間展開型擬似ハイパーセンサーが発現する。（イメージは無音ゼロのあれ）

オルコット家に保護される以前の記憶が無く、今でも戻っていない。明るい性格だが、今でもオルコット家の墓には毎年墓参りしている。経験から人を助けることに躊躇が無い。セシリア曰く「執事らしくないですが頼りになる」らしい。

藍越学園受験予定（執事教育の結果中1時点で中学内容はクリアさせられたため余裕）

偶然か織斑家の隣家を借りて住んでいる。

9・主人公設定（後書き）

原作開始三年前です

10・出会い・邂逅・物忘れ

「（、'。）」

日本に着いてから2週間、そこまでは良い。俺今いくつだ？・・・14だ。中1だな、うん。

なんで顔文字かって？餞別として極秘ルートで配送され昨日届いたアタツシケースにうん千万と入っていたからさ。現在間借りした一軒屋の居間にて荷物を片付けたところだ。

「そりゃあ、なにかと中1は金がかかるだろうけどもさあ。こんなには必要無いんじゃないかな」

いやまあ、未成年の生活だから金が必要になるけどさ。ちなみに転校生として近所の中学校に入ることになっている。まあ、今は先に今日の夕食を作らねば。現金は隠して・・・と。

「マスター、不審な動きはありません」

ちなみにmk？は足が着かないようにとオリジナルは持ってきた、もう一台は置いてきたが。

流石に一人では状況把握ができないのでスパコン並みの性能を持っってしまったmk？に監視や調査は任せてる。例えば町内の監視カメラにハックして見張りしたりなど。

「ふう、あ、やべ」

考え事をしながら野菜を炒めていたらなにか焦げた匂いが・・・うわわわわ。

「あゝ、勿体無い」

「考え事をしているからです」

う、痛いところを突きやがって。その通りだけでもさあ、誰がこういう性格にしたんだか。

ああ、俺か。まあいいや、明日から学校か。執事の教育で中学レベルを制覇させられた俺はどうしろと？

ピンポン

インターホンだ、この時間に誰だろうか。

「はい、どちら様でしょうか？」

玄関の扉を開けると一人の見知った小学生がいた。名は織斑一夏、有名な初代ブリュンヒルデの弟だ。だが最近姉の千冬が帰ってくるのが少なく、一人でいることが多い。

「多く作っちゃったから、おすそわけ」

「ん、またお姉さん帰ってこれないのか。だったら上がりな」

そのため、お隣さんということでしたまにこうすることもある。昨日は鈴音^{リンイン}って言う女の子と一っしょだった。彼女の家が定食屋ってことでたまに世話になることもある。

「ふん、そうか。そりゃあ良かったな」
「うん！」

夕食を終えてソファーに座りながら談笑する、そういや一夏たちは来年中学生になるのか。そのときもこの町で暮らせてたら良いなあ。

「あ、もう9時だ。じゃあおやすみなさい！」
「おう、おやすみ」

一夏が帰る、俺も明日への支度を終わらせて眠りについた。

翌日、朝7時。

「よし、制服もよし。さあて、頑張りますか」

鞆に道具を詰めて戸締りを確認し玄関の扉を開ける、陽光が筋になつて足元を照らす。

目指すは徒歩15分の並木野中学校。

「あら、あなた見ない顔ね」

「ん？この人か、今日からなんだ」

「転校生なの？」

曲がり角で会ったこの青い髪の少女、どうやら並木野中の生徒らしい。というか日本で青い髪とか、見たことないな。

「俺は、如月音羽。君は？」

「私は更識楯無、ところであなた男なの？」

う、それを言われるとなあ……。流石に本当のことは言えないが。

「まあな、髪型は……。訳あつてな」

「そう、よろしくね」

そのまま握手をする、はて、更識……。何か忘れてるような。まあいいか。

こうして、俺の中学生生活が始まった。

11・女尊男卑・立体機動

「初めまして、如月音羽です。こう見えても男です、よろしく願います」

並木野中学校1年3組、教壇の前で俺は自己紹介をしていた。担任は岸川頼子先生、なんか今時の女性臭がするのは気のせいだろうか。

「如月君は・・・更識さんの隣で良いかしら？」

「はい、構いません」

む、朝に会った女の子か。まあ良い子そうだし問題無いか、さあて早速授業を。

「ふふふ、改めてよろしくね楯無でいいわ」

「おう、よろしく。音羽でいいぞ」

うん、更識でなにか忘れてるような。別にそうでも無かったような、いいや、授業に集中しよう。

やあ、二時間目の数学が終わったところだよ。正直に言おう。

「（簡単すぎるう！）」

簡単な話、高校生に小学一年生の問題をやれって言われてるようなもの。執事教育恐るべし、そして退屈だ。

「音羽、いつしょにお昼食べない？」

「ああ、良いぞ」

どうやら並木野中は昼食を持参の弁当か食堂で済ませるらしい、普通は給食じゃなかったか？

しつかり準備はしてきたが楯無さんはどうなんだろう。

「友達もいつしょで良い？」

「ああ、できればたくさんの人と友達になりたいしな」

屋上に移動すると眼鏡をかけたポニテ女子が楯無さんの後ろを歩いてきた、何、眼鏡かぶってるだと・・・！？

「布仏虚です、以後よろしくお願いします虚とお呼びください」

「こちらこそ、虚・さん。如月音羽です。気軽に音羽って呼んでください」

やはりかしこまられると呼び捨てできん、流石に癖は簡単には抜けないか・・・。

「・・・ちよいと昔の癖だ気にしないでくれると助かる」

「わかりました」

おお、虚さんは話がわかる方のように・・・なんかお嬢様の付き人みたいに思えるのは気のせいかな？

「あ、もう午後の授業始まるんじゃない？」

「げ、あ、虚がない！」

気づけば虚がない、屋上に取り残されたのは俺と楯無だけ。ええい、背に腹は変えられぬ！

「I can Fry!」

楯無を左腕で抱え、屋上のフェンスを飛び越えてダイブ。

「え、ちょ、きゃあああああああ!!」

地上20mからの降下、パラシュート無し、女の子抱えて。やれる、このワイヤーアンカーがあれば！

バシユンツ!!

「でえい!!」

降下、もとい落下しながら校舎の反対側。窓が開いている場所にアンカーを突き刺し、滑空移動。

いつ作ったそんなもの？暇なときに決まってる、というか授業に遅れるわけにはいかん。

楯無曰く「あの国語教師、遅刻したら放課後に教育的指導と言つ名の組み手なのよ」らしい。

「俺に構わず先に行け!」

「・・・わかった!」

いやまあ、楯無を先に入らせなきゃ俺が入れないからってだけなんだよね。

というか、そのノリの良さ。嫌いじゃない。

その後、どうやら俺だけ遅刻だったらしい。0・1秒の・・・ま
あ遅刻だけどそれに気づくってどういうことだよ。

11・女尊男卑・立体機動（後書き）

こんなの出してっという機械があったら感想やメッセージでどうぞ

ちなみに今回は「立体機動装置」

12・腕(ココ)が違っんだよ(前書き)

スポーツと実戦は違っって話

12・腕(ココ)が違っんだよ

「さあて、如月。初日から授業に遅刻とはわかってるだろうな？」

体育館(6時間目が終わり畳が出されたまま、柔道やってたみたい)で俺は教育的指導を始められようとしていた。

「今後気をつけます、申し訳ありませんでした」

ちなみにこの国語教師(名前は知らん)は生徒内でも嫌われている、教師内でもあまり良い評価ではないらしい。噂だが前の勤め先でやらかしたとか……。そして女は偉いから男は言うこと聞けって思考。

「さて、では始めようか」

「倒せたら帰って良いんですね？」

今まで勝てた人がいないらしいが、ギャラリーでも「勝てるわけが無いYO!」とか聞こえる。

なんでも性格には難有りだが格闘技の実力はそれなり、高校時代には全日本で2位だったとか。
知らんけども、これは言える。

「それだけの技術をこういうところで使うなんてね」

「ええい、教師に楯突くとは!」

って直線的に突っ込んできたところを右サイドへ避けてそのまま足払い

「のああ！？ぐふう！？」

倒れこんだところを後ろから首筋に3連続で肘を叩き込む、もつとでかい大男と戦ったときより随分と楽だ。

『おおおー！』

いつの間にか大勢になっていたギャラリーから歓声が聞こえる一応手を振り替えてみよ、って岸川先生がすげえ手を振ってる。思ってたより良い人か？というか目で「もつとやれ」って言わないでくれませんか、一応教師でしょ。悪い気分じゃないけどもさあ。

「ま、まだまだあああああー！」

「俺に勝てたら言うこと聞いてやりますよ」

久しぶりに身体を動かすからなあ、ウォーミングアップも兼ねてやろうかな。

え、失礼だつて？教師として外れてる三流に真面目に相手するかよ、まあ遅刻したのは悪いと思うけども。

「っでつやあああああー！！」

ラリアットをしてくるが、その腕を始点にし肩車状態になる。

「ごめんね〜」

「な、うおぎやあー！？」

体重をかけ、振り子のように揺れて反動でバランスを崩させて倒す。あれだよ、バイオ5のジル戦でシェバがやる体術。名前知らんけど。あの乗っかってバタンのやつ。

「ふう、もう良いですか？」

正直疲れた、精神的に。というか中1に負ける元有段者って……いやまあ、俺が教わったのが全部実戦用のばかりだからかも知れないが。

「如月君かつこいい！」

「転校生すげえええ！」

「けしからん、もつとやね！」

なんか混じってる気がするが、まあいいか。さて、勝ったんだし帰ろうかな。そろそろ一夏を迎えにいかねばならん。

「はい、さようなら」

後ろから飛び掛つてきた先生（笑）を両腕を掴み目の前の床（木製）に勢いを殺さずに叩きつける。もとい突き落とす。どうやらそれがトドメになったのか動かなくなった・・・あ、気絶してる。

「……じゃあ、みなさんさようなら。また明日ね」

さあて、一夏を迎えに行くか。確か買い物するって言ってたけど荷物持つの大変だろうし。

このときの俺はある人物に尾行されているとは思ってもよらなかった。

13・追跡者と食堂と俺の奢り

「音兄、手伝ってくれてありがとう」

「なあに、お前がいつも頑張ってるからだよ。じゃあ気をつけてな」

近所のスーパーに学校を終えた一夏と鈴音ちゃんを迎えに行き、一夏の買い物に付き添った俺は一夏と別れて空き地へと向かっていた。それにしても鈴音ちゃんは可愛いねえ、いやけしてそういう趣味じゃないよ。

元気になっている子を見れるってのは平和な証だからねえ、あ、今日の夕食は鈴音ちゃん家に行こう。

あそこのチャーハンは格別なんだよね。

「さあて、そろそろ出てきたらどうかな？」

学校を出てからずっと尾行されていた、気づかないフリをするのは中々に骨が折れたが。

俺の言葉に反応したのか人影が壁から出てきた。意外な人物・・・では無かった。

なにせ予想はしていたからな。

「ひとまず話は飯食いながらにしないか？楯無」

「あはは、それもそうね」

鈴音ちゃんの家、中華料理店「鳳凰」は俺のお気に入りだ。安くて量も多く、しかも家から近いときた。さらには通学路の途中だから忙しいときに下校中に寄れるという。

「おっちゃん、チャーハンと天津飯一つずつお願い」

「あいよ、ちよい待ってな」

「ご飯系はもう、某コーポレーション会長みたいに「素晴らしい！」って言えるくらい美味い。」

「で、なんで尾行したんだ？」

「いや、まあ。なんで強いのかなあって気になったから、あの子って弟？」

厨房から中華鍋が振るわれる音がする、中華は火力だよな。

「隣の家の弟さん、お姉さんが忙しいらしくてたまに世話してる」

「そう、ところでさあ「逸らすな」もう、連れないわね」

もしかしたら・・・もしかして・・・というかやつぱり更識で何か忘れてるような。

「いや、なんであんなに強いのかなあって」

「え」

「どうしたの？」

「それだけ？マジで？」

え、え、ヲイ。なんだよ、警戒するほどのことじゃなかったのかよあゝあ。そうだよなあ、普通の中学生のレベルじゃないものなあ。この世界のどこに大人と張り合える中学生が居るんだよ。

ああ、俺か。ってそれじゃ意味無いじゃん・・・てか、墓穴掘っちゃったよ。

「本気と書いてマジと読む、あ、この天津飯美味しい！」
「だろ、ここはお気に入りになんだよ」

興味本位ならば別に警戒しなくていいや、あゝチャーハン美味い。
おまけのわかめスープがまた良いんだよね。

「そつえば音羽君って、何かスポーツしてるの？」
「ん、ちょい前まではバイアスロンやってたな」

バイアスロン

バイアスロン（biathlon）とは、二種競技のこと。ラテン語で「2」を意味する接頭辞bi-にathlon（競技）を合成した造語。一般にはクロスカントリースキーと、ライフル射撃を組み合わせた冬の競技が有名だが、ランニング・自転車・ランニングを通して行う夏の「バイアスロン」（デュアスロン）も存在する。

（Wikipediaより抜粋）

「え、すごい！ってことは海外にいたの？」
「まあな、英語くらいならペラペラだぞ」

事実、二年イギリスで暮らせば英語はできるようになる。できなきや生活できないもの、まあISがあるからこそ日本語通じて良かったってのもあるけども。

「それにしてもやり過ぎたなあれは」

確実に学校内で話題になるだろ、なぜにあれだけ生徒が集まったのかは不明だが。

というか、教師数人で「もっとやれ」のアイコンタクトはダメだろ。

「あはは、頑張ってね」

楯無が笑いかけてくるが・・・俺の心はブルーだった、別に水色の髪だったからかけてるわけではない。

「ごちそうさま、じゃあまた明日ね」

「おう、おっちゃん勘定お願い！」

「あいよ」

さて、明日も頑張るかな（目立たないように、手遅れな気がするが）

13・追跡者と食堂と俺の奢り（後書き）

次々回はちょっと飛びます

14・同性の友人・・・求む（前書き）

オリキャラ登場！

14・同性の友人・・・求む

「おっはよう！」

「おはよう・・・」

目の前にいるショート朱髪、身長は俺より下の少女。ジャクリーヌ・ウエルキン、一学年生徒会書記だ。なぜか一昨日のあれを見て勝負を挑まれて返り討ちにしたら、懐かれたっぽい。

曰く「強い人には惹かれるものだよ」らしい、ふうん。

「でだ、ジャック。なんで俺は1学年生徒会副会長やってんだろっかね？」

「初日で日本馬鹿（あの国語教師のこと）を倒しちゃったからじゃない？」

なんでも岸川先生の話によると、「生徒からの要望が多くて、ごめんね」らしい。

まあ、あんなの見ればそうなるのも仕方ないのか・・・うん。どうやっても目立たずに暮らすのは無理らしい。

「別に受験有利になるから良いんじゃない？」

「ああ、そりゃあそうか」

ちなみに俺は将来が約束された学び舎《藍越学園》を受験する予定だ、卒業後には地元密着の関連企業に就職できるという。中二っぽい言い方するなって？気にしたら負けだ。

「さあ、一時間目は体育よ。頑張ってね」

「楯無・・・おまえなあ」

ところでジャック（そう呼んでつて言われた）から聞いたところによると、楯無は一学年生徒会長らしい。道理で他の女子が憧れの視線の集中砲火をしているわけだ、その中に俺も追加されたいが（主に男子から、あんまし嬉しくない）

「で、来週の中学校説明会に出ると。まあ副会長なら当たり前か」
「うん、司会やってくれないかな？」

来年入学する小学校6年生に親に対する説明会、その時に必要な書類や体操着などの注文書なども渡される。つまりは来なきゃダメですよ！って奴だ。

「別に良いけども、お前は何するんだ？」

司会なんて夜会で十分経験があるから問題ない、あくセシリア分が足りん。

膝枕して撫でてたあのが懐かしい、まだ少ししか経ってないが。

「私は挨拶と受付「あたしは雑務」そんな感じ」
「で、決めることはあるのか？一年が」

普通は二学年か、三年がやるものじゃないのか？聞いたことないぞ、というかジャック・・・俺の上に乗っかるな。書記が記録取らないなんてどういうことだ。だから俺が今話しながらメモってるわけだ

が。

「以外に万能ね、音羽」

「できることしかできないよ、てか読心術使うな」

そっぴいや一夏も何気に鈴音ちゃんに考えてること読まれてたなあ、まあ顔に出てるからだけでも。

たまに俺も読まれたりする、なんでだかなあ？

「大丈夫よ、セシリア分が足りないとかは言いふらさないから」
「だゝ、もう言ってるじゃんかよ・・・」

あ、つまりは一夏や鈴音ちゃんが来るのか。せつかくだしいいところ見せなきゃいけないな、後輩になるんだし。

「おし、じゃあささと決めること「特になし」は？」

「仕事決めるだけだもの、はい、計画表」

手渡されたのは薄い10ページあるかといつくらいのプログラム表、
m j k

そのためにわざわざ集まったのかい、まあいいや。

「んじゃ、また明日」

「私もついてく」

「勿論私も」

「わかったからジャックは乗らないでくれ」

なぜかジャックが俺の上に乗るんだよ、まあ重いつて言ったら血の雨が降りそうだから言わないけど。

あゝ今日は夕飯どうしようかな。

「そうだ、今日は音羽ん家にお邪魔しよう」
「ちょ」

「あ、それは興味深いわね。そうしましょう！」

その後、両腕を掴まれて強制送還された。その後なにがあったかかって？

お察しください

14・同性の友人・・・求む（後書き）

そのうちキャラまとめやらねば

あ、こんなキャラ出してほしいという方はどうぞ感想でもメッセージでもどうぞ

15.ここからは音羽の提供でお送りします（前書き）

まともにシリアス書けない

15・ここからは音羽の提供でお送りします

「あはは、凄かったね」

「一人暮らししてるなんてね」

この時期に転校してきた人物として情報収集を続けていたが、一向に出てこない。

一般人ならば個人情報などが出てきてもおかしくは無いのだが、そのデータも全て架空の物だった。

「じゃあ、また明日ね、たてちゃん」

「うん、じゃあね」

ジャックと別れ、再び音羽の自宅へ向かう。あの戦闘能力は一般人が手に入られるものではない。

まして、あの反応速度。もし敵に回れば更識にとって脅威になる、情報が無いというのが余計にそれを暗に示していた。

「よお、どうした？忘れ物か」

「あ、うん」

買い物袋を持った音羽が近づいてくる、いつもの笑顔だが。今はそれすらも怪しく感じた。

不思議そうに自分を見つめてくる、けして敵意を感じないのだが。

「あちゃ、なら仕方ないか」

難なく音羽の自宅へ再度入る、普通ならば空き地など目立たない場所なのだが。

生憎、近所に空き地は無かった。楯無自身が焦っていたのもあるが。

「ふう、お茶で良いか？話はそれからだ」

すぐにわかった、見透かされていると。まだ未熟とはいえ暗部としての技術を身につけたのだが、それを音羽は難なく見破っていた。やはり、只者ではない。自分の本能がそれを告げていた。

「おいおい、なんて顔してんだ。可愛い顔が台無しだぞ」

「ふにゃあ！？」

楯無が「忘れ物」と言って戻ってきた、忘れ物なんてしていないのだが。遂にか、とは思ったが正直ほとんど心配はしていなかった。まあ、ビビッているのを見て内心こちらが心配させられたが。そついや、まだ16代目が実質仕切ってるんだったか。

「おいおい、なんて顔してんだ。可愛い顔が台無しだぞ」

「ふにゃあ！？」

目の前で緊張して今にも爆発しそうな17代目を落ち着かせようとしたら、なんか可愛らしい声出して驚いていた。もしかして、本番はこれが始めてなのか？

「まったく、せめてもう少し鍛えてから挑めよな」

「くう、いつから気づいたの？」

「ん、昨日くらいに更識のこと思い出した」

これは事実だ、というかもやしてたから本気で2時間くらい考

え続けて「ああ、あれか」ってスッキリしたかったのが強いんだがな。良くあるよね、もう少しで思い出せそうなのに思い出せないもどかしさ。

「先に言っておくけども、俺自身自分が何者かわからないんだよな」「え？どういうこと」

「簡単に話せば、道端に倒れていたところを保護されて育てられて今は手がかりがありそうな日本に住んでるってとこだ」

未だにミリアさんに助けられる前の記憶が無い、ミリアさんがあれこれ調べていたけども有力な情報も無かったって言ってたし。ただ、右目のこともあるしなにかしらあるのは確実。まあ、過去なんてあそこで暮らしたことだけあれば十分だがな。

「じゃあ・・・」

「だから保護してくれた人が架空の戸籍を作ってくれた、もちろん迷惑かからんように繋がりには消したからな。調べても意味無いのは当たり前だ、これでわかった？」

正直なところ、相手が「更識」だからここまで言っただよな。敵視されたら敵わないからな、これで16代目にでも「安全」ってのが伝われば良いんだがな。もしダメならこの町から出なければいかん。

「寂しくないの？」

「寂しくないと言ったら嘘になるが、まあ、今が楽しいからな」

事実、日本に来てからは普通の中学生として生活ができた。イギリスでの生活も楽しかったが、一般人としての生活も中々だ。たまに変装してセシリアの様子を見に行くがな。誰だ、シスコンとか言った奴。

「普通に接してくれるなら、嬉しいんだがな。悪いが俺が教えらるのほこれだけだ」

「ああ、そう。わかったわ、まあそれだけで十分よ。邪魔しちゃったわね」

「別に、心配事が無くなっただから問題無い」

さて、にんじん買いに行かなくなちな。

16・説明会だつてさ

あゝ、楯無に俺の素性説明おおまかなをしてから1週間。

「みなさん初めまして、並木野中学校説明会の司会を勤めさせていただきます。如月音羽です」

並木野中学校の学校説明会だ、もちろん司会は俺。結構な重大な役回りだが、これも経験だ。

お、一夏と鈴音ちゃんがかつち見てるな。あ、五反田食堂お気に入りの息子さんも来てる。

「さて、それではまず最初に紹介ビデオを見ていただきますよう」

さあて、と。スイッチはこれだっけ？えいや。

～上映中～

なんか「楽しい学園生活、やらないか？」とか聞こえたのは気のせいだ、きつと幻聴でも聞こえたんだよ。

良かった、ネタに気づいてる人いないや。

「さて、来年の春に来る皆さん。新たな学校生活はとても楽しみかと思えます」

てか、さつきから一夏がすげえキラキラした目で見てくるんだが。千冬さんが真剣な顔でガン見してきてる、正直怖いんだけども。

「是非、並木野中学校で楽しい三年間を過ごしてくださいね!」

これは正直な気持ちだ、そのためなら全力で働こうと思ってる。どうせなら全員で笑って過ごしたいじゃない?

「はい、こちらで運動着の採寸と注文書書いてください」
「靴はこっちですよ」

説明が終わり、ジャージや内履きの採寸などが始まった。ここから教師の仕事だ、やっと終わった・・・まあ達成感あるから良いか楽しんでくれたみたいだし。

「音兄、すげえ!」
「中々だったぞ」

荷物を纏めていたところに一夏と千冬さんが来た、一夏の頭を撫でる。

「そう言ってもらえると嬉しいですよ。一夏、待ってるからな?」
「おお、音兄といっしょの学校だから絶対行く!」
「こいつを頼む、また忙しいものでな」

やっぱり姉弟では大変だよな、ましてまだこの年。俺だってあそこで暮らしてなきゃ無理だしな、まあ、一夏相手ならいくらでもするけどな。

「任せてください。あ、もう手続き終わりました?」

「まあな、もうお前は終わりか？」

「ええ、機材は明日も使うんでこのままです」

「えへへ」

「うお、あんまし動くなって。まったく」

一夏が肩車を要求してきたので、まあ、仕方なくやりながら帰路に着く。笑顔はやっぱり良いものだなあ、千冬さんも微笑みながら見つめてるし。傍から見れば仲の良い家族かもな。

「あ、そつだ。サラミ多く買ったんで。貰ってください」

「そつか、すまんないつも貰ってばかりで」

明日も良い天気だと良いなあ

16・説明会だってさ（後書き）

ストックー日目です

次回はちょい飛びます

17・温泉つていいな（前書き）

そのうちにタイトル変えます、執事してる期間短いので

17・温泉つていいな

「ふは」

「ん」

お寒い季節になりました。え、飛びすぎだ？苦情はこっちじゃないよ。

「温泉はいいね」

「そうだね」

現在、雪が降る12月。近場の温泉に来ている、いや、銭湯が温泉つてのは嬉しいよな。

暖まるなあ、そうは思わないかね？あ、そういやセシリアも温泉好きだったな。

『はっふう』

お約束でタオルを頭の上に乗せて湯船でくつろぐ、今頃は千冬さんも女風呂でゆつくりしてるだろう。

いや、温泉に入ってゆつくりできるって良いねえ。誰だ、爺くさいって言った奴。表に出ろ。

「音兄？」

「ん？どうした」

そっぴや楯無は冬休み中にロシアで特訓って言ってたなあ、なんでも最近聞いたんだが「国家代表候補生」らしい。もちろんISの、なんで日本にいるのかって聞いたら、「早いうちに日本に慣れてお

くためよ」「らしい、てかその年で候補生とか凄いな。

「音兄の首のバーコードって何なの？」

「ん、ああ。ちよつと落書きされてな、中々取れないんだよ」

これは嘘だ、流石に普通の子供に俺の身体のことを教えるわけにもいかん。というか絶対に教えられないだろ常考。一回スキャンしたら「キャベツ日替わり特価 一玉58円」って出てきて凹んだが。まあ、右目が関わってるのはわかるけどなあ。

「あはは、油性ペンでやられちゃってね」

「音兄、油断するからだよ」

いや、これは見せないようにしなければなあ。そういやmk?にメール来てたんだよな。「候補生の養成学校に入りましたわ!byセシリア」って、元気そうで良かったなあ。

「そろそろ上がるぞ、俺がコーヒー牛乳を奢ってやるう」

「やったあ」

「おいおい、走らなくてもいいぞ」

はしゃいで更衣室に走る一夏を追いかける、滑るから危ないぞ。俺だって一回経験がある、あれは痛い。

「ああもう、こら、大人しくしろ」

「はい」

バスタオルで一夏の髪を拭く、この年の子供ってのは元気なものだからな。はしゃぎたいのはわかるが風邪ひいたらいかん。以外に体力持って行かれるからなあ、一人暮らしの場合は致命傷だし。った

く、動くなつてのに。

「おばちゃん、コーヒ―牛乳一つ」

「あいよ」

番頭のおばちゃんに100円を渡し、それを受け取る。他の銭湯は120円だけどこは安いんだよね、しかも温泉だから一石二鳥。身体も暖まつたし、一夏は着替えて俺の隣にいる。

「ほい、あつちに座つて飲めよ」

「うん、ありがとう！千冬姉、音兄がくれた」

休憩室のソファ―に座っている千冬さんへと寄つていく一夏、千冬さんも嬉しそうな一夏を撫でていた。

滅多に帰つてこれないし、帰つてきても数日でまた仕事に行つてしまふ。千冬さんも中々の苦勞人だ、その分生活スキルが欠如しているのも仕方あるまい。

「いつも済まないな、音羽」

「いえいえ、俺が好きでやってるんですし。気にしないでください」

「ぶは、美味かつた」

「ふふ、そうか良かったな。では帰るか」

「そうですね、一夏。荷物纏めておきな、ビン置いてくるから」

「うん、わかつた！」

場所は変わり、雪が降る帰り道を三人で手を繋いで歩いていた。真ん中に一夏、右に俺、左に千冬さんだ。楽しそうに話す一夏の話聞きながら俺達は雪景色の中を帰宅した。

17・温泉つていいな（後書き）

あ、タイトルとか良い案あつたら教えてくださいね！

18・見知らぬ女子には二度会っ(前書き)

短いです、はい

18・見知らぬ女子には二度会っ

あれから三日、千冬さんはまた仕事へと出かけていった。ドイツから帰ってきてても一夏を養うために大変みたいだ。

「うゝ寒い」

昨日は冷え込んだおかげで道路は凍りついていて転ぶし、それを近所の子に見られて笑われるし。

正直、冬爆発しろな感じ。いや、鍋が美味いから無くなったら困る。

「イギリスよりやっぱ日本は寒いわ、あゝ冷える」

イギリスは気候の関係で暖かいんだよね、その分日本は四季がはっきりしてるからめっさ寒い。

いくら上着着てても慣れなければきついなあ。

「わっ、避ける！危ない！」

「は？何？」

いきなり横から同い年くらいの子が道路を、滑ってきた。いや、正確には転んで滑ったが正しいか。

って、危ない！

「きゃあ！」

「ふぬわあ！？」

真横から来たため、どうにか受け止めようとするも結構な加速だっ

たためにそのまま倒れこむ。

うわ、背中が冷たい。なんとか受け止められたけど、これ、やばくね？

「む、むう」

「だ、大丈夫か？」

俺が押し倒されている格好なんだよね、って早く起きねば。誰かに見られたら色々終わる。

「す、済まない」

どうにか二人揃って立ち上がる、どうやら雪が付いているのは俺だけみたいだ。

怪我も無いみたいだし、まあ、結果オーライか。

「別に、怪我なくて良かったよ」

長い黒髪、すらつとした肢体。どこか格好良い女の子っていうのがその子の第一印象。

ちなみに俺は髪を切って短髪だ、って誰も知ったところで嬉しくないか。

「た、助かった。ありがとう」

「いやいや、俺は如月音羽。君は？」

見たことない制服だが、どこの学校の人だろうか？

「私は・・・雅^{みやび}、いきなりぶつかって済まない」

「良いつて、じゃあ俺はここで。雪道は気をつけてな」

慣れないと転んで骨折つてのもありえるからな、町内会長のおばさんもそれで今病院通いだし。

「ま、待ってくれ。礼をさせてくれないか、流石にあれだけしておいてそれではどうもあれだ」

「気持ちだけで十分だって、どうしてもってんなら誰か他の困ってる人を助けてあげて」

善意というか、俺の癖というか。困つてたりしたら誰でも助けに入ってしまう、それこそヤから始まる職業の人が相手だろうが。まあその時は銃だされたけど、軽い脅しに引っかけられて助かったが。

さあて、買い物行かねば。

今午後9時、買い物を終えて公園の前を通りかかると、雪がかかった椅子に座っている雅を見つけた。
絵になるなあ、と思いつつ通り過ぎようとしたら。いきなり雅が目の前で倒れた。

「おい、大丈夫かよ？」

「あ、音、羽・・・」

それきり口を閉じ、意識を失った。額に手を当てると熱い、これは・・・まったくもう。

気を失った雅を抱きかかえて、俺は一目散に自宅へと走った。

「まったく、熱あるなら言えよな！」

「む、くう。・・・ここは？」

「俺の家だ、熱あるんならなんで歩き回ってるんだよ」

寝言だろうか、「亡国」だのなんだの喋ってたが。というか、親は何してんだ。具合悪い娘を出かけさせるなんてなあ。

「お前ん家ってどこだ？電話かけて連絡するから」

「私に、親はいない。迎えは1週間後に来るが」

つまりは、昔の俺みたいなもんか。ずっとは無理だけどしくらいなら大丈夫かな？

「だったら、それまでここで休んでろ。その様子だと今帰るとこ無いんだろ？」

「いや、だが」

「病人は素直に言うこと聞きなさい、安静にしてろ。いいな？」

「わかった、二度もすまん」

その後、おかゆを食べさせ。寝かせた。既に時計は10時を回っていた、まあ、着替えさせて薬飲ませてとかやってればこうなるか。さあ、俺も寝るか。ベッドに寝かせてるから俺はソファーだが。

「おやすみ」

あ、明日の朝食の準備忘れた・
・
・
・
Z
Z
Z

18・見知らぬ女子には二度会つ（後書き）

オリキャラではありませんよ、しっかり原作キャラです。

ストック・・・そろそろやばし

19・結構落ち着かない

「む・・・朝か」

「おう、おはよう」

え、もう8時なのに学校はつて？12月、しかも気づけば27日。冬休みだから別に大丈夫なんだよね、しかも生徒会の仕事は無いし。それ以前に年越しで忙しい、雅がいるがこの時期だし、どうせなら迎え来るんだつたら一緒に鍋でも囲もうかと思ってる。

「具合はどうだ？」

「まあ、なんとかな」

顔の赤みも引いて元気そうだ、医療用のナノマシンが効いたかな？
(錠剤薬型という素晴らしい仕様)

ちなみにこれも暇を持て余した結果だったりする、暇人って凄いね。ウイルスや細菌を直接特殊磁場で倒すというもの。海外企業にライセンス生産させたら金が凄い入って来てるんだよね、まあ余裕で一人くらい養えるくらいに。

「あゝ、こたつは良いねえ。はい、あゝん」

「確かに良いものだな、つておい」

「まだちゃんと治ってないんだから、ほら」

「む、むう・・・あ、あゝん・・・／＼」

ふむ、素直でよろしい。なんで顔が赤いんだ、熱はもう下がってるはずなんだがな。

まあ、卵かゆでも食べてれば大丈夫だろ。栄養付ければおのずと元気になる。

「美味いな」

「そうか、そりゃあ良かった」

料理作ってる人間にとって、美味しいって言われるのを見るのが一番幸せなんだよね。また作ってあげたいって思うし、嬉しいし。

「さてと、大掃除しないとな」

「ならば私も手伝う」

「そうか？無理しなくても良いぞ」

「無理などしない、せめてそれくらいはやらせてくれ」

どうやら、引かないみたいだな。仕方ない、はたきでもやってもらうか。見せられない物もあるからな。ずっしりと重いあれとか、リ
ンゴとか。炭素に4がつくのもあるんだよねえ。

「じゃあ、これではこり落としてくれ」

「わかった」

それで、さつきから「ふん！」とか「てやあ！」とか言っってはたきを振り回す雅。めっさ元気になってるなあ、良い事だ。

「~~~~~」

掃除機で落ちた埃を吸い取る、荷物とかもそう無いからすぐに終わるんだけどね。男の一人暮らしなんてそんなものでしょ、俺の場合は工具とかが結構あるけども。

「ふっ、こんなものか」

「そうだな、お疲れ様」

気づけば家の中の掃除終了、やっぱ二人だとすぐに終わるものか。一軒屋に一人で住んでるつてのも結構大変なものだろうが、ああ、今は雅もいるな。

「これほどまでに家事は大変なものなのか」

「いや、掃除だけだし。それ言ったら他のどうなるよ」

炊事・洗濯・買い物・税金・家賃・学費・・・まだまだあるぞ、この程度で大変とか言ったら生活できないんだけど。主に俺が、まああそこでの生活スキルを身につけてたから問題無いけどさ。

「む、そうか。他にすることはあるか？」

「いや、あ、風呂入る？まだ入ってないだろ」

汗かいてたし、いくら着替たとはいえ身体は洗ってないからなあ。え、服はって？お察しください。

「私と一緒にか？」

「な、なんでそうなる。使い方わからないとか？まさか」

いや、今の時代使い方分からない人はいないと思うが。アフリカの極地でも普通に使えてるご時勢なのに。

「ふっ、そのまさかだ！」

「そこ誇れるとこじゃないからな！？なんでそんなに自信満々なんだよ！？」

しかも言い感じのどや顔っていう・・・分からないのなら仕方ないかってんなわけあるか！

「はあ、使い方教えるから一人でできませんかね？雅さんや」

「残念ながら機械音痴でな、別に襲いもせんだろ」

「いや、信用してくれるのは嬉しいけど。それとこれとは違っからな？」

カポーン、ガラガラ

「ほら、動くな」

「か、かけるなよ？いきなりザバーはダメだぞ？」

無視、あの頭につける皿っぱいのを買う必要なんてないんだ。我慢すれば良いし、それ以前にあの爽快感は捨てがたいからなあ。え、無理な奴は無理だって？家は家、よそはよそだよ。

ザバー

「ふみやああ！！！」

「おし、綺麗になった」

俺自身、偽装のために髪を長くしている分。人の髪を洗うのは結構得意だ、なにせサイドテールにしてるからな。雅も負けないくらい長いが。というか、結局俺が入浴してる最中に入ってきたから結果的にいっしょだよ。

「ううう、やめると言ったのに・・・」

「こうしなきゃ泡残るだろうが、少しでも残ってたら大変なんだぞ？」

セシリアもそれで苦勞してたからなあ、たまに一緒に入れて「主人命令」でやらされたが。

「はふう、良い物だな」

「そうだろ、風呂はやっぱり良いよなあ」

一夏も風呂好きなんだよなあ、そのうち温泉巡りでもできたら良いなあ。あいつが高校生くらいになってからだが。

その後、風呂上りにアイス食べたりしてゆっくり過ごした。だってすること無いんだもの、他にどうしろと？ 買い物も済ませたし、年賀状は裏ルートでオルコット家に送ったし。二人でおこたにたれてるしかないじゃないか。

「zzzz・・・」

「ははは、寝ちまったか。俺も寝よ・・・zzzz」

ちなみに今、午後2時である。

19・結構落ち着かない（後書き）

まさかの風呂シーン・・・こんな頭で大丈夫か？

A・大丈夫じゃない、問題だ。

と言う話は置いておいて、はい、まだストックです。体調は良くな
ってきているので日曜にはゴーストも更新できるかと。

あ、タイトル案は募集してるので。良いアイデアあったらお願いし
ます

20・可愛い娘にはおしゃれをさせよ（前書き）

えゝ、リア充爆発しろ回です

20・可愛い娘にはおしゃれをさせよ

「あ、朝？あれ、もしかしておこたでそのまま寝ちゃった？」

しかも雅がなぜか抱きついてきてるし、どうしてこうなった。

おこたの別方向で座ってたはずだが、いつのまにか雅が俺の方に・・・熟睡してたから良かったが。なあ？

「性欲を持て余す」

まあ、それが言いたいだけだ。というか、動けん。暑いし。うあゝ。

「すう、くう」

「・・・・・・」

しかも俺の自慢のサイドテールを枕にしてるし、動けないんだが。てか今何時？・・・・・・おわあ、一晩あけたのにもう11時だつてさ、何時間寝てたんだよ。

「おゝい、雅。起きろ」

「むにゅ・・・む」

眠そうに目をこすりながら雅が目を覚ます、できればもっと早く起きてほしかった。

というか息がかかる距離だから、無駄にドキドキしてしまう。俺に某流さんみたいな耐性は無いよ！？

「おはよう」

「ああ、おはよう。そんな時間では無いみたいだな」

ささつと朝食（昼食と兼用になった）を済ませて、居間のカウンタ―に鏡餅を乗せる。

これくらいしか年越しの準備ですることが無い、あ、雅の服が必要か？いつまでも変装用の服を着せてもらえないし。

「私は要らん」

女の子なのに興味ないとはこれいかに、ジャックや楯無だつて校外の仕事のときは結構可愛いの着てたぞ。まあ、俺は機能性重視だからわからんが。それでも執事をやってた身だ、仕立てくらいはできるぞ。

「ま、それずつとつてわけにもいかないだろ。さあ行こう、今すぐ行こう、もう行こう。というか、行くぞ！」

「待て、いいから、私は・・・うにゃああああああ！！」

雅の手を取り、なんでも揃うと有名な駅前ショッピングモール「レゾナンス」へ向かう。

日用品からアウトドア、ブランドにスイーツ、家具や雑貨まで多種多様な店があるんだ。

昔から言うじゃないか「可愛い娘にはおしゃれをさせろ」って、違う？細かいことは気にするな。

「わかったから、速度を落とせ！地面に足を付かせてくれ！！」
「急がなきゃ、年末だから物が無くなるんだよ！」

それ以前に、モノレールの発車時間がギリギリなのもあるけどね。
どこかの借金執事が自転車ですに追いつくなら、俺は生身で追いつけるんだよ！気合があれば！

20・可愛い娘にはおしゃれをさせよ（後書き）

す、ストックです。そろそろマジでやばい

21・考察したっていいじゃない、人間だもの（前書き）

明日くらいにタイトル変えます

21・考察したっていいじゃない、人間だもの

あれから2日、え、レゾナンスでどうなったって？似合うの買ってあげただけだなにか？

飛んでる？知るか、個人情報に関わるので（ry

「イエーイ、ハッピーニューイヤー！！」
「い、イエーイ！」

なんか雅もノリが良くなってきた、まだまだ硬いけどもね。というか、引越してから初の年越しじゃね？

まさか見知らぬ少女と向かえることになるとは誰が予想できただろうか、俺は無理だ。

「ふむ、これが雑煮というものか」
「そうだ、といっても俺流だけだな」

そっぴや、同じ雑煮でも地域で違うらしいな。餅の形からだしまで、ちなみに俺は塩味にしてる。

餅と塩が合うと思うんだが、なぜか一夏は好かないらしい。ジャツクは美味い美味い言って10杯くらい平らげていたけども、それを見て楯無と苦笑いしていたのは忘れられないな。

「塩か、なるほど。さっぱりして丁度良いな」
「だろ？他の家では白味噌だったりするみたいだけだな」

調味料は基本的なものから地方のものまで揃ってたりする、もし転居することになったらなんて考えていないくらいに。もしそうなら

たらどうしようとしてるんだろうね。

そついや、俺が訳ありの身体のはずなんだがここに来てからも三ヶ月過ぎたんだよな。

「うゝん、まあ良いか」

「？」

まあ、今はこの平和な時間を享受できれば良いか。

「おかわりを要求する」

「普通に言えば良いんじゃないか？別にいいけど」

たまに軍みたいな言い方を雅がしてくる、一体どこに所属してんだこいつは？仲間とやらを一度見てみたいものだ。まあ、野暮な真似はしないけども。

「そついやどこで仲間と待ち合わせなんだ？」

「あの公園だ、財布を落としたのは不覚だったがな」

だからなのか、ってすっかりしてるイメージだったけど以外にうつかりなんだな。

「何か失礼なことを考えていないか？」

「いんや、何にも・・・ひとまずその拳を下ろしてくれないか」

俺、何もしゃべって無いんだがなあ。たまに一夏も考えてること読まれてるけども、俺も顔に出てるのか？このポーカーフェイス（自称）は意味無いのか・・・、今はやってないがな！

「自称では意味無いと思うが」

「俺って顔に出やすい？」

「ああ、見事にな」

まあ、仕事モードに切り替えないとそりやそうか。だって普通にしたら思考垂れ流しだもの、まあ困らないけどな。

「それはそれでどうかと思うがな」

なんか雅が言っているが、だって常時仕事モードだと疲れるんだもの。たまには休みたいじゃん、今は仕事モードになるときは少ないけどさ。

「そーいや、雅は俺的に理想の女性かもな」

「はひ！？ど、どういうことだ！？」

「いや、最近の勘違い女みたいじゃなくて対等に接してくれるからさ」

なんでそこで顔を赤くするのかわからん、最近は多いからなあ。ISを動かせる女性が偉いわけではなくて、ISが動かせる性別だから優遇されているだけだし。

まあ、世界中にたった467機しかない兵器のおかげで女尊男卑社会になるのもおかしいが。

60億超えた人類の半分、その中のたった467人しか乗れないんだ。しかも研究用に使われてるコアが多いから実働数はもっと少ない。それなのに女性だからって偉ぶる人が多い、百歩譲っても優遇されているならばそれなりの行動も求められるはずだ。

「なんだ、そういうことか。ドキドキして損した」

「ん？なんか言ったか」

21・考察したっていいじゃない、人間だもの（後書き）

さあ、飛びます！飛びます！

22・早い別れ（前書き）

ふうへへへい、完全復活！

22・早い別れ

「ん、あの人が仲間さん？」

「ああ、なにかと世話になっている人だ。不器用だがな」

1月3日、雅が言っていた「仲間が迎えに来る日」。彼女を助けたあの公園のベンチに新社会人くらいのロングヘアのスーツを着た女性が缶コーヒを傾けながら座っていた、女性なのに堂々と足を広げているのはどうかと思うが。しかもスカートなんだし。

「礼子、来たぞ」

「あら、早いね。ん、その子は誰？」

この人が雅の仲間か、というか何故俺が着いて来ているかと雅に「方向音痴でな、案内してくれないか？」と言われたんだ。まあ、こ近辺は地図見ても入り組んでわかりにくいからな。最初にぶつかったときも片手に地図持ってたし、俺だって最初にここに越してきたときは迷ったんだよねえ。

「ああ、命の恩人だ。倒れてしまったところを助けてもらい、今日まで世話になった」

「ふふふ、お優しいのね。礼を言うわ」

そう言って名紙を差し出してくる、え〜と・・・IS装備開発企業『みつるぎ』の渉外担当の巻紙^{まきがみ}礼子^{れいこ}さん。企業の人か、道理でスーツがビシッと決まっているわけだ。さっきの大股開いてた人と同一人物とは思えないほどに。

「あ、いえ。当たり前のことをしたまでです、これ名紙です」

名紙を出されたら交換するのが一流のビジネスマンの常識だ、自然にできるようにならなきゃ後々の商売にも影響が出るからな。ちなみに俺が出したのは海外の企業にライセンス生産させている医療用ナノマシンのオーナーの証明書を兼ねている。ちなみにオーナーとしての俺に手を出すと、委託先の企業の私兵が地の果てまで追いかけてくる。

「まあ、あなたが！人は見かけによらないわね」

「案外そんなものですよ、さてと。それじゃあ俺はこのへんで」

あんまし長い時間も居られないでしょ、企業の人だったし。どうやらいっしょに鍋を囲むこともできないだろう、企業は24時間365日止まらないからね。個人経営ならば別だろうけどな、まあ学生程度が社会人を誘うのもおかしい話だから自重しよう。

「お、音羽。その、これ」

「ん？」

なにか恥かしげに雅が青い菱形の宝石が付いたペンダントを渡してきた、これって雅がずつと身に着けてたものじゃないか。なんでそれだけ大切にしているものを俺に？

「私の、感謝の気持ちだ。受け取ってくれないか」

「……わかった、元気でな」

「勿論だ、それではな」

「おう、さよならは言わないぞ。またいつか会おう」

まさか俺が見送る側になるとはな、いつの間にか公園の入り口に横付けされていた高級車（あんまし詳しいの知らないんだよね）に雅

が先導されて乗っていく。礼子さんが何回も頭を下けている、中学1年に頭を下げる社会人って……俺も返しはするけどな。

「ありがとうございます、それでは」

雅が車内から名残惜しそうに見つめてきていた、なに泣きそうになつてんだか。いつもみたいに気が強そうにしてるよな、そんな顔されると調子狂うよ。仕方ないので笑顔で手を振る、どうせなら笑顔で分かれたいじゃないか。

「（音羽、ありがとう。絶対にお前のことは忘れない！）」

「（俺だって忘れないさ）」

読唇術で最後の会話を終えた瞬間、雅を乗せた車が発車する。短い間だったけど、俺は楽しかったぞ雅。

走り去る車を見送り、俺は踵を返して家路へと向かった。

22・早い別れ（後書き）

さあさ、飛びますよ！

23・中生活ってそんなもの(前書き)

飛びました、以上、報告終了

23・中学生活ってそんなもの

そついえば気づけばもう中2である、中学は早いと聞くが本当だったな。転校してきたと思ったらすでに一年経過している……。いくらなんでも早くね？とは思うが、そんなものだろう。まあ、一夏や鈴音ちゃんが入学式で可愛かったとだけ言っておこう。

「でだ、なんで俺が生徒会長になつてんだ？お前だる常考」

「まあ、投票結果がそうだったんだし。良いじゃない」

そう、並木野中学校の生徒会役員はどこぞの私立学園のように一般生徒の投票で決められる。もちろん自分から立候補することもある、俺はしなかったけども。だって、面倒なもの。それに教師からの要請で生徒会在籍も一年の間という期限付きだったからな、それが過ぎたのだから特に用事は無いし。

「それなのにお前が他薦するしさあ、俺、お前に立場説明してるよな？」

「そうね、でもただの一生徒を他薦しちゃいけないなんて規則に無いわよ」

こいつは何かと穴見つけて俺に何かやらせようとしてくる、ちなみに楯無は副会長だ。ついでにジャックは書記……。なぜ一年のときと同じメンバーなのかまったくもって不思議である。というか、一夏がフラグメーカー過ぎて困る。今は関係無いか。

「（・・）」

「m9（^ ^）」

A Aで表示したら余計イラついたが、いつものことでもあるため諦める。某炎の天使が言っているが人生諦めも大事だと思っただ俺はすでにこいつが何か笑っているときは特に。今までそれで何回も巻き込まれた・・・なんか数年後に今と同じようにため息ついている未来が見えた気がする。そんな未来幻想、俺が打ち砕く！無理っぽい気もするけども。

「まあ、良いんじゃない？身の安全は確保されてるし」
「そりゃあ、な」

生徒の長になったことでもし何かしらの組織が俺を襲撃しようものなら、委託企業から極秘に派遣されている屈強な兵士さんが見事なまでに撃退してくれる。まあ、警備員が丁度配置換えのときに入ってきたわけなんだがな。もしかしたらISでも使われないかぎり無理かもしれないな。

「さあて、書類も書き終わったし。帰るか」
「ホントに作業早いわね」

楯無が呆れた顔で言うてくるが仕方ないだろ、イギリスに居たときは書類20枚分とかを5分で片付けるとかしなきゃいけないかったかな。今となつては役に立つ技能だけど、習得するための地獄は思い出したくない。

「そうだ、今日は五反田食堂月1サービスの日だ！じゃあな！ふぎや」
「どうせなら私も連れていきなさいよ、私だってお腹空いたんだから」

楯無は何かと俺に着いて来る．．．．別に悪い気はしないが、と
いうか窓からダイブしようとした人間の首を片手で掴むって、く、
苦しい。

「わ、わかったから。ぐ、ぐるじい」

いくらなんでも首を掴まれてぶら下げられている状況ではどうしようもない、く、苦しい．．．．酸素が足りない！酸素．．．

「そ、そう？やったあ．．．．あ」

「のうあああああああ！！」

ちなみに生徒会室は、三階である。嬉しそうに両手を楯無が合わせたと同時に音羽が落下していったのは言うまでもない。

「．．．．お前なあ．．．」

生徒会室から突き落とされた後、奇跡的に怪我することもなく復活した俺は仕方なく楯無の手を引き歩いていた。確実に18mは落ちたと思うんだ俺は。

「ごめんね」

「お前絶対反省してないだろ！」

まあ、今から飯だつてのに本気で怒ることも無いけどさ。それに楯^こ無^いのイタズラ好きは今に始まったことではないし、その度に俺が被

害こうむってるがな。本気で人が嫌がることはしないから嫌いでは無いがな。

「親父イ、業火野菜炒め定食二つ頼む」

「あいよう、ありや。彼女かい？」

「学校の友人ですよ」

何故そうなる、てか楯無はどうして顔を赤くして・・・なんだろうか？まあ良いや早く丁度いい席に座ろうか、ちなみに月1のサービスデイには全てのメニューが30%増量という素晴らしい日だ。まあ、それ以外の日でも良く来るけどな。何気に雅はかぼちゃ煮定食が大好きだったんだよね。

「あ、音羽さん」

「ホントだ！音兄」

声がしたほうを向くと座敷席で一夏と弾が丁度夕食を食べていた、仲良いなお前ら。弾つてのは一夏の中学でできた友人で、俺が気に入っているこの五反田食堂の長男である。家族揃って綺麗な赤髪である、弾は将来有望だな良い旦那さんになれるはずだ。

「おう、お前らは飯か」

「音兄も飯？楯無さんもいつしよなんだ」

「まあな」

そのころ楯無は

「楯無さんもしかして？」

「そつなのよ弾くん、でも、ねえ？」

「あゝ、頑張ってくださいね。応援してますよ」

なんか二人が揃ってため息をついていたが一体どうしたんだろうか、一夏も俺と同じく首をかしげる。

まあ、さつさと配膳されたこれを食べるとしましょうか。冷めるといけないしな。

何故か弾が俺と楯無をなにか優しげな目で見てくる………？

「いただきます」

「いただきます」

なんで楯無は俺の隣に座ったんだか、向かいの席で良いだろうに。お、やっぱり美味しいなこれは。

24・王室認定騎士（前書き）

初・・・・・・・・・・になにかはご自身で確認ください

ちよいグロ注意

24・王室認定騎士

P L L L P L L L

とある平日の放課後、居残りで会計事務をしていた俺・・・別に何かしら狙ってるわけではないが・・・こういうのって男の仕事だろ？あゝエクセルめんどい、便利だけどもめんどい。

P L L L P L L L

そりゃあ、与えられた命令しか実行できないから自分で操作しなきゃダメだもんなあ。まあ、mk？はアメリカの軍事衛星乗っ取れるくらいの性能あるけども・・・ああ、疲れた。

P L L L P L L L

「ああもつ、さつきからなんだよ！もしもし？」

通話ボタンを押し込み耳に当てる、このものつそい大変な時間に楯^あ無^いは何の用なんだよ。

いやまあ、残ってた仕事を引き受けたのは俺なんだけどもね。はて、何用か？

『更識楯無は預かつた』

ツー ツー ツー

さて、作業再開するか。えゝと遠征の費用は野球部とサッカーな、バス代が一人・・・。

PLLL PLLL

「だからなんだよ、仕事の邪魔すんな。くだらん冗談言つ暇あったら通常業務に戻れ」

『冗談ではn』

ブツ ツー ツー

あいつは何してんだ、更識の使用人に演技させるなんてな。暇なら簪ちゃんと遊んであげろつての、あ、簪ちゃんってあいつの妹な。同じ水色の髪で、女子には珍しくヒーローアニメが大好きな子だ。IS/VISで引き分けたのは記憶に新しいところだ。

PLLL PLLL

「ああもう！いい加減に『パンツッ！きゃああ！』・・・何？」

電話越しに聞こえる銃声、演技でもなんでもない楯無の本心からの恐怖が込められた悲鳴。反響して響く音、錆びついているのだろうか、換気扇の動作音が聞こえる。

『早く来ないと嬢ちゃん頭の風通しが良くなっちゃうよ？』

「どこだ、金はいくらでも出す。教えろ」

どうやら、ガチであいつは誘拐されたらしい。不意打ちでもされただろうか、それにいくら更識の者であってもあいつはまだまだ発展途上だ。銃まで持ち出されたら下手な真似はできないだろうしなあ。

『8億だ、東野第三倉庫に來い、サツには知らせるなよ?』

「わかった、約束するから手を出さないでくれ」

まあ、交渉相手が俺だつて時点で結末は見えてるんだがな。すぐさま窓から飛び降り、一路、自宅へと走った。渡すわけないが、一応持つていく必要はあるからな。

「来たぞ」

場所は東野第三倉庫、昔はかつての大企業の製品流通の拠点のひとつだったらしいが今ではその面影も無くさびれたただの建造物に成り下がっている。目の前の貨物出入り口の大きな鋼鉄製の扉がところどころ腐食して穴が開いているのが証拠だ。

「おや、マジでこいつ来たぜ。よし、金寄越しな」

「先にそいつを返してもらおうか、10億持つて来たんだ。それくらい良いだろ」

テンプレないかにもな格好の男が5人リーダーの女が1人か、その内の2人の間に手足を鎖で拘束された楯無が涙目で居た。

一人がアタッシュケースを開き、確認していた。下手に動けば俺も危ないか、流石にMP7を4挺向けられてたらきつい。

「リーダー、マジで10億入ってるっす」

「そうか、ならもう「用事は無いってか？」な、ぐあっ！」

右腕に巻いていた時計から、軍用対物ライフル「バレットM82」を召還し視界に入る全ての銃器を撃ち砕く。その間、2秒。

「交渉相手が他の奴だったら良かったのにな、その作戦」
「てめえ、こいつがどうなっても良いのか!？」

銃器が使用不能になり恐怖のあまり手下らしき奴らは走って逃げていった、誰が逃がすかよ。

まあ、俺のこれがばれるのはダメだから手下は逃がしてやるか。流石に弾の無駄撃ちはしたくないからな。

「音羽あ……」

見たことのないほどに怯えている楯無の頭部にデリンジャーが当て付けられていた、リーダーと呼ばれていた男の顔は勝ち誇ったような顔をしているが……どうするといつかねえ。

得意げに俺にデリンジャーを握っていた右腕を向けてくる女。

「残念だったな小僧、少しばかりヒヤツとさせられたぜ」
「ああ、右腕はもつとヒヤツとしてるんじゃないか？」

なにせ肘から先は既に無くなっているのだから。

「……な、ぎゃあああああ!!」
「王室から騎士の称号貰ったのは伊達じゃないんでな」

倉庫の奥、塗装が剥げて見る影もないコンテナにデリンジャーを握ったままの腕が深紅の液体が床のコンクリートを染め上げていた。

なんとか楯無に血はかかってないらしいな、そう狙ったからだけだな。

「動くなよ」

楯無が頷いたのを確認し、枷となっていた合金製の鎖を撃ちぬく。いくつかは短い鎖が残っているがこれで動けるはずだ、もっとも派手に金属片が弾けていったがな。

「音羽……！怖かったよ、うう……」

「まったく、怪我は無いか？俺が来たからには大丈夫だ」

泣きながら楯無が走ってくる、まったく、心配かけやがって。てか、俺より身長上だろうに……。

更識の１７代目がこれでいいのか？さて、仕上げ行くか。弾装を入れ替え、銃口を女に向ける。

「お前の負けだ、大人しくお縄になりやがれ」

「ふざけるな、男に負けるだど！？しかもガキに……んなことあってたまるかああ……！」

瞬間、視界が閃光に包まれた。思わず危険を感じ楯無を抱き寄せる銃口は向けたままだ。

光が拡散し、目の前には一機のISがあつた。この世界最強と言われている、元宇宙用マルチフォームスーツ……その日本製第二世代の最高傑作「打鉄」が居た。防御力、汎用性の高さによりラファールと並ぶ量産機だ。

「へっ、どうよこいつは！ああ？」

面倒なもの持ってやがったなこいつ、そりゃあ生身でISには普通なら勝てないからな。

製作者も言ってるやがる「ISに勝てるのはISだけ」ってな。とはいえ、最強なだけであって完全では無いんだよね。それに見てみればところどころ部品が緩んでいる、勝機は……ある。

「音羽ぁ……」

「なんて顔してんだよ、まあ、少し待ってる。すぐにカタつける」

そう言ってる俺は、いつもかけている赤縁の眼鏡を外して投げ捨てた。

24・王室認定騎士（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽の現時点の資産は億単位

25・死神の瞳（前書き）

音羽キターーーー！！な話です

25・死神の瞳

「^{リーバースアイ}死神の瞳起動」

イギリスでセシリアと共に誘拐されたときに発現した、空間展開型
擬似ハイパーセンサー。

起動すると顔の前面右半分が黒い影に包まれ瞳が紅く発光する、理論上はドイツで試験的に使われている越界^{ヴォーダン・オージェ}の瞳と同じで動体視力の強化による相対的な反応速度上昇による戦闘能力強化である……。らしい、実際は良く分かんがな。ひとまず「解雇」の理由である……。

「てめえの腕も貰うぞ！」

「残念ながら、渡す気は更々無いんでね！」

女が人一人はあろうかと言うほどの近接ブレード^{コール}を呼び出し、空気を切り裂きながら迫ってくる。その刃には女の歪んだ笑みが夕日に反射して映りこんでいた。

「……………」

ガキイン

振り下ろされた凶刃は横から蹴り上げられ、音羽の身体を数ミリずれて地面へと突き刺さる。その一撃生身の人間に逸らされたことに驚愕の表情を浮かべてしまった。それが今の音羽には貴重なチャンスであるというのに。

「なっ！？つあぐうあ！」

首筋に冷たい感触を感じた途端、痛みを感じた。血は出ていないがシールドエネルギーが大量に減少していた、思わず腕を振るう。しかし、既に離脱していた音羽に拳が当たることも無く空しく空を着る音を響かせえるだけ。ハイパーセンサーで視認したのは大型のチェンソーを両手で構えた自らの腕を奪った憎い少年。もはや、プライドなど消え去り音羽への復讐しかなかった。それに致命的な損傷を負っていることにも、既に打鉄のPICは半数が損壊しているのだから。

「はっ、知ってるか？やろうと思えばこういのでシールドエネルギーなんざ削れるんだぞ？」

「だったら、これはどうなんだよああ！？」

空中にIS用サブマシンガン「メルティ」が光の粒子を形成しながら現れる、瞬間、銃声。

音羽の居た地点一帯が着弾により煙幕に包まれた、女は狂ったように歓喜の声をあげる。

「お、音羽あ！！！」

楯無の悲痛な叫びが響いて反響する、女の銃口が楯無に向いた。

「残念だったなあ、彼氏を追いかけていきな！」

「彼氏になった覚えは、無いんだがね。まあ、それも悪く無いかな？」

ズガンッ

瞬間、女の身体が地面に叩きつけられる。その後ろには工事用の小型パイルバンカーを両手でどうにか抱えた音羽が立っていた、音を立てて杭を打ちおろしたそれには大量の銃創があった。パワーアシスト用のケーブルが切断され、只の金属の重しに成り果てる。

ズガンツズガンツ

「あゝあ、これも使い物にならなくなったか・・・」

絶対防御のエネルギーシールドを突き続け杭先が曲がったパイルバンカーを投げ捨て、女の上から飛び降りる。既にISは強制解除され、気絶した女がISスーツを纏った姿で倒れていた。それを見た音羽はどこからか注射器を取り出し、女の失った腕の切断面へ針を刺す。中身の液体が注入される。

「それは？」

「再生促進医療用ナノマシン、こいつの腕も半年で元通りだ」

流石に人の腕を奪うのは嫌だからな、とはいえ苦しい思いはしてもらうがな。さて、と。早めに失敬しないと警察が五月蠅くなるな。ささっと証拠隠滅してこいつをどうにかしなければいけないな。

いつもはやる気の無い顔で渋々仕事をしているような音羽が、自分の命も省みず助けに来てくれた。
それこそ犯罪者に怖気づくこと無く、華麗に撃退して。

「ほら、帰るぞ楯無」

手を差し出してくる彼は今、この世界の誰よりも格好良く。そして、一人の少女に淡い恋心を抱かせた。

「うん！」

「ははっ、そう来なくっちゃ！」

この日、17代目更識楯無は人生で初めて恋をした。

「・・・・・・・・つく、ああ？生きてるのか」

目を覚ました女が最初に感じたのは左手に握らされた紙切れだった。それを倒れこんだまま開くとそこにある一文と住所が記されていた。

『アレンティア薬品 生活には困らないだろうからココ行け。話しは通したから手下といっしょにな、右腕は半年すりゃ治るからそのつもりで。サツには通報してないから安心しとけ See you
：）』

「あん？ご丁寧に包帯まで巻いてやがる・・・・・・・・けっ、お節介な男だぜ。不思議と嫌な気分じゃねえけどよ」

25・死神の瞳（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽の腕時計は擬量子化格納領域装置、ある程度の物は仕舞える。
ライトな四次元ポケット、カップラーメンから対物ライフルやお湯
が入ったやかんまで入っているらしい

26・特別な存在（前書き）

最後の台詞の意味が分かる人は居るかな？

26・特別な存在

「あの、なぜ俺がここに呼び出されているのでしょうか」

誰もが真面目に授業を受けている平日火曜日、ある夏の日。見知らぬリムジンに「更識の者よりお話が」と言われ任意と言う名の強制でとある大豪邸へと連れて来られた。目の前には16代目楯無が鎮座していらっしゃる、放たれる気迫でさつきから手汗が止まらない。できるだけ平静を装っているが・・・多分、いや、確実に見破られている確信があった。

「ふふ、別に緊張しなくても良いわ」

「は、はあ。わかりました」

やっぱり見破られていた、分かりきったことだが実際に言われると結構悔しいな。こういう分野に関しては向こうがアドバンテージ大きいけども、なにせ対暗部用暗部なのだから。17代目あいつは全然だったかな、まあまだまだこれからだろう。

「いえね、娘を助けてくれた騎士にお礼が言いたくて」

イギリス王室で10年に一度極秘裏に選ばれる優秀な人物に与えられる国民栄誉賞のガチ版みたいなもの、特に戦闘能力や頭脳・電子機器技術などイギリス版マルチ分野ノーベル賞みたいなものでもある。団長や衛兵など分野それぞれに様々な称号があるのだが、その中でも単機での戦闘能力が認められた人間に与えられる。たかだか小学生程度が、と内密に騒がれたらしいが俺がそれに選ばれた。与えられた人間は軍で言う中佐階級レベル権限があるそう・・・何かつたときに限るが。

「そこまで知っていますか・・・」

「裏では有名よ？今は所在不明で死亡説まで出てるらしいけどね」

死亡説って・・・そりゃあ痕跡消して日本に来たけどさ、向こうの戸籍も別人になってるし。まあ、当たり前っちゃんあたり前か。セシリアには年賀状とか裏ルートで送ってるから大丈夫だし、死亡扱いのほうが助かる。

「それでね、お願いがあるの」

「な、何でしょうか。無理なものは無理ですが」

息を一度吸い、16代目がはつきりと喋った。その驚愕の内容とは・・・！！

「あの子を住ませて守って欲れないかしら、勿論バックアップはするから」

「あの、俺が訳有りの身体とか狙われてる可能性があるとかそこらへんの事情分かって言ってます？」

うなじにあるバーコードに、発見時の大怪我に右目のこれ。中二過ぎる感じがするが、ミリアさんが正体不明の組織から俺を守ってくれていたことからわかる。確実に俺は厄介な存在だと、それに裏の更識がそんな簡単に言っただけなのか？

「安心しなさい、更識が全力で協力してあげる。というか、死亡したって流れてるから裏でももう安心できるわよ？まあ、日本にいれば大丈夫だし」

「はあ・・・ひとまず考えさせてください」

いくらそうだとしてもすぐに返事できるわけが無い、というかこんなのが暗部に対抗できるのか？とか思いながら帰路についた、時計を確認すれば既におやつ時間を過ぎていた……。うわあ。

「それでは音羽様、お待ちしておりますとのことです」
「は、はい」

燕尾服を着た若い男の人が頭を下げ、リムジンを運転し去っていく。思わず癖で自分も腰を曲げて礼をして見送った。

「どうしようかねえ」

考察しながら空中に召還したヤカンからカップに紅茶を注ぐ光景はシニールだったに違いない、一杯飲みながら考える。うゝむ……。。

「どうしたの？」

「いや、楯無を住ませるのは困らないんだが。俺にメリットも有るし、でもあいつが嫌がるだろうし。年頃の女の子がいくら知り合いとは言え男と一つ屋根の下に居るってのもなあ」

「別に困らないよ？」

「そうか、本人が良いならなら良いかなあ……。っておわあ!？」

突然肩に回される華奢な腕、首筋にかかる吐息。聞きなれた声、これは……。

「お前か、驚かすなよ」

「ふふん、それが見たかったのだあ」

こいつは……まったく、心臓に悪いっての。まあ、嫌な気持ちにはならんけどさ。

「で、どうする？」

「もちろん、お世話になります！」

ビシッと敬礼する楯無、もとい新たな同居人。まあ、頑張りますか。毎日が騒がしくなりそうだけでも。

「あ、そうだ。音羽」

「あん？」

そおつと楯無が耳元で囁く。

「更識美月、それが私の名前。覚えてね？」

この日、俺は彼女の真名を知った。

26・特別な存在（後書き）

どうでも良い作品情報

どこでもできたての紅茶が飲める音羽、お茶菓子も常備していると
か

27・思いを馳せたら良い結果にならなかった（前書き）

なんと、PV70000越えにユニーク6000人越えてました。なにかお祝いしたほうが良いですかね？

27・思いを馳せたら良い結果にならなかった

「いや、新婚夫婦みたいね」

「お前の将来の夫に同情するよ、大変そうだ」

上機嫌で本家から送られて来た絶好のスニークアイテム、もといダンボールの荷を解く美月（二人のときはそう呼べと言われた）。出てくるのは某蛇さんでは無く、服や下着にティーカップから女の子らしい熊の人形まで。

「荷物多く無いか？」

「音羽が少ないだけよ、あれだけの荷物なのになんで一軒屋借りてるんだか」

えーと、俺のは家電一式に服や銃器・・・あと工具だけ。確かに一軒屋借りなくても良いような量だな、実際は二階の一部屋が銃器で埋まってるんだが。それでも空き部屋が一つある、もう一部屋は俺の寝室だが。

「うん、二階の部屋が一つ空いてるからそこで良いか？」

「良いよ、あ、タオルはそっちにお願い」

「了解です」

脚部のタイヤを回転させ、ワイヤーアームでそれを持ったmk？がウィンウィン言いながら美月が指した方向へとタオルを持っていく。音羽は食器棚にティーカップなど割れ物を仕舞っていた。

それから一時間、荷解きし片付けが終わった。居間のソファに座り音羽は寄りかかったまま燃え尽きていた、心なしか色が無い気がする。まあそこはギャグ補正ということだ。

「夕飯何が良い？」

「なんでも」

それが一番困るんだが・・・と良いながらマカロニを茹で始める音羽、すっかり青いジャージの上にオレンジのエプロンをしていた。菜箸を片手にホワイトソースを作り始める、美月はそれを見て色々諦めた。

「どれだけ手馴れてるの・・・」

「ん、ああ。厨房でも少しやってたからな、さあて今日はグラタンでもやろうかな」

慣れた手つきで器に盛っていき、最後にチーズを乗せオーブンに入れる。少しすると香ばしい匂いが部屋の中に広り始める、音羽はそれを横目に食卓の準備をしていた。

「私も負けてられないわね・・・」

「できたぞ」

できたてのグラタンが湯気を昇らせる、チーズが溶けて丁度良く広

がつていた。食欲をそそる香りが鼻をくすぐる。う、本家で食べたのより良い匂い。音羽って何でもできるのね、というかこの悔しさが半端ないわ。

「さあ、召し上がれ！」

「い、いただきます……はぐう！」

いきなり人の作ったグラタン食べて「はぐう！」とか何だ、そんなにまずかったかな？美味しく作ったんだが……。一時期は化学兵器やダークマターできたこともあるんだよなあ。それが今はしつかりした奴を出せるようになった、セシリア……。なんかまだ化学兵器作ってそうだなあ。

『クシュン……。誰か噂でもしてるのでしょうか？』

『またこの化学兵器を作ったことではないですか？いまだにこれでは音羽さまも泣きますよ』

化学兵器

なんか、相変わらず手料理化学兵器を作ってるような気がする……。チエルシーさんも大変そうだなあ、いつそのことメニュー送るかなあ。オルコット家の人間がアレなものしか作れないったら大変だ……。考えたらずげえ心配になってきた。

「どうしたの、いきなりそわそわしだして」

「いや、ちよいと元主人のことが心配になってな」

「なに、そんなにたよりないの？」

「いや、ただダークマターを作って無いかと思ってな」

「・・・・・・そんなにひどいの？」

「ああ、見た目は最高なんだけど。その分味がぶっ飛んでて」

いつだか食わされたオムライスは見た目はもう高級レストランのそれでも半熟だったんだ、でもチキンライスがタバスコや唐辛子で色付けされてて（ry

一通り説明すると、美月が顔を引きつらせながら苦笑していた。まあ、そうなるよな。

「なんか、音羽がそうだったのがわかった気がするわ」

「そうか、そうだったら嬉しいよ・・・」

はあ、とため息をつきながらも談笑しながら楽しい夕食の時間は過ぎていった。翌日の朝、一夏に冷やかされたのはまた別の話だ。

27・思いを馳せたら良い結果にならなかった（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽のオーバースペックはほぼ必要に駆られた結果

お知らせ 24話と25話少し修正しました。

28 生徒の長は大変なんだよな（前書き）

へーい、お祝いで何しようか迷ってる作者です

28・生徒の長は大変なんだよな

「おはよう！はい、おはよう！」

「おはようございまーす！」

とある朝、校門前で俺と美月にジャックの生徒会三人で朝の挨拶運動中。なんで風紀委員がやらないんだ？

ちなみに遅刻者には生徒会長から嬉しい特別指導！近接格闘編！らしい、なにその壮大な物語っぽい感じ。

というか俺に許可とらずにそういうの決めるなよ、なんで副会長のほうが権限あるの？ああつ、なんでギリギリだからってそんな顔で走るんだ！

「だって、ねえ？」

「え、いまだに初日のあれが響いてるわけ？」

「そうだよ」

転校初日、学校内の嫌われ者教師を組み伏せたのだ。教育的指導で組み手をさせられて、勝てたら終了というルールで・・・勝ったんだよね。しかも不意打ちされたのも癖で反撃したし・・・まあ、逆の立場だったら俺もそうなる。

「まじか」

そのせいで、交番から警官呼んでの講話では俺が生徒代表で本職の人と手合わせさせられて防犯教室じゃなくて生徒会長VS警官の試合に成り果てたし。付き添いの警官二人は上司であるう警官を応援して、生徒や教師は俺を応援すると言うシュールな状態になったし。まさかの教育委員会の人まで巻き込んだ2時間に及ぶ白熱した試合

だった……この学校大丈夫なのか？

「まあ、良いじゃない。発言権が上がったし」

「そりゃあ、それは助かるけどさ」

もしかしたら国内では生徒の要望が一番通りやすい学校なんじゃないか、教師側も生徒が問題起こさないから話し合いもそれなりに開けるし。というか、学校内では男女平等な感じになってるし……・まあ、就任演説でそういうことを言ったのもあるのかもしれないが。

「そついや、音羽の夢ってそれだっけ？」

「まあな、早い話が二人みたいな理解ある女性が増えて欲しいってこと」

「あはは、それには賛成だね」

放課後……生徒会室で要望書を吟味していた。もちろん全員で。

「『消えろ、イレギュラー！b y匿名希望』……却下、てかネタに走るな」

「『アイス！アイス！b y青いマフラー』こっちに要望されてもねえ……却下」

「『ネタが浮かびませんb y G』自分でどうにかしてよ」

緩い分、こういうところでふざけてくれる愛すべき生徒たち。別に怒らないけど、要望じゃなくて相談になってるし。てか、関係ないのも混じってないか？

「『エアーマンが倒せないb y匿名希望』俺だって無理だったわ、頑張れ」

「『3分間だけ待ってやるb y某大佐』どう考えても3分過ぎてます、ありがとうございました」

「『起動してもらえせんb yネギ』待つしかないよ」

『はあ……』

まともな要望が無いぞこれ、てかふざけ過ぎだろ。ネタばかりとかいい加減にしろ、もう少しまともな要望は無かったのか。この学校の生徒にまともな奴はいないのか、どうなんだ。

「『友人が他校の生徒にいじめを受けてるみたいなんです、私では無理でした。どうか助けてあげてください！b y西本愛美』いじめだと？くだらんことをする奴がいるもんだなあ」

まあ、勿論動くけどな。こういう時のために要望書を受け付けてるんだからな、明日にでも本人に聞いてみるか。

「つまり、相手は高校生だと？ふむ」

いじめられているという少女、陣内良子さんに事情を聞いていた。なんでもハーフラしく、金髪碧眼だと言うだけで会うたびに空き缶は投げつけられ、あまつさえ先日は小石を投げつけられて頭を少し切ったとか。ひどい人種差別だこと、しかも相手は日本人の女子高校生。そいつらが言うには珍しいからって可愛がられるのが気に入らないらしい。

「で、そいつらは有名な不良グループの頭だと……厄介だなあ」

「しかも、明日の午後6時に川原に呼び出しされていて5万持って来ればやめるって……」

そういうタイプの輩って後からまた要求するんだよね、てか、親はどうしてんだ？娘がそういうことしてるんだったら気づくだろう、ただでさえそういうこととしてれば目立つのに。

「しかも、そのリーダーの人の親はヤではじまる職業らしいよ？」

「……なんて厄介な、そう簡単に手が出せないじゃんかよ」

後が怖いってやつだよなえ、一般人だったら殺されるぞ。しっかりした証拠なきや警察に突き出せないし……どうするかなあ。あ。

「おし、じゃあ良子さん。その日、約束どおり待ち合わせ場所に行ってください」

「え、ちよつと。音羽！？」

「まあ、安心してください。どうにかして見せますよ！」

28・生徒の長は大変なんだよな（後書き）

もし原作までぶっこんでも気にしないでね

どうでも良い作品情報

音羽は普段容姿は男の娘（黒髪サイドテールに赤縁眼鏡）

29・結果・・・（前書き）

後半gdりました・・・orz

29・結果……

午後6時、とある川原。

「おし、約束の5万だ」

「な、ないです……」

陣内良子は音羽に言われたとおりに来たは良いが、中学三年に5万の金額など用意できるわけもなかった。

もちろん、相手の女。この付近では有名な不良グループのリーダー、版内芽衣子が納得するはずもない。

「ああ？無いって、はいそうですかってなるわけねえだろうがよ！」

「まあまあ、そこはどうか勘弁してくれませんか？」

良子のポニーテールに手が触れる瞬間、その腕が何者かに押さえられる。

「そこまで、つてとこか。ギリギリ間に合ったな」

「てめえ、何者だ。邪魔すんじゃねえぞ！」

腰まで届く黒のサイドテール、見透かすように赤縁の眼鏡の奥に鋭い瞳があった。まだ若い、並木野中の生徒であることしか制服からはわからない。

「いえ、うちの生徒が虐めを受けているということ。ご確認に来た次第です」

「へっ、ご苦労なこつて。してるって言ったらどうなるんだよ？」

瞬間、その少女の顔から笑みが消える。

「しかるべき処置、この場合は恐喝と言うことで法に訴えますかね」
「させると思うか？」

「まあ、これでも言えるでしょうか。ね？権三さん」

少女の背後から出てきたがっしりした体格の男性、いかにも親父イ
みたいなこの人は版内権三。版内組の組長であり、芽衣子の父親で
ある。ちなみに表では版内建築の会長である。過ごしやすく、安価
だと評判だ。

「親父！？なんでここに」

「この坊主が教えてくれたんだよ、お前がちよいと人様に迷惑かけ
てるってな」

「髪の色がなんだ、目の色がなんだ。お前だって昔は友達にも居た
じゃねえか」

「いたさ、でも、裏切られた。所詮外人なんてそんなもんだ」

権三さんに話に言ったときに聞いた。なんでも、親友とまで呼べる
ほどだった友人。そいつに言葉巧みに誘導され強姦まがいのこと
をされそうになった。それがいまだに心に傷として残り、異常なま
でに外人に拒否反応。特に金髪碧眼、聞くに堪えなかったが……
そういうのがあるからって許されることじゃない。

「そ、そうだったんですか……」

「ああ、そうさ。第一、あたしに近寄ってくる奴も気に入らねえ」

「なあ、芽衣子さん。あんたは、そうやってるときにどう思った？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「芽衣子、俺が来た途端に目を逸らしたよな？それが答えか？」

沈黙、ただそれだけがその場を埋め尽くす。

「ああ、自分でもわかるさ。ただの八つ当たりだってことくらい、でも、無理だった」

「へっ、わかってやってたなんてなあ。まあ、仕方ねえ。良子さん、これで許してやってくれんか？」

芽衣子の頭を押さえつけ、親子ともども頭を下げる。世間一般には土下座と言われるものだ。

「あ、いえ。芽衣子さんが自分でわかってるならそれでいいです」
「・・・・・・・・い、今まで済まなかった！これで許してもらおうとは思わん、何でも命令してくれ」

芽衣子がさきほどまでのきつい目ではなく、一人の少女としてまっすぐ良子さんを見据える。

「じゃあ、私とお友達になってください」

「あれだけのことしたあたしが？」

「ええ、もう一回、信じてみませんか？」

良子さん言い女すぎる、と思ったのは俺だけではなかったはず。

「ひとまず、一件落着か」

29・結果・・・（後書き）

え、あともう一回更新できるかと9時ころに

30・夏ならば(前書き)

相変わらず季節感の無いGです、もう現実には秋ですが気にせずどうぞ

30・夏ならば

「音羽さん、こっちはコンロの準備終わりました!」

「おう、じゃあ遊びに行つていいぞ簪ちゃん」

今は夏、季節感無いって言われてもここは夏なんだ。現在、美月・一夏・簪・鈴・千冬さんと俺のメンバーで海に面したキャンプ場にいる。なんでも一夏と鈴が髪のことと弄られていた簪のことを助けたそう、男らしいねえ。鈴音ちゃんは女の子だけ。

「すまないな音羽」

「いえ、いつもお忙しいみたいです。こういつときくらいは相手してあげてください」

久しぶりに休暇で帰ってきた千冬さんを一夏と一緒にしてあげるつても目的なんだよね、もちろん夏だからつてもあるが。

「音兄、終わった」

「あたしも」

二人に頼んだのは水汲みだ、貯蓄しておかないと使うときに二度手間だからな。ちなみに俺はテントを千冬さんと美月で組み立ててる。もちろん部品状態を量子展開したがなにか？

「おし、じゃ三人で遊んできていいぞ。怪我はするなよ?」

はーい、という元気な声を受けながらロープをくり付けたピックを地面へと打ち込む。これをしっかりやっておかないと風で飛んでしまう。流石に寢床が無いつてのは困るでしょ。というか、千冬さ

んの方角からガスッ！とか聞こえる……どれだけ力入れてるんだ……。

「終わりました？」

「ああ、深めにしたから大丈夫だろう」

「オッケーだよ」

テントの建設……間違っではないな……も終わり、あとはまあ……遊ぶ？というか急遽これを企画したのも理由がある、俺と一夏しか知らないが鈴音ちゃんの家が空気が変わったからだ。だから気分転換も含む、どうせならジャックも思ったがあいつが「夏はドイツで妹分をね」とか言っていたから無理。

「さて、俺はどうするかなあ」

なんか千冬さんが残像残して走っていったんだが、しかも丁寧にキャストオフして……もちろん水着は着てたぞ？若干、鈴音ちゃんと簪ちゃんがびっくりしてたが。ひとまずブラコン乙。いくら滅多に居れないからってそこまでか。シャツとズボンを丁寧に畳んであるから余計に。

「俺も泳ぐかな」

「じゃあ私もそうしようかな」

えーと、服を格納して同時に水泳用の海パンを展開する。自分でやっついてなんだが、便利だなこれ。

美月はなぜか俺の後ろで着替えてますが、見ないよ……紳士（変態ではない）の行動じゃないだろう。

まあ、紳士のしの字もおれには無いけどな。

「お、似合ってるじゃんか」

「ふふ、この日のために新調したのよ」

中二とは思えないほど発育の良い身体を髪と同じ水色のビキニ・・・で良いのか？を纏っている、まあいいんじゃないか。特に俺はどうということとは無いが、ちなみに雅から受け取ったペンダントは外している。

失くしたらいけないからな。

「さてと、俺はモーターボートでも借りて「私も乗るわよ！」どうなっても知らん」

「いいいやつはああああああああああ！！」

「いやああああああああ！！」

時速80kmで海面を滑走する状況に、美月が泣き叫んでいるが気にしない。俺は、ただ、走る！！

日が既に海中に没し、夜空には月が昇っていた。コンロからは香ばしい香りと肉と魚が焼ける音が聞こえる。昼間一杯に遊んだ俺達、千冬さんが三人を相手に笑顔で水かけあいなどしていたし・・・まあ、良かった。隣で串に刺さった肉を齧りながらでくと美月が寄りかかっているが。

「久しぶりにはしゃいだな」

「千冬姉、途中からめちゃくちゃ水かけてきたもんな」

「まさか飲み込まれるとは思わなかったわよ」

「でも、楽しかった」

うんうん、企画した甲斐があるってもんだな。美月は高速で滑走したからのびてるが・・・すまん。

「さてと、そろそろだな。空をご覧あれ！」

パチンと指を鳴らす、その途端、夜空に大輪の花が咲いた。

「すげ〜」

「わああ」

「綺麗・・・」

ふふふ、ここから見える小島にはタイマーを仕掛けた自動花火発射装置が置いてある。当分は大なり小なり綺麗な花火が打ち上げられる。量子化って便利だね。

「ほお・・・」

「うふふ、用意が良いのね」

「どうせなら、楽しみたいでしょ」

その間も様々な花火がこれでもかと光り輝く、どこぞの花火大会にも対抗できるぞこれ。ちなみに費用はライセンス料と売り上げからだから問題無し。綺麗だな〜。

こうして、今年の夏も過ぎていく。あいつらにも良い思い出になったでしょ、もちろん俺らもだけど。

30・夏ならば(後書き)

どうしても良い作品情報

そろそろ飛ぶ

31・キャラクターまとめ（前書き）

それ以上でもそれ以下でもない

31・キャラクターまとめ

メインキャラ紹介

更識楯無（女）

音羽が並木野中学校で最初に出会った生徒、一学年生徒会長を務めていたこともありとても有能。

対暗部用暗部「更識家」17代目当主、になったばかり。16代目が先陣切っているので実力は・・・お察しください。並木野中学校一学年生徒会長。少しの殺気で泣いてしまうなどまだまだ普通の女の子、自身を助けに来てくれた音羽に惚れたらしい。本家の意向で音羽と同居中。本名は美月（音羽にのみ教えた）

ジャクリーヌ・ウェルキン（女）

音羽に決闘を申し込み見事惨敗した残念な人、しかしその身体能力は素晴らしい！

音羽の強さに惚れた女（自称）普段はほわ〜っとしているが、本気になるの色々すごい。

たまにドイツ語を話すことがある、my財布には黒うさぎの紋章がある。

並木野中学校生徒会書記。愛称はジャック。

岸川頼子（女）

音羽たちが在籍する一年三組の担任、熱くなると松修三なみにな

つてしまう。

女尊男卑の社会には珍しい男女平等をモットーに生きる新任教師。ただし、初対面にはきつく当たってしまう癖がある。（本人は改善したいが現時点ではまだまだ）

雅（女）

冬の公園で倒れたところを音羽に助けられた少女。音羽と同年らしいがその素性は一切不明、引き取りに来た人物は彼女曰く、IS装備開発企業の人物だった。家事スキルが壊滅的で、口調もところどころ男っぽい部分がある。日本人らしいが雑煮を知らなかったりする、しかしレゾナンスで音羽が買った服を笑顔で着るなど女の子らしい一面もある。音羽が身に着けているペンダントは雅がお礼として渡した物である。

31・キャラクターまとめ（後書き）

さて、次回は・・・お楽しみに

どうでも良い作品情報

次回やっとなる

32・不幸な二人（前書き）

さあ、原作開始・・・

32・不幸な二人

三月、真面目に受験勉強をして藍越学園に入学し一年が経過。

美月はロシア代表としてIS学園に入学、中二の終わりにロシアに渡ってからは滅多に会えない。俺の護衛もそこで終わった。少し寂しいが仕方ない。

まあ、学園祭には招待されたからその時に会えたが見違えていた。それから鈴音ちゃんが中三になるまえに中国へ、寂しくはなったがなにか一夏と約束をしていたらしい。

ちなみに今日は入試の日である、なぜか去年行われた不正によって電車で四駅行った場所で試験なんていう変なことになっている。俺のときは校舎でだったのになあ、ちなみに一夏が受験する。

「音兄、俺頑張ってくるよ」

「おう、行って来い。まあ、俺も仕事あるんだけども」

並木野中で連続で生徒会長やった因果か、藍越でもやることに・・・一学年の다가確実に来年やらされる。しかも俺の前に入った先輩が全員指名という状況、普通あんたらだろうと言いたいが面接官にまで「ああ、君が！」とか過剰な反応されたし。

「受付だっけ？」

「ああ、そうなんだが・・・場所がわからん」

おいおい、高１と中三が迷子ってシャレにならん。しかも１学年生徒会長がだぞ・・・嫌な汗が流れ始める、というか流れてる。なんでこんな複雑な構造なんだ！常識に囚われない俺 SUGEE な感性で設計されたとしか考えられない、しかも会場は前日発表（しかも職員だけ）だから把握できてないし。やばい、控え室での待機時間ギリギリだ。うわ~~~~！？

「音兄、多分ここだ」

一夏が指差したのは受験会場の立て札、おお助かった！

「はい、時間押してるから早く着替えてね」

こっちも見ずに女性職員が言葉をかける、せめてこっち見ようぜ。まあ、これで大丈夫か・・・って着替える？なんだ、今年から不正防止で持ち物検査じゃなくて服から変えるのか。厳しくするとは言っていたが・・・ここまでとは思わなかったな。

「おし、一夏ささつと着替えちまえ」

「あ、ああ、つて着替えるのか？」

「そうらしいな、厳しくするって言ってたしじゃあ俺は行くぞ」

そう言つて移動しようとした矢先、後ろから悲壮感たっぷりの一夏の助けが聞こえた。

「お、音兄！」

「あん、なん……は！？なんでIS、てかなぜに乗ってる？」

そこには、かつて俺がボコした打鉄を装着した一夏がいた。え、どゆこと。え」と

IS

正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなった。ただし、女性しか起動・装着できず。そのために今の過度な女尊男卑社会ができた。

……重要なのは女性しか使えないと言う事だ、で、目の前で一夏が動かしてる。状況が飲み込めていないらしく、さっきから腕を動かしてる。どう考えても災難の匂いしかない。

「い、ー「え、男子が動かしてる！？」「あちゃー」

気づかれないうちに降ろそうかと思ったんだが、無理だった。頑張れ一夏、俺は知らん。

「無責任！？」

「俺じゃどうにもできん、大丈夫だ楯無もいるし」

「楯無さんがいるからって問題じゃないって！」

「ひとまず降りろ、そのままじゃいかんだろ」

「あ、ああ」

どうにかコックピットが開放され、一夏が降りてくる。以外に高いので俺が抱きかかえることになるんだが……でかくなったなあ一夏も。まあ、今はそこは重要じゃないが。

「ふう、これからが大h・・・うお!？」

一夏を降ろし、騒がしいので打鉄によりかかりパニックに陥った教師陣を横目に紅茶を二人で一口飲む。もちろん紙コップだ。

「・・・なんか視界が高いなあ、まあ良いや・・・・・・・・・・つてあれえ!？」

「お、音兄まで・・・」

なにかが頭の中に流れ込んできたと思ったら、俺まで打鉄を身にまとっていた。一夏は驚きのあまり空になった紙コップを落とす。

「え、二人目!？ちょ、ちょっと。ほ、報告!！」

なんとも大変なことになってしまいました。

「なんか、俺も頑張らなきゃいけないことになったっばいな。これ」「うん・・・・・・・・」

その後、二人揃って急遽検査をされ、帰宅できたのは日が落ちてからのことだった。

32・不幸な二人（後書き）

どうでも良い作品情報

同時刻、受験会場でなぜかテンションが高い金髪少女が目撃された

33・入学・・・高校一年からやり直し（前書き）

いつもよりサクサク書けた

33・入学・・・高校一年からやり直し

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

IS学園、1年1組教室。一夏は前席センター、俺は窓側の一番後ろ。周囲からの女子の視線が痛い、もし物理干涉ができたら二人揃って蜂の巣になっているんだろう。というか、まさか高校1年からやり直しとは・・・というか、藍越学園の受験会場だったって言うね。通路一本間違えてなければ今頃2年の教室にいたのに、今更過去のこと掘り返しても仕方ないが。

『（これは・・・想像以上にきつい）』

なんとか表面上は平静を保っているが、さっきから嫌な汗が止まらない。教室に男が俺らだけってのがもうきつい、なんか一夏の背中に哀愁を感じる。

「はい、それではSHR始めますよ」
ショートホームルーム

教壇に歩いて来た緑色のショート髪の女性は山田麻耶先生、どうみても背伸び感が満載です。このクラスの副担任である、そしてある一部が異様に大きい。肩こるんだろうなあ、というか服が大きいらしくだばっとしている。愛玩動物に思えてしまうのは仕方ないことだと思うんだ！

「それでは皆さん、一年間よろしく願いますね！」
「よろしく願います」

え、返事したの俺だけ？挨拶と返事は大事だぞ、それもお世話にな

る人ならば余計だ。というか、俺だけとか寂しい。返事したのが一人だけという状況にうるたえる山田先生、不憫すぎるぞおい。

「じゃあ、自己紹介をお願いします。出席番号順で」

なんとか持ち直した山田先生が無難なものを提案する、まあ、入学式終わって最初のSHRってそんなものだよな。今のうちに何言うか考えておかねば、何も言う事が無いってのは恥ずかしいからな。第一印象は大事だぞ。

「

」

順調に進み、一夏の番なんだが。なんか様子がおかしい、む窓側・女子？知り合いか。そっぽ向かれた、ひとまず返事しようぜ。さつきから山田先生が何回も呼んでるぞ、もう軽く涙目だし。

「織斑君、織斑一夏君？」

「っは、はい！」

いきなり大声で呼ばれて驚いたのか、声が裏返った一夏。クラス中で笑いが巻き起こる、逆の立場だったら俺も恥かしいなこれは。まあ、自業自得だ諦める。

「お、大声出しちゃってごめんね。怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね。でも、自己紹介『あ』から始まって『お』なんだよね。自己紹介してくれるかなあ、ダメかなあ？」

どこだかの伝統工芸品のごとく頭をぺこぺこ下げる山田先生、何回もしているためにサイズが合っていないらしい眼鏡がずり落ちてきている。どう見ても年上には見えん、『子供が背伸びして大人っぽ

くしている』っていう感じ。一夏も軽く焦ってる。

「いや、その。しっかりやりますから、安心してください」

「ほ、ほんとですね！約束ですよ？」

顔をがばつと上げて心底嬉しそうに一夏の手をとる山田先生……
すげえ注目浴びてるな二人。俺に向いていたであろう視線が一つ残
して全部移動したぞ。あ、一夏が決心したような顔で立ち上がった
こちらを向いた、一瞬固まったが自分に向けられる視線に驚いたん
だろう。なにせ約30人ほどの視線が向いているんだから。

「え……え〜っと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

無難にまずは名前から、うんはつきり聞こえる。で？

「……………」

動きが止まった、で、次は何言うんだ？…………俺に助けを求め
られてもなあ、さあ何を言う？まさかそれだけで終わるとかはあり
えないだろう、そこはわかってるはずだ。多分、メイビー、おそら
く。なぜか自信が無くなってきた。

「……………以上です（キリッ）」

え？

ガターン ドテツ ズルツ

十人十色のリアクションを取りながら一夏と俺以外の女子がずっこ
ける、俺はどうにか机に踏みとどまった。座ってるけど、てかmj

k。言うのそれだけかよ、あ。

スパアアン!!

「ザドルノフツ！」

なんか一夏が変な声上げて頭抱えて蹲ってる、出席簿を振り下ろした人物とは!.....千冬さんでした、ここの担任か。あのあとの試験ですげえ嬉しそうに笑顔で近接ブレード持って突進してきた人と同一人物とは思えないくらいビシッと決まってる。もはやあのだらしn

ズガンツ!

「FOX DIE！」

出席簿が俺の額目掛けて飛んできた、命中した途端にブーメランみたいに戻っていく.....それ本当に出席簿ですか?

「くだらんこと考えるのもそこまでにしておけ」

「はい」

千冬さんがクラス全体を一瞥し、言葉を紡ぐ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物にするのが仕事だ、私の言う事は良く聞き理解しろ。出来ない者には出来るようになるまで指導してやる、私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛えぬくことだ。逆らっても良いが、私の言う事は聞け。いいな」

無論、世界最強の言葉に大勢が歓喜した。一部に淑女が含まれていた気がするが・・・。

もちろん、その熱狂的な言葉の乱射に対して根っからうつつとうしがっているのが千冬さんらしい。

「で、お前はまともに自己紹介も出来んのか」

「いや、千冬姉。俺h」

スパァン！

クラスに姉弟であることがばれ、今までで一夏の脳細胞が1万個死んだのは言うまでもない。

33・入学・・・高校一年からやり直し（後書き）

どうでも良い作品情報

クラスメートに変更アリ

34・再開・・・したは良いけど(前書き)

音羽のおかげでセシリア良い子

34・再開・・・・・・・・したは良いけど

「さて、時間も無いのでな。如月、自己紹介しろ」

「はい、織斑先生」

一夏はまだ痛みに耐え切れず蹲っている、のた打ち回らないだけマシか。てか、千冬さんが言った途端に俺に視線が集まる。うお、これはそりゃ動きが止まるわな。ビシビシ視線が突き刺さる、圧倒されるってこういうことなんだな。

「えー、藍越学園から転校して来ました。如月音羽です、趣味はサイクリングです。年上ですが気にせず話しかけてください、ひとまず一年間よろしくお願いします」

これで良いはず・・・・・・・・なんか一人だけ視線を叩きつけてくる奴がいるが誰だ？今はまあいいか。

「これでSHRを終わる、授業の準備をしておけよ？」

や、やっと終わった・・・・・・・・もう既に疲れたんだが。廊下を見てもれば終わってから数分も経っていないのに人だから、そうか、これが動物園の動物たちの状況か！ひとまず動物たちよスマン、君たちの気持ちも知らずにいてごめんなさい。

「ちょっと良いかしら？」

なんか最近ずっとご無沙汰な声が聞こえる・・・・・・・・こ、これはもしや！

「セシリア？」

「5年ぶりですわね、まさかこうなるとは思ってもいませんでしたけど」

まあ、そうだな。まさか同じ学校の同じ教室で再開とは……嬉しいような悲しいような。

「ここにつてことは、候補生に？」

「ええ、オルコット家も安心ですわ。約束通りに」

「おお、良かった、良かったああ」

「きゃあ……もう／＼」

思わず立派に成長したセシリアを見て安心した、というか嬉しくてつい抱き締める。

「うんうん、元気そうで安心したよ」

「私もですわ、久しぶりですわね。音羽に抱かれるのって」

まあ、最後に抱き締めたのってイギリス出る前日以来だからなあ。これでミリアさんも安心だ、俺は勿論安心だ。俺は！今！猛烈に！感動している！

「つと、ギャラリーが騒がしいな」

「あつ……そうですわね」

さっき一夏が見た少女がこっち見て羨ましそうに見ながら一夏を引っ張っていった、一夏はなんか勘違いしてるみたいだが。というか廊下の人だかりがキヤーキヤー五月蠅いな、家族と抱き合うくらい別にどうってこと無いだろ。

「ありや、もう時間か。じゃあまた後でな」

「ええ、また後で」

予鈴が鳴り、一夏が出席簿アタックを食らったのは言うまでもない。流石ブラコン、弟には容赦が無い。

ちなみに俺はすでに教科書とノートを用意し終わっている、予習はしたから大丈夫なはず。いやまあ、なにせ急だったからなあ。まあ、セシリアが同じクラスってだけでも安心できる。というか、どうせならもつと早く分かってれば良かったのになあ。なにとはともあれ頑張るしかないか。

「で、あいつは何で怪しい動きをしてんだ？」

さつきから山田先生が授業をしているんだが、一夏は関係ない教科書の関連性の無いページを開いている。そこは実習でのISの飛行軌道の応用だぞ……あんなで大丈夫なのか？

「ここまででわからないところがありますか？」

「……」

一夏だけがびくつと肩を震わせる、わからないんですねどうもありがとうございました。そこへ教室の後ろに立っていた千冬さんがかつかと歩いていく、その手には出席簿が握られていた。一夏……なむ。

「……織斑、入学前に参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違っ捨てました」

ズゴム

「・・・!!」

「必読と書いてあったろうが馬鹿者、あとで再発行してやるから1週間で覚える。いいな」

「いや、あの厚さを1週間でとか無理が・・・」

「やれと言っている」

「・・・はい、わかりました」

あれを1週間か、どうみてもあなたの街の電話帳、もしくは百科事典くらいの厚さなのに。しかも一ページが透けるようになっていくペラ紙・・・普通に無理だよなあ。それをやらせようとするのが千冬さんらしいけど。

「ISはその機動力・攻撃力・防御力、その全てが既存の兵器を凌駕する存在だ。その『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解ができなくても覚えろ、そして守れ。規則とはそういうものだ」

正論、一夏も納得したような顔で千冬さんの顔を見る。まあ反論できないわな、まだ一夏がなんか考えてるみたいだが。おそらくしょうもないことだろう、望んでここににいるわけじゃないとか・・・。

「貴様『望んでいるわけでは無い』とか考えているな」

一夏がまたビクリと震える、凶星かよ。結局どこへ行ってもその場所ですぐにいかなくちゃいけない、それが嫌なら「人であることを辞めることだ」ってわけだ。相変わらず辛辣だねえ、まあ現実と直面して生きるしかないからな。俺の場合は諦めが混じってるきがしなくもないが・・・。

「え、えつと織斑君。わからないところは放課後に先生が教えてあ

げますから、頑張つて！ね、ね？」

山田先生が一夏の手をとって詰め寄っている、あいつ・・・まあ視線が行くのは年頃だから仕方ないか。あ、逸らしたつまらん。

「じゃあ、放課後によろしくお願いします」

「はい、頑張りましたよね！」

心なしか山田先生の顔が赤い、確実に変な妄想してるなあね。本当にIS操縦者つて男に免疫無いのか、あ、転んだ。本当に大丈夫なんだろうか、すごい心配だ。

「お、音兄・・・」

「やつれてんなあ、俺もそんな感じだが・・・」

『はあ・・・』

周囲の女子が観察するような視線が集中するなか、暗くため息を吐く男子二人・・・なんてシニールな光景だろうか。ああ、弾なら「羨ましいですよ！変わってください！」とか言っただろうなあ。できたら変わりたい・・・。まあ、心労が耐えないだろうけども。

「ところで音兄、さっき抱き締めてた子って誰？」

「ん、ああ。おゝい、セシリア」

はゝい、と返事をしてなぜか嬉しそうに（当社比30%増し、基準は知らん）駆け寄ってくる。

「どうかしまして？」

「いや、こいつが聞いてきたんでな」

「この方がもう一人の？」

「ああ、織斑一夏だ。よろしくオルコットさん」

「ええ、期待していますわ。一夏さん、セシリアと呼んでくださって構いませんわ」

うんうん、初対面でも良い感じだな。もし俺が居なかったらここで二人が喧嘩してるような気がする、うん。

「そっぴや、二人って付き合ってるのか？」

「え、そ、そんな／＼」

「んなわけねえだろ、家族のスキンシップだったの」

少なくとも俺はそう思ってる、あれ、セシリアがなんか残念って感じで肩を下げてる……？一夏もなんか苦笑いしてるし、一体なんだってん爪先に鋭い痛みがあああああ！！

「頑張ってくれ、セシリア」

「ええ、心遣い感謝しますわ」

だから、なんで俺を見て残念そうな顔をするんだ。セシリアならともかく、一夏にまでそういう目で見られるのは納得がいかん。ま、またため息……俺って何かしたか？

『はあ』

な、なんなんだ一体！そ、そっぴ話題を変えようとかそっぴなければ俺のガンダニウム合金ハートに輝が入ってしまう。

「そーいや、一夏を連れてった女の子って誰？」

「ん、ああ。俺の……ってやべ時間だ。あ、後で話す」
「おう」

時計を見れば本鈴ギリギリ、時間を過ぎてしまった数人が出席簿の餌食になってしまったのは言うまでもない。

34・再開・・・したは良いけど（後書き）

どうでも良い作品情報

まだ寮の部屋の相手が決まっていない（ライ

35・気疲れって結構きつい

キンコーン カンコーン

音が外れていたのに数人がずっとこける、なんで外れてんだよ。普通どこも同じはずなんだが・・・ひとまず授業が始まるから置いておこう。多分こういうものなんだ、そうに違いない。そうやってなんとか自分に言い聞かせながらノートを開いた。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

さつきとは違い、今の時間の担当は千冬さんらしい。なんで山田先生まで机に座って板書のスタンバイをしているのか不思議だが、とつかどう見ても制服着てたら生徒で通じるでしょ。ひとまず年上には見えんな！と、千冬さんの授業ということはサボれない・・・いやまあ、誰の授業でもサボる気は無いけども。

「ああ、忘れる前に。再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めなければいけないな」

クラス代表・・・確かあいつの話では、「生徒会の開く会議や委員会に出る、つまりはクラス長よ」「うんわかった、面倒くさいことなのはわかった。俺はやらないぞ、絶対に、何があっても。天地がひっくり返ろうが世界中を敵に回そうがやらん。あ、セシリアは別な。

「ちなみに、クラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。現時点では対した差は無いが、競争は向上心を生む。

一度決まると一年間変更は無いからそのつもりで……自薦他薦は問わん」

決められたら大層面倒なんですね、わかります。よし、ここはそれとなく一夏に押し付けよう。うん、そうしよう。というかクラスが騒がしいし、視線が俺と一夏に向き始めてる……。やばいぞこれ。嫌な予感がすげえる、主に男子二人に降りかかるのを。

「はい。織斑一夏君を推薦します！」

「私も織斑君を推薦します！」

いいぞ、もつとやれ。と言ってもそうは上手くいかないのが世の中だよなあ、何人か並木野の生徒見つけたし。まあ、やるって決まったらやるけど不可抗力でない限りやらん。せめてここくらいゆっくりにしたい、某ゆっくりに程度くらいには。あいつが居る時点で無理な感じがしてきたが。

「私は如月音羽君を推薦します！」

「あたしも如月君を推薦します！」

某宇宙がキター！な人がいるのか！？いや、俺だった。というかISなら宇宙余裕で行けるじゃんか、まあくだらん話は放っておいて

「私^{わたし}、セシリア・オルコット立候補させていただきます！」

ああ、そうだ。ほとんどの場合は候補生がクラス代表になるんだっただか、まあ当たり前前の措置だよな。国背負って来てるんだもの、実力見せて活躍しなければいけない。それにセシリアの場合は家も背負ってるんだ、余計に頑張らなければいけないだろう。

「ふむ、候補者は織斑に如月。オルコットか、さてどう決めるか」

「ちよ、ちよっと待ってください！俺はやらないです！」

「自薦他薦は問わないと言った、他薦された者に拒否権は無い。選ばれた以上は覚悟しろ」

ですよね、と言う空気がクラスを満たす。まあ、当たり前だな。

「なんで音兄は平然としてるんだよ……」

「こんなの今に始まったことじゃないしな」

中学転校二日目に始まり、中学三年に続き。高校一年……ここまで続けばもう慣れるってものだ、慣れたくなかったがなあ。まあ不可抗力にはどうしようもないし、俺も良い経験になったから結果オーライだ。

てか、俺を推薦したの全員並木野出身だし……良いんだけどさ。

「ああ、どうせなら織斑に専用機が来ることだし模擬戦で決めるか」

え、マジで。普通国家代表候補生でも数人しか与えられない物を……ああ、男子ってことでデータ取りか？それなら納得、じゃあ俺はどうなるんだ。無いなら無いでいいけど。てか、一夏が専用機？なにそれ美味しいの状態で……。お前なあ、呆れる通り越して尊敬するぞ。

「ああ、如月の場合は遅れるそうだ」

「わかりました」

多分……大丈夫だ、狂気に染まった千冬さんとの実技試験に比べれば。いけない、

思い出したら震えてきた。ひとまずあのことは黒歴史に指定しておこう、じゃないと精神的に色々大変だ。

「では、一週間後にクラス代表決定戦を行う。三人とも異論は無いな細かい連絡は後でする」

「真剣勝負で決めるなら良いか、問題ありません」

「はい、大丈夫です」

「わかりました」

ちなみに、一夏、俺、セシリアの順番だ。まあ頑張ってみるか。

放課後、俺はともかく一夏が机にぐでぐと情けないくらいに伸びていた。気持ちわかるがなあ、もう少ししゃきつとできないものか。昼休みにあの女の子、篠ノ之箒ちゃんと話をした。一夏、お前は小学生のときからフラグメーカーだったんだな。なんかここでも増えそうな気がするんだが。夜道は気をつけろよ。

「ふう」

俺は絶賛ティータイム、召還した紙コップに紅茶を注いで休憩してる。さつきから誰かが教室に向かって歩いてきてるし、それに移動する気力も無い。初日をどうにか耐えられたんだ、これくらい許されても良いと思う、ちなみに一夏は番茶だ。昼休みは大変だった、セシリアにはエスコートしろって腕からませられて落ち着かないし後ろに女子が大勢並んで追いかけてきたし。一夏も同じ感じだった、

お互い苦労するな。

「あ、お二人ともまだ居ましたね丁度良かったです」

ファイルを小脇に抱えた山田先生と千冬さんが教室に入ってきた、予想はある程度できるがな。

てか、マジで小柄なんだな。平均らしいが、やっぱり年上には見えない。

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言つて部屋の書かれたキーを渡してくる山田先生。ここISS学園は全寮制なんだよな、しかも寮で生活することが義務付けられている。将来有望な生徒を保護するっていう目的もあるけどな。

「え、1週間は自宅からつて聞いたんですけど」

「やっぱし、俺らの保護ですか？」

はい、すみませんね急で。と山田先生が謝ってくる、いや先生が悪いんじゃないんだけどね。まあ、二人しかいない男性操縦者つてことで外部から狙われやすいだろう。実際、家にマスコミから研究所の人間まで押しかけてきたし。それから開放されるのが早まったんだしどっちかって言つと嬉しいな、俺は。

「で、キーが番号違つてことは別室つてことですね」

「はい、部屋割りを急に変更したので分かれてしまいました。一ヶ月もすれば一緒になりますので我慢してくださいね」

それくらいなら問題ない、なにせあいつと一年以上同居してたんだ。今更女子が同室つてことで狼狽しないさ、天文学的確率で。

「それってほとんどダメじゃね！？ってそれは良いや、荷物持ってきてないんで今日は帰って良いですか？」

「あ、いえ。荷物は」

山田先生が言いかけた途端、ずっと黙っていた千冬さんが口を開いた。BGMはMGSの戦闘時のをどうぞ、ちなみにずっと警戒体制だ。

「私が手配してやった、ありがたく思え」

「ど、どうもありがとうございます」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと携帯電話の充電器で十分だろう」

日々の潤いは大事だと思うんだ、俺は右腕のこれに格納してあるけど。ひとまず一夏にいくつかは貸しておこう、何も無いのはきついぞ。特に年頃の男子は。

「じゃあ、時間を見て行ってくださいね。夕食は6時から7時、寮の一年生用食堂でとってください。ちなみに各部屋にはシャワーがあります。大浴場もありますが、今のところはお二人とも使えません」

なん……だと、風呂使えないとは……仕方ない外出許可を貰って銭湯に！

「そのような理由で外出許可は出ないぞ如月」

「はあ、わかりました」

「え、なんで使えないんですk頭頂部に突き刺さるような痛みがあ

あ！！」

ひとまず頭の回らない馬鹿の頭に拳を振り下ろしておく、普通にわかるだろ。男子は俺らだけなんだから。

「お前は女子と入るつもりか、バカ」

「ああ、そっか。そういうことか」

山田先生がなんかおかしくなりはじめたが、気にしたら負けだと思う。なんか、色々腐女子的ワードが聞こえたが知らん。俺にも一夏にもそういう趣味は無い、廊下の女子が攻めだの受けだの言ってるが俺は何も聞いてないぞ！一夏は苦笑いしていたがな。

「じゃあ、私たちは会議があるので行きますね。道草食っちゃいけませんよ？」

校舎出たら50mくらいしかないのにどうやって道草食えというのか、まあ、言われなくても休みたいからまっすぐ行くけども。一夏は1025、俺は1026だ。俺だけ嫌な予感がするのは気のせいではないはず、昔から嫌な予感だけは当たるんだよな。嬉しくないことに。

「まあ、今日はもう帰ろう。疲れたよ俺は」

「そうだな、なんか嫌な予感がするけども」

ははは、と一夏が笑う。それで済めばいいけどなあ。

35・気疲れって結構きつい（後書き）

どうでも良い作品情報

あいっつて、あいっつのことじゃ

36・疲れは溜めないようにしていきましょう(前書き)

あれ、
さうった？

36・疲れは溜めないようにしよう

ガチャリ バタン！

トイレに寄って遅れた俺を出迎えた寮では、一夏の部屋の前に人だかり。なぜか穴が開いている扉に寄りかかってとてつもなく焦っている一夏がいた。ああ、周りが下着の上に薄手のシャツくらいだから。うお、扉から木刀が突き出てる・・・誰が直すんだこれ。

「箒さん、箒さん。入れてください、じゃないと色々と危ないです」

「ガンバ」

「音兄・・・」

さあて、俺は俺で部屋に入るか。なんか半年振りの気配を感じるが、よし、普通に開けよう。いちいち動いてたら余計疲れる、どうにでもなれ。

ガチャ バン！

「お帰りなさい、ご飯にします？お風呂にします？それとも、わた・し？」

バタン！

きつと疲れてるんだ、そうに違いない。あいつが学園にいるからっていう理由ですごいリアルな幻覚に見えるんだ、絶対そうだ。そうだと云ってくれ！裸エプロンの格好であいつが飛び出てくるなんて、俺はなんなんだ。溜まってるのか？そうなのか！？しかもあいつで？

ガチャ

「お帰り。私にします？私にします？それとも、わ・た・し？」

「選択肢が一つしか無いだろうが！」

スパァン！！

俺のmyハリセンが火を噴くぜ、って感じに一閃。言い終わったのを確認したと同時に召還、振り下ろす。紙製と侮ること無かれ、たとえISの絶対防御があつても衝撃は貫通するという無駄な技術の塊だ。

その証拠にうつ伏せで倒れた特徴的な水色の髪をした少女が倒れている、痛そう？こいつに手加減は必要ない。さうて、荷物置こう。もちろんこいつを掴んでベッドに放り投げる。

「いつまで倒れてるつもりだ、風邪引くぞ」

「少しくらい心配しても良いと思うけどなあ？」

「学園最強を心配してどうすんだ、てか早く着替える。美月」

既にドアは閉めてあるため、部屋の中には二人しかいない。俺はベッドに腰掛けているが、こいつはいつまでうつ伏せのつもりだ。いい加減起きろってんだ。そう考えながら着替えや荷物を展開していく、まあダンボールに入れて運ぶのが面倒だったってのがあるが。出てくる出てくる、シャツから鍋から包丁まで……ちなみに小型ジェットパックもスピアのベルトバックルに格納されてる。わからない奴はググれ。

「うゝむ、今日は食堂行くか」

「そうだね」

「まず着替えろ、話はそれからだ」

半年振りになるのか？前に会ったのが学園祭のときだし。ちなみに一夏と並んで二ユースになったときにメールでm9（^ ^）って送ってきやがった。そうだよ、馬鹿やつたさ二人して。思い出したら腹たつてきた。

「まあ、久しぶり」

「ふふっ、そうね。ようこそISS学園へ！」

ビシッと決めたのはいいが、スク水着用エプロンだから締まらないなあ。まだ着替えてないし・・・目のやりどころに困るんだがなあ、ただでさえスタイル良いんだし。俺は某流さんみたいに耐性ないし、ひとまず視線を外そう。見てるとそれきっかけに弄られる、主に俺の理性を削るようなことをしてくるから困るんだ。

コンコン

なんだ、一夏か？ちょうど良いや。

「音羽、居ますか？」

お、セシリアだ・・・なぜ後ろから痛いくらいの視線が突き刺さってるんだが何故だろう。おし、制服に着替えてるな。だからなぜ睨む、俺何もしてないだろうがよ。ハリセンで叩いたけど。

「居るぞ、丁度いいやまだ飯食ってないだろ。食堂行かないか？」

「ええ、その方は？」

すると、美月が目をキラんと輝かせて目の前にジャンプ。俺の上に乗っかってきた、ぐ、体重かけんな。そしてやわらかいそれを何気

ないように当てんなバカ、心臓に悪いわ！そしてセシリアが目だけ笑ってない、こ、怖いぞおい。火花が散って見えるのはきつと俺が疲れているからだと思いたい。

「更識楯無、音羽の中学時代の同居人よ」

「ええっ！？音羽、あなた・・・」

「こいつとギブ&テイクだったただけだ、それに一年ちょっとだけだし」

「そういうことですか、まあいいです。食事と行きましょう？」

「ああ、楯無。ちよつと降りろ、動けん」

仕方ないわねえ、と言いながらセシリアとは反対側に腕を絡ませる美月。あ。

『歩きにくい』

「って言いませんわよね？」

「言わないよね？ね？」

「・・・はい」

二人に挟まれて食堂へと歩く、腕にあれがあたって落ち着かない。というか、なぜ周りの皆さんは羨ましそうな目で見てくるんでしょうか。セシリアはもちろん昔も同じようにやってたけど、美月はなんか同居始まってからやり始めたし。ひとまず精神的にきつい、色々削られるぞこれ。しかも二人とも大きいから余計に・・・..
h e i p m e ! いかん、おかしくなつて英語出た。

「あ、一夏君久しぶり〜！」

「楯無さん、お久しぶりです」

「お、簪もいつしょか」

「一夏がいたから・・・」

一夏はカツカレー、簪はかき揚げうどん、箒は焼き魚定食（鮭）。どれも美味しそうだな、ひとまず箒と簪の間で火花が散っていらっしやる。これに弾とあいつが入れば中学メンバーなんだよな、生憎あとの二人がいないけども。どうやら一夏と簪が楽しそうに話してるのを見ると、一年くらいの時間の壁は薄かったみたいだな。箒が空気になってるけども。『誰が空気だと？』ごめんなさい。

「うーん、お」

「あら、やはりここにもありましたのね」

「どうしようかな」

セシリアは迷い無く煮魚定食（味噌汁大）を、俺はカツ丼、美月は味噌ラーメン。他にもウエルシュ・レアビットやナンなど世界中の料理がメニューにある。生徒が世界中から来ているつてのがあるからかな。これなら毎日飽きないな、全制覇も良いかもしれない。

「さてと、いただきます！」

「いただきます」

「いただきます、うーん美味しそうね」

「はあ、結局シャワーかよ」

どうせなら小型の浴槽も持つてくるんだった……入りきらないから無理か。まあいいや、さっさとシャワー浴びて寝よう。今日は疲れたよ、主に精神的に。

「はいはい、私が髪を洗ってあげましょう！」
「……頼む」

いつもなら自分でやるんだが、もう結構瞼が重い。自分でやる元氣も無い、なんか背中心地良い感触があるがそれに突っ込む氣力も無い……眠い。

「ほら、起きなさいって。ここで寝たらダメよ」

「う、うん」

「まったくもう」

あゝ、気持ちいい。人に髪洗ってもらうのって気持ちいいよね、ふわ。

「ほら、終わったから寝ましょ」

「ああ、助かった。おやすみ」

「うん、おやすみなさい」

なんか額に触れた感じがしたが………ZZZZ

36・疲れは溜めないようにしましょう(後書き)

どうでも良い作品情報

擬似四次元ポケットはスペアが3個、日用品・銃器・小型ジェット
パック

37・災難・・・壽だ（前書き）

どうか彼に労わりを

37・災難・・・鬱だ

日差しがカーテンの隙間から部屋の中に入り込む、ついでに美月も俺のベッドに入り込んでいる。小鳥のさえずりが聞こえる、俺は鴉のほうが好きだがな。そして焼き鳥は皮が好きだ、さえずりが無くなったが気にしたら負けだと思う。ちょっと待て。

「うにゅ、すう・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

気持ちよさそうに寝ているから起こすにも起こせない、俺が逆の立場だったら起こされたくないしな。いや、寝ていることに關してだぞ。俺は誰かに抱きつくなんてしないからな、多分。うあゝ、朝から理性がガリガリ音を立てて削られる。まさかこれが毎日続くとか無いよね？ねえ？

「ああ、いいや。もう一回寝よう」

「ふひゅ・・・・・・・・」

その後、1年1組の教室で出席簿が振り下ろされる音が響き渡ったのは言うまでもない。

「なぜ弱くなっている!」

「受験勉強してたから・・・かな？」

IS学園部活棟C、剣道場。目の前には床に倒れこんで竹刀を眼前に向けられている一夏と、それを見下ろす侍ガール箒がいた。俺は

これから射撃練習しにアリーナに行こうとしていたのだが気になったので観戦していたところだ。一夏って剣道やってたのか知らなかったな、道理で筋肉のつきが普通と違うわけだ。と言っても練習してるとこんなて見たことないけどな、千冬さんも忙しいから家事で一夏はそういう暇も無かったし。仕方ないって言ったら仕方ないか。

「なおす」

「え？」

「鍛えなおす、IS以前の問題だ！」

まあ、なんということでしょう。一夏の表情が呆けていた状態から一瞬でわけが分らないという表情に……。なんか面白いことになりそうだし。さあて、俺は俺で始めるかなあ。恋する乙女を邪魔するのも無粋だからな。

「つく、オート制御だと照準ブレるなあ」

IS学園第三アリーナ、ISでの模擬戦・実習・装備試験などが行われるだけあって半端なく大きい。反対側の観客席が豆粒に見える。しかもこの大きさのアリーナがあと4つ、高機動実習で使われる第六アリーナはもっと広い。まだ行ったこと無いけども。

それより、オート制御だから生身で使うときよりやりにくい。ああもう、面倒なもんだなこれ。

「っだあああああー！」

「ああ、痛い」

アリーナで2時間ほど動かしたは良いが打鉄がなかなか上手く動かずイライラ、別の練習しようとして飛ばうとしたら姿勢崩して頭から転倒。保持していた近接ブレードが手から離れて立ち上がった瞬間に後頭部に直撃、自分の武器に切られるというギャグマンガみたいな事故発生。悶絶しているところを見られて同じアリーナでISを動かしていた女子にクスクスと笑われ、なにくそと起き上がったらPICが誤作動起こして今度は後方5連続回転をして地面へと叩きつけられる。諦めずに起き上がったら、流れ弾のグレネードが目の前に転がってきて爆発。体勢が整っていないために後ろに転び、アンロックユニット非固定部位が地面に突き刺さって立ち往生。どうにか力づくで引き抜き素振りを始めたら刀身だけが抜けてアリーナの壁と防護バリアーにぶつかる、ドリフのあれみたいにあちらこちらで跳ね返りながらなぜか最終的に俺の股間に直撃。女子には永遠に理解できない痛みに苦しみながら仕方なくアサルトライフル「ヴェント」を展開して撃とうと引き金を引くとジャムリ、取り出そうとレバーを引くと暴発。怪我は無かったものの顔が煤で汚れる。タオルでふき取り、仕切りなおそうとピットから再度飛行。カタパルトが急停止し、ロツクは普通に外れるものだからピットから墜落。終わろうと装着解除したらステータス画面に「整備中」の文字。そのままため息をつきながら崩れ落ちた。

「俺って誰かに恨まれてんだろうか」

「あ、あら。まあ、無理はしないでくださいね」

セシリアの心遣いが嬉しい、ああ、そういや。

「セシリアって可愛いなあ」

「な、なななあ！？いきなり何をノノ」

「いやあ、昔もそうだったが可愛くなったなあと思って」

「なぜ平気でそういう言葉が言えるのか、不思議でなりませんわ。嬉しいですけども」

なんか今のが声小さくて聞こえなかったな、なんて言っただろう？
ちなみに美月は生徒会の仕事でいない、虚に注意されて無理やりやらされてるらしい。生徒会長が仕事サボってどうするんだ。俺だっ
てしっかりやってたんだから美月なら簡単だろう、やる気だせば。

「あれ、音兄はセシリアといっしょなのか。楯無さんは？」

「虚に注意されて仕事中、ってボロボロだな一夏」

「あはは、箒に散々倒されてさ。明日もだよ」

「一夏さん、剣道やってらしたのですか？」

「ああ、小学生のころに道場に通ってたさ。その時からの友達なんだ箒は」

『（箒（さん）頑張ってる）』

こう思ったのは俺だけでは無いはず、というか俺とセシリアが向かい合って頷く。幸い一夏はなにか理解していないようだったが。この鈍感m爪先に針で傷口を刺すような痛みがあああああ！！俺が何をしたんだセシリア、俺は悪いことした覚えは無いぞ！一夏は哀

れんだような目で見るなよ、なにその残念な物を見る感じ。そりゃあ、鼻に絆創膏だけどさ。

「そういえば音兄はなんでボロボロなんだ？」

「ああ、いやな

長い の で 上 参 称

「なんという……」

「まあ、これくらいでめげないけどな。負けないぞ俺は」

「ふふつ、それでこそ音羽ですわ」

「そうだな、それでこそ音兄だ」

そのころ

「うえー、まだあるのこれ？」

「サボった分は取り返してもらいますよ、ただでさえ溜まっているんですから」

「うう……音羽あ、助けてえ……ん、メールだ」

『断固断る自業自得だ。おにぎり三個と味噌汁あるから食べておけ

よ？俺は先に寝る b y音羽』

「うふふ、優しいなあ音羽は」

「にやけるのは良いから早く終わらせてください」

「ぶうゝ、けちんぼ」

「……音羽に愛想つかされても良いのならどうぞ」

その後、文句を言いながら書類にサインを書き続ける楯無が目撃されたそう。

クラス代表決定戦まで、あと5日。

37・災難・・・・壽だ（後書き）

どうでも良い作品情報

原作と違い、更識姉妹は仲良し。簪はサード幼馴染、空気さんマジ
篤

38・試合前（前書き）

良い切りどころだったので、短いとする

38・試合前

男の特訓風景なてん誰得だよ

IS学園、第三アリーナ。東ピット二番格納庫前、俺は缶コーヒ―片手に壁に寄りかかっていた。流れるようなサイドテールはところどころザラザラ、一部は焼け焦げたような痕……。せつかく苦労して手入れしてたのにIS訓練で台無しに……。ちくしょう。なんとかまともに動けるようにはなつたがいまだに何か起こりそうで怖い、またPIC誤作動起こさないよなあ？……。ちなみにセシリアが候補生ということで俺ら二人と試合、その後俺と一夏という組み合わせ。

「それなのにお前の専用機は来てないのか」
「うん」

そこなんだよな、早めに来る予定だった一夏の専用機が当日になってもまだ来ていない。あと5分で試合始まるぞ？もし過ぎたら俺が先になるってことですよええ、技量はともかく訓練機で勝てるだろうか。性能差は埋められないしなあ、一応速度特化にチューンしてもらったけども。つてもうあと2分だぞ、間に合わないんじゃないかこれ。あ、山田先生が走ってきた。なんともよたよたして頼りない感じた、今にも転びそうとはこれのことを言うのかも知れないな。実際目の前で一回躓いたし、ある意味期待を裏切らない人だな。

「大丈夫ですか山田先生、慌てなくて良いですから落ち着いてください」

「は、はい。そ、それでですね来ましたよ織斑君の専用機！」

おお、やつとか。結構待ちくたびれた……あと30秒でおい。フォーマット フィッティング 初期化と最適化は間に合わないな。だからって時間は限られてるし、もしかして試合中に済ませるのか？聞いたことないぞ、戦闘中にだなんて。いくら自動でやってくれるとはいえんな無茶な、それをやらせるのが千冬さんですけども。

「流石にきつくはないですか？」

「ふん、できなければ負けるだけだ」

そう言った千冬さんの視線の先にあつた格納庫のエアロックが音を立ててスライドする、暗がりの中から一機のISがせり出して来る。工業的なデザインではあるがどこか力強さを感じさせる。

「白」がそこに居た

この瞬間を待ち続けたように、今、この時のためのようにそれは鎮

座していた。主を待ち続け、迎えるためにそのコックピットを開け放っている。正直に言おう、カッコいいと。

「織斑、早く乗れ。そうだ、座するような感じで良い。あとは自動で最適化する」

「一夏、正々堂々やってこい」

「ああ、分かっている……なんか気持ち悪いな、前見てるのに全方位見えるなんて」

あゝ、ハイパーセンサーか。前方を見ているのだけでもそれによって360度全方位を視ることができ、そのために死角からの攻撃を感知できるって奴だ。本来は航行中に飛来する隕石を避けるためなんけども、他には望遠機能とかな。早く宇宙に行けないものか、某おにぎりに見えるライダーさんは単独で毎週行ってるのに……。なぜ兵器でしか使わないんだ。今はスポーツだけでもさ。ちなみにこのISの名前は『白式』だってさ、読みが某宇宙世紀の金色のあれじゃねえかってツツコミはしてはいけない。

「じゃあ、行ってくるよ」

「ああ、勝って来い一夏」

第が応援したところで、カタパルトに乗って一夏が発進していく。反対側にはセシリアが居ることだろう、どうなるこの試合、結果が楽しみだ。

38・試合前（後書き）

どうでも良い作品情報

戦闘描写は苦手ということに今更気づく

39・蒼の雫・白の翼（前書き）

ー夏VSセシリア

39・蒼の雫・白の翼

「うおつとと、こりゃ特訓しなきゃな」

発進した反動で前に仰け反りそうになった一夏が、セシリアに向かい立った。相対するセシリアはイギリスの第三世代IS「ブルー・ティアーズ」を起動している。腰部には4枚のフィンアーマー、右手には六十七口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』が握られていた。その出で立ちはまるで中世の騎士のようであった。

「ふふふ、これからが楽しみですわね」

「そりやどうも、つとそろそろだな」

広大なアリーナに試合開始のアラームが鳴り響いた。

「手加減しませんわよ!」

「真剣勝負、当たり前だ!」

スターライトmk?の青いレーザーが銃口から迸り、回避行動に移っていた白式の非固定

アンロックユニット

部位の左側の一部を吹き飛ばす。着弾の影響で加速していた白式ごと一夏が後方に押し出された。

「うおつ!?!」

絶対防御は適用されなかったが代わりに左のウィングスラスターが一部破損した、シールドエネルギーが0にならない限り負けでは無

いが機体の破損は後の戦闘行動に障害をもたらす。最悪飛行できなければ中距離射撃型のブルー・ティアーズには勝てない。

流石、代表候補生。俺が移動した先を狙ってライフルを上手く撃ってくる、武器は無いのか？えっと一覧……一覧……一覧！？一個しかないのに一覧とはこれいかに。仕方ない、何も無いよりマシだ。

「ええい、ままよ！」

「……一夏さん、本気ですの？」

「というか、これしかなかった」

「そ、そうでしたか……」

セシリアがなんとも驚いた表情でこちらを見ているのがわかる、俺だつて驚いたさ。なにせ『近接ブレード』一本しか無かつたんだから、「普通は剣と銃くらいは入ってるんだぜ」とは音兄の言葉だ。まさか剣しか無いとは、そりゃ俺には銃なんか使えないけどさ。経験的な意味で、だからって射撃メインにこれで戦えつてのはなあ。文句言つても現実是不変ならないけどもさあ。

「では、ここからが本番ですわ！」

瞬間、4機のフィンアーマーが独立してそれぞれがまるで生きているかのように襲い掛かってくる。細い先端が青い光を称え独特の音を放ちながら青いレーザーを撃つ。四方八方から三次元で攻められるためにガリガリとシールドエネルギーが減っていく。どうにか一つを避けても残りが当たるといふ状況、どう考えてもこのままじゃシリ貧だ。

「右足、頂きましたわ！」

「やらせるかよ、でやあ！！」

一瞬動きが止まった後方のブルーティーズ・・・機体名と同じとは紛らわしい、試験一号機だからそうなってるらしいけども。面倒なので以下ビットを一機蹴り飛ばし、セシリアへと肉薄する。金属が捻じ曲がるような感触を右足に感じながら、自身に向けられていたライフルを近づいた瞬間に左手で殴り銃口を逸らす。

「なあっ！？やりますわね！」

「俺にも譲れないものがあるからな！」

すぐに上下からのビットによる牽制で引き離されるが、一撃入れられた。素人同然の俺が、候補生に一矢報いたのだ。嬉しくならないわけがない。

「あの、馬鹿。一撃くらいで調子乗ってやがる」

「まったくだ、変わらん」

「え、どういことですか？」

まあ、なあ？

「あいつは調子に乗ると左手を閉じたり開いたりする、大抵その時は単純なミスをする」

「今までそれで失敗したの何回だったかなあ・・・」

正直数え切れんな、その度に俺が出向いてたし。一夏は気づいてな

いけどさ、後始末は大変だったよ？そんなんだから「最強の生徒会長」って影で言われてたんだから。そうこう言っているうちに、一夏がビットを近接ブレードで叩き落しての暴行を加えて使用不能に陥らせている。対するセシリアは・・・無茶苦茶な一夏の動きに驚いていた。ビットが真ん中で捻じ曲がって可愛そうだ。

「おし、貰ったああー!!」

「生憎様、ブルー・ティアーズは六機あってよ!」

重い音を響かせてフィンアーマーの左右から突起が分裂、高速で俺に近づいてくる。回避は・・・間に合わない。さっきまでのレーザー射撃ではない「弾道型^{ミサイル}」だ。

赤を越えて、白い爆発に飲み込まれた。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

「なんとのご都合主義・・・」

着弾の煙を見つめながら、俺と千冬さんの言葉が重なった瞬間。その中から、それは現れた。

フォーマット フィッティングプリント
《初期化・最適化完了・確認ボタンを押してください》

「な、さっきまで初期設定で戦っていましたの!？」

「ああ、やっとなの物になったみたいだ」

視界に映る確認ボタンを押すと、金属音を響かせて白式がその姿を変える。工業製品のような直線的な形から生物的な曲線を描き、角ばった非固定部位は受けた傷が無かったのように消えて一対の翼に。アンロックユニット
完全な『白』へと変化した。

《近接特化ブレード「雪片式型」》

先ほどまで握っていた無骨なデザインのブレードは、刀身が割れてそこから光の刃を放出。スライドした元刀身はそれを握る右手を守るハンドガードへと変形していた。見覚えがある、かつて姉を世界最強へと導いた刀に型名す刀。

ああ、まったく。つくづく思い知らされる。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

だからこそ、守られるだけの関係は終わらせよう。これからは、いや、今この瞬間から。

「俺も、俺の家族を守る」

「……覚悟、ですわね」

「ああ、まずは千冬姉の名前を守るさ!」

一気に上空へと加速、背部ウィングスラスタから尾を引きながら上昇する。その間もレーザーが幾筋も付近を貫いているが、さっき

とは格段に動きやすくなった白式が俺の思い通りに動く。そして、
全てが視える。

「うおりゃあ!!」

「鋭い一閃、見事ですわ!」

残っていた一機のビットを急加速しながらの一振りで切断、高硬度
金属を切断する衝撃が雪片を握る右手に伝わる。刹那、通り過ぎた
瞬間に後方で小爆発。砕け散ったビットの破片が慣性を残したまま
四散していく、気にも留めず最後に残ったスターライトmk?を構
えるセシリアに高速で接近する。

「わたくしにも、譲れないものがありましたよ!」

セシリアがスターライトmk?の後方レバーを引く、するとシヨル
ダーストックが上下にスライドし持ち手に変化した。銃口からは蒼
穹を映すかのような真っ青のレーザーの刃が伸びる、それを腰溜め
に構えなおしたその姿はかつてヨーロッパに名を馳せた名騎士のよ
うであった。

「はああああ!!」

「やああああ!!」

突き出される蒼の槍と白銀の剣がぶつかり合う、加速を喰えた一撃
だったからか雪片の輝きがレーザーの刃を切り裂く。上段に振りか
ぶった一閃が真っ直ぐにセシリアへと振り下ろされる。

『試合終了 勝者 セシリア・オルコット』

「え？」

「はい？」

向き合いながら同じように訳が分からないような顔をしている俺とセシリア、いつのまにか雪片の光刃は消えていた。……

・何が起こったんだ？

「良くもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこのざまか大馬鹿者」

ランクを下げないで上げるのが千冬さんらしい、大馬鹿者だつてさ。おめでとう一夏。一応スポーツドリンクを時速60kmで投げあげ、優しいだろ俺。

「ほぶわあ！」

どうにかキャッチして転んだ一夏^{馬鹿}が居るけども、ちょっとばかり気になることが……。あるんだよねえ。どうみてもあれは一夏の勝ちだったはずなんだがいきなりシールドエネルギーが0になって一夏の負け。まあ、初心者が候補生にあそこまで迫れたのはすごいけどもな。

「雪片の特殊能力だ、『バリア無効化攻撃』という（ry」

早い話、自分のシールドエネルギーを使って相手のシールドエネルギーを切り裂いて攻撃。その際に絶対防御の発動によって相手のシールドエネルギーを喰らい尽くす。それをするまでのダメージと残

り少ないシールドエネルギーでの使用だったためにいきなり0になった。つまりは

「武装の特性を理解してない一夏の自業自得だと」

「その通りだ、さて如月。お前は30分後だ、準備しろ」

「サー、イエッサー！」

「ふざけているのか？」

「サー、イエツス ああ!？」

突然俺の眉間を狙って音速で振り下ろされる出席簿、どうにか紙一重で回避する。あ、髪が少し切れた・・・直撃してたらどうなるんだよこれ。一夏はまだ普通に見てるけども、隣で筭が色々困ってる。まあ、そうだろうよ。それよりも俺の出番だな。

「さてと、じゃあ俺のターンだな」

「訓練機で大丈夫なのか音兄」

「銃器くらいは良いが、またなんかありそうで怖い」

股間にブレードぶつかるとか、股間にry・・・とにかく怖い。何の心配を俺がしているのかわからんがな、さてと誰もいないはずのピットで学園最強さんが見てるし。良いとこ見せようか、一夏もやってたからなあ。

「それで織斑先生、ラファールは？」

「全機整備中だ、打鉄で我慢してくれ」

「・・・・・・（orz）」

39・蒼の雫・白の翼（後書き）

どうでも良い作品情報

ブルー・ティアーズ色々変更

40・蒼穹の狙撃手 漆黒のバトラー（前書き）

セシリアVS音羽！

40・蒼穹の狙撃手 漆黒のパトラー

「あゝ、心配だ。これ整備完全ですよねぇ？」

「当たり前だ、F装備で良かったな？」

「はい」

あれから30分後、俺は打鉄（速度重視のF装備）を装着していた。さきほど一夏が山田先生から「IS起動のルールブック」を受け取ってげんなりしていた。なんせ厚さは某電話帳、一ページはペラ紙・・・一週間でそれを完全制覇。ざまあww

「はあ、なんでここにいるんだろうなあ俺」

「それを今更言ってもどうしようもないって音兄」

『はあ』

気分がああああ・・・・・・あ、しまった、この勝負負けられない！いくら解雇されたとはいえ、元執事。主より弱い執事がこの世に居てたまるか、何があっても主人を守りきる、それが執事。^{パトラー}それは生身だろぅが戦闘機だろぅが、ISだろぅが関係無い。というか、ミリアさんが出てくる！負けようものなら絶対亡霊になっても出てきて地獄の30日間を味合わせられる、あわわわわ。

「負けられない戦いが、ここにある」

「な、なんか音兄が達観してる!？」

「何かに怯えているように見えるが・・・む？」

ピットの影に音羽をじっと見つめる金髪の女性が見えたとは後の筈の話である、その目は「負けたら、わかってるわよね」と語っているようだったそうだ。

「（ビクッ！！）・・・・・・・・！！？」

いかん、なんかミリアさんに見られてるような感じがした。絶対、近くに居るってこれ。・・・・・・・・どうやら緊張で頭がおかしいようだ。落ち着け俺、きっとミリアさんが幽霊になって見てるだけだ。十分怖いぞそれ、ちなみに俺は幽霊とかの怪談話は嫌いだお化け屋敷も。まあ、それは誰にも知られていないけどな！

「さて、時間か。お嬢様の成長した姿でも見に行きますかね」

バトライ
マスタイ
「執事と主人か、面白い」

カタパルトに打鉄の脚を固定する、後方に反射板がせり上がり脚部ごと後ろに下げられる。蒸気カタパルト特有の発射準備だ、今だに現役なのは優秀だからに違いない。F-35（確かC）に乗ったときも世話になったからなあ。なんで乗ったかって？コネですよチミイ。

「じゃあ、行きますか！」

「音兄ガンバ！」

一気に前方に押し出される、対G制御は効いているが。この感覚は、良い！

「うつつしゃああああああああ・・・・・・・・・・」

音兄が、急停止したカタパルトから落つこちていった。真つ逆さまに、それも頭から・・・・結局なのか。どれだけ運が無いんだ音

兄、向こうのピットに居るセシリアの顔が引きつっているのがわかる。山田先生は状況が掴めていないのか口をポカーンと開けている。千冬姉は傍目からは分からないかもしれないが軽く苦笑していた。箒は心配なのかピットから下を見ている、あ、起き上がった。

「痛ててて、ちくしょう。なんでこういう時に限って締まらないかなあ・・・」

「大丈夫ですよ？」

「ひとまず、な」

同じ高度に上昇し、向き合う。元・執事バトラーと主人マスターの戦いが、始まった。

「うおっと、のわあ！」

「隙ありですわよ！」

し、四方八方からピットによる牽制射撃。さっきから回避しても着弾ばかりで埒が開かない、そして避けきったと思えば静止した途端にスターライトmk？による的確な狙撃。やはり、見た目は簡単だが実際は・・・というやつだ。しかし、三次元機動ってのはなんと慣れないな。ジェットパックと違って急旋回できるし、PICでホバリングできるし。世界最強の兵器ってのは納得だなホント。

「せええつだあああん！！！」

アンロックユニット
非固定部位の物理シールド裏に搭載されたスラスタを噴かして、勢いに任せてビットを一機両断。今度は刀身抜けなかった俺に勝てないものなどいない、多分！F型の最大の特徴、物理シールド裏に搭載された大出力ブースターのおかげで速度だけならば第三世代にも追いついていける・・・はずのスペックを持つ。しかも傍目には通常型と見分けが付かないという鬼畜仕様。
サブマシンガン「ネフェルテム」を二挺展開して、高速で接近する。

「す、すげえ音兄・・・」
「格段に動きが良くなりましたね、音羽君すごいです！」

管制室の空中ディスプレイにはセシリアに追いつがる音羽の姿が映し出されていた、現在は互いに円軌道を描きながらライフルによる攻勢。一歩も譲らずただひたすらに距離を保ちながら相手を牽制している。

「確か、F型^{タイプ}って速度特化の失敗作ですよ？ほとんど静止ができないために使い手は今ほとんど居ないって言われている・・・教師の中でも使いこなせる人はいませんよ？」

「まあ、そこをどうにかしてしまうのがあいつだ。中学時代に街中上空を飛んでいたからな、それも関係しているんだろう」

「ああ、あれかあ」
「え」

そこには姉弟揃って思い出したように語る二人とそれについていけない一教師と生徒がいた。

「やっとわかったぞ、ブルー・ティアーズの弱点が！こいつを動かすときにお前は他の動作ができない、そうだろうセシリア！」

歯噛みしたセシリアがお返しとばかりに青いレーザーの雨を降らせ、フルオートって・・・銃身焼けるぞ。対策してなければ、熱で溶け落ちるがな。ちなみに俺はエネルギーの効率や使用経験から実弾のほうが使用率が多い。というか、今装着してるF型はエネルギー兵装を載せるほどエネルギーに余裕が無い。それほど速度重視らしい、エネルギーパック式にすれば可能だけでも面倒だ。

「そおい！！」

加速したまま、身体にかかるGを無視してビットをスナイパーライフルで順に撃ちぬく。クロスクリットターン三次元躍動旋回での高速機動は照準に入らせないばかりか、反撃も織り交ぜて来ているために少しずつセシリアが押される。なにせ相手は、日常的に時速400kmで飛行をしていた人間なのだから。

「なっ、身体が持ちませんわよ！？」

「譲れない戦いがあるんだああああ！！（ミリアさんの意味で）」

至近距離まで肉薄し、高加速ブースターを解除。バージ近接ブレードを振り抜き、スターライトmk？を破壊する。ランスへの変形が間に合わなかったために容易く銃身が切断されて使用不能になる、収束部が壊れても射撃は可能だが収束して威力を上げているために威力はほぼ無いに等しくなってしまう。爆発する直前にセシリアが投げってくる蹴り上げて懐に入り込む。ここからは、俺の領域だ。

「失敗作と名高いF型の真髄^{タイプ}、見せてやる！」

一番の特徴は、その軽さ。そして、ほぼ専用と言われている悪趣味な近接装備。誰が考えたのか今では分らないが威力だけは半端無いというブースター^{バイナリー}が刀身とは逆位置に並列に取り付けられた物理刀、その名も鋼の心^{スチール・ハーツ}。持ち手部分にはリボルバー式の薬室があり、そこに装填された二種混合式の気化燃料を爆発させ刀身を加速。目標を一太刀のもとに切り伏せるというものだ。その威力は第二世代機の武装の中でも三本の指に入る。しかも機体自体の驚異的速度も加算される。

持ち手の引き金^{トリガー}が押し込まれ、鋼の心臓^{ブースター}に燃料^血が送り込まれてブースターが火を噴出して加速する。瞬間、爆発的な速度で振るわれた横一閃は蒼穹の機体のシールドエネルギーを削り取った。

『勝者 如月音羽』

「な、なんとか勝つてぶへはあ！」

蹴り上げたスターライトmk?だったものが俺の頭部に不時着、そのせいで一桁だったシールドエネルギーが0になる。あ、危ないな、今度から蹴り落とそう・・・などと考えていると目の前に人の手が？

「流石ですわ、音羽」

「ギリギリだったがな、まあ、こつじやなきや元執事って言えないからなあ」

そのまま空中で握手する、全力で戦った二人を歓声が包み込んだ。

40・蒼穹の狙撃手 漆黒のバトラー（後書き）

どうでも良い作品情報

出てきたオリジナル武器は・・・お察しください

10/4 戦闘機の機体名、修正しました。

カタパルトは作者の趣味で蒸気で行きます、好きなんですから

41・結果がこれだよ（前書き）

短いです

41・結果がこれだよ

あゝ、うん。画面の向こうの皆、おはよう・・・時間がわからん。おはこんばんちわ・・・どこか遠くの世界で誰かが言ってる気がする。まあ、いいや。電波なんて受信しても気味が悪いだけだ。ちなみに俺VS一夏は俺が勝った、5分間ストーカーも真っ青になるくらい追いかけながらスティール・ハーツの連撃を食らわせた。バリア無効化攻撃なんぞ、当たらなければどうってことは無い、スポーツの剣技と実戦の剣技はレベルが違うってことだ。けして、「三日連続戦闘なんてめんどい」と言う馬鹿^{作者}の陰謀ではない。

翌日、火曜日。朝のSHR・・・でそれは起きた。

「では、一組クラス代表は織斑君に決定です。一つながりで良いです
ね」

『ね』

クラス全員（一夏を除く生徒）が声を揃えて顔をそれぞれ見合わせる、教室の前で一夏が散々なくらいに慌てていた。暗い顔をしているのは一夏のみ、ふうははは！・・・・・・はあ。

「先生、質問です」

「はい、織斑君！」

質問は手を上げて元気にしよう・・・基本だな、何を聞くかは無論わかりきっているけども。

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってる

んでしょうか？」

「それはですね」

ガタツと立ち上がる、勿論セシリアも同時だ。腰に手を当てて指を指す、標的は一夏に決まってる。

『俺（私）が辞退したからだ（ですわ）！』

どや顔で一夏を見据える俺達、なんでどや顔って質問はしてはいけない。一夏が心底嫌そうな顔で見ているが無視、細かいことは気にしてたらいけない。「細かいことじゃねえよ！」知るか、俺にとつては細かいことだ。

「ええ、一夏さんが負けてしまったのは当たり前ですし」

「だが、伸びしろがあるってことで経験積ませるためにだ。お前言つてたろ？」

「まあ、そうだけでも」

「なら、頑張れ一夏」

「ああ、俺がやってやる！……で、本音は？」

「めんどいので馬鹿な一夏君に押し付けて^{任せ}楽をしようと^{頑張ってもらおう}」

「本音と建前が逆だ！？」

まあ、千冬さんに説明したし。実際一夏には頑張ってほしい、覚悟があるならそれ相応に力も付けて欲しい。めんどいものも45%くらい入っているがな、ここが藍越だったらやってるが生徒会長がいつって時点で却下だ。うん。わざわざ面倒ごとに首は突っ込みたくないからな！

「それでは、織斑君がクラス代表で決定です。良いですね？」

『はーい!』

IS学園一年一組、今日も今日とて平和である。ついでに俺は副代表……解せぬ。

41・結果がこれだよ（後書き）

どうでも良い作品情報

セシリアさんマジ活躍（予定）

42. はじめての実習

「おくれる〜〜〜!!」

「なあっ!? 音兄、俺も乗せてくれ」

「残念ながら一人用だから、ごめ〜ん」

男子に宛がわれた更衣室から実習が行われるグラウンドまでは結構な距離がある、なにせ軽いマラソンくらいには・・・遅刻した場合は織斑先生からのありがたいお仕置きがある。・・・ので着替えが終わった俺は開け放たれた窓からダイブ、小型ジェットパックを召還して時速200kmでまだ着替え終わっていない一夏を尻目に高速移動中。無断のIS展開は許されていないがこれの許可は取っているため咎められない、まあ、委託企業の資金提供がされてるからそのツテで言うのが正直なところ。ちなみにこれの操縦はライセンスが必要、本当は緊急時のために取得したものなんだがな。どんなのかわからない? JET MAN ってググレ、画像検索で。それに普通のゴーグルとISスーツ着た状態だ、色はブルーな。ついでに言えば俺のISスーツは半袖ハーフパンツの密着型だ、汗でべたつかないって良いよね!

「とおおおおちゃあああく!! つせい!」

一端着地してから、軽くジャンプしてジェットパックを格納。ベルトにはできないので腕輪にして完了と同時に再び着地して列に並ぶ。クラスからはおお〜という声が上がったが・・・なぜかセシリアだけじと〜と睨んできていた。だから俺が何したよ、前に聞いたら俺が悪いらしい・・・理由は教えてくれなかったがな。それだと直しようがないと思うんだがなあ・・・あ、一夏がやつと来た。

「遅いぞ織斑」

「すいません・・・（音兄エ・・・）」

四月下旬、そろそろ遅く咲いた桜も散って緑が増え始める・・・やべ、桜餅食い損ねた。頃・・・少し授業にはとうてい関係ないことを考えながら今日も今日とて鬼教官と言う名の織斑先生のありがたいう言葉を聞いていた。ハイパーセンサーのおかげで良く聞こえる。

「早くしろ、熟練した操縦者ならば展開まで一秒とかからないぞ」

ISは一度、最適化フィッティングをしたらずっと装儒者の体にアクセサリーの形状で待機している。俺の場合は貸し出しのために仮最適化だがな、セシリアは左耳のイヤークラス。俺は眼鏡・・・一夏はガントレットだ、どこがアクセサリーだよ一夏の場合防具じゃないか。

「集中しろ」

次は出席簿で叩かれるな、あのブラコン教師ちふゆのことだから。流石ブラコン、容赦無いぜ！え、なんで俺が叩かれないって？ポーカーフェイスだからに決まってるジャマイカ。それでも軽く睨まれてるがな！

「・・・・・・・・」

一夏が右腕を突き出して左手でガントレットを掴んでいた、あえて言おう、中二くさいと。いやまあ、それでゆっくり展開されていくから面白いんだけど。0.7秒の展開時間、その後には白式を纏った一夏がそこに立っていた。人のやり方には

「よし、飛べ」

言われてからのセシリアの行動は早かった、俺は一気にブースターを噴かして急速上昇。F型の速度はやはり良いなあ、一夏がのろのろと飛んでくる。スペックはブルー・ティアーズより上なのに勿体無い。それに出力全開だと追いつけるF型もどうかと思うけどな。

「打鉄がその速度と言うのも、面白いですね」

「まったくだ、というかこのままこいつが専用機でも良いんだがな」

それにしても俺に専用機ってどんなのが来るんだろうなあ、クライング・ウルフみたいな四脚でも良いぞ。……って一夏、遅い！ 見てることちが心配なくらいにぐらぐら揺れながらやつと並んだ。別に前方に角錐があるイメージなんてものは正解じゃないし。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索するのが建設的ですよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体あやふやなんだよ。なんで浮いてるんだこれ？」

「どこその毎回マミるあんど違って機械なんだから「そういうふうにしてる」で良いんじゃないか？」

どうせ流動波干渉だ反重力制御だ説明したって理解できないだろうし、あれ、ISの技術流用すればBB部隊の装備再現できそうじゃね？ それよりもREX乗ってみたいけども。まあ、今は関係ないか。

「織斑、オルコット、如月。急降下と完全停止をやって見せる、目標は地表から10センチだ」

おゝ、地上で話している千冬さんの顔のしわまで良く見える。まあ、機能制限外せば何万キロ離れた場所も見れるんだけどな、流石宇宙開発用マルチフォームスーツ！一度開発者と話をしてみたいものだ。でも、なんか人格破綻者という噂も。興味無い人間にはとことん冷たいらしいよ、どうやって生活してんだろうか。

「では、お先に！」

おゝ、流石候補生。見事にやってのけた……。うん。さて、次は俺か……。せめてここくらいは良いとこ見せられなければいけない。代表決定戦で年上の威厳を簡単に失ったために俺は負けてられないんだよね、まあ、無理はできないけどもさ。

「っせい!!」

地面へと姿勢変換、そのまま二枚の物理シールド裏の高出力ブースターによる爆発的な加速で移動。地表近くでPIC全開と逆噴射で急停止。っふうっ、スリル有るなあ。まあ、こうできるのも毎日セシリアが練習に付き合ってくれてるからだな、感謝しなければなあ。

「ふむ、9センチか。なかなかだn……。なんだ？」

後方で一夏がクレーターを作って犬神家をやっていた……。なんだこれ、強制解除してるしある意味すごいわこれ。一夏にはギャグのセンス……。無いな、日常的にそう面白くないの考えてどや顔してるだけだし。それを考えたら今回は面白いほうか、ついにリアクション芸人目指すのか？違っただろうけど。

「好きでやったんじゃないやねえええ!!」

無理やり頭を地面から引っこ抜いて一夏が立ち上がった、一瞬、一角の白い何かが見えたような気がするが気のせいかな。そうか。ってセシリアは普通に心配してるのに、箒さんがIS付けてるから大丈夫発言・・・あなた一夏のこと好きなんですよね？ひとまずなんか言い合ってるのを横目に一夏回収、わっなんか火花が見えるよ。

「馬鹿者、誰がグラウンドに穴を開けると言った」
「・・・すみません」

一夏の醜態にクラスの女子がm9状態、ISはどうやら一夏のハートは守ってくれなかったようだ。

「情けないぞ、一夏」

箒が一夏を目尻上げて睨んでいるが、箒の教え方はスーパー擬音タムだった。理解できる人はおそらくこの世界に二人といたないだろう、某ドモンなら理解できそうだが。「くいつて感じ」とか「ズガンって感じ」とか・・・うん、わからん。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいはできるようになっているだろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ、馬鹿者」

「はい！」

「よし、では始めろ」

その途端、一夏が再び右腕を掴み瞼を閉じて集中を始めた。右手のなかで徐々に光の粒子が姿を結び始め、0.7秒。白式唯一にして最強の刀、雪片が現れる。頑張ったんだよな一夏も、こうなるまで1週間かかった。まあ、普段の生活で手元に刀が出てくるイメージ

なんてしないからなあ。

「遅い、0.5秒で出せるようになれ」

やっぱ厳しいなあ、少しくらい褒めてやっても良いのに。一夏も軽くうなだれてる、頑張れ一夏。って次は俺か？

「次、如月」

「サー、イエツsぬわあ！」

「返事は『はい』だ（ふざけるなよ？次ふざけたらry）」

「はい！（いかん、目が怖い。本気だ）」

出席簿の衝撃で痛む頭をさすりながら軽く右手を振り、加速する刃をイメージして刀を抜き放つ動作をしてスティール・ハーツを展開する。勿論、薬室にカートリッジを装填して安全装置を解除した状態で。青い空にはこれの青も合うなあ。ちなみにスティール・ハーツは？から現在も開発中らしい。噂では？まであるらしい・・・機体は失敗なのに。

「ふむ、次。オルコット」

「はい」

左手を肩の高さまで上げて、真横にズビシッ！と突き出す、見事なツッコミアクション・・・良いセンスだ。そしてそれが終わったころにはスターライトmk？が握られていた、視線を向けるだけですぐに発射態勢へ。流石代表候補生、セシリアサイコー！！（セシリア分が毎日補給できるため幾分かおかしくなっています）

「ただし、そのポーズは止める。横に銃身に向けて誰を撃つ気だ、正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれは「直せ、いいな」……はい」

ああ、千冬さんの前では伝統の構えもダメなのか……。今度時間あるときに相手しよう。俺が銃の展開を迫られたら必ずこうするが、どうやらセシリアには抵抗はできなかったらしい。あの睨みはきついからなあ。

「まあ、気にするな。今度にも一緒にやろう、懐かしいし」

「はい、是非！」

「なにイチャイチャしている。オルコット、近接武装を展開しろ」

「は、はい！」

イチャイチャって……。俺がセシリアと？そんなことあるわけ……。ここに突き刺さるような視線が来てるからやめよう、精神的にきついわこれ。俺って何か悪いことしてるのかなあ……。謎だ。

「音兄……。セシリアが可愛そうだ」

「一夏、お前が言える立場か」

セシリアはスターライトmk？（正確にはランサーカスタムって言うらしいよ）で慣れているのか、すぐに手元に近接武装である「インターセプター」を展開した。どちらかと言うとコンバットナイフサイズ、近づかれた場合の緊急装備みたいだ、あまり丈夫そうでもない。まあ、中距離型だからなあ。

「ふむ、では時間だ。今日の授業はここまでだ、織斑、グラウンド

を片付けておけよ?」

さて、一夏は自業自得だし。ささつと着替えて昼食、助けを求める声には答えるが自業自得はお断りだからなあ。今日は何食べようかな、それとチーズケーキも忘れてはならん。あ、セシリアも誘うか。

「セシリア、昼一緒に食わないか?」

「はい、是非とも」

42・はじめての実習（後書き）

どうでも良い作品情報

セシリアさんスペック上方修正

43・祝賀会だって（前書き）

ちよい今回は出来が悪いです

43・祝賀会だつて

「ふうん、ここがそうなんだ」

日も沈み、夜。IS学園の正面ゲート前に小柄な体には不釣合いなボストンバックを脇に抱えた少女がいた。

「つまみ食いすんなこの泥棒猫〜!!」

「少しじゃないのよ〜!」

その前を高速で水色の髪の少女と後ろをサイドテールのコック服を着た女子が走っていったが、声をかけようとしたところには既に遠くへと走り去っていた。通り過ぎた際に起きた風に特徴的なほど鮮やかなサイドアップテールがなびく、それを留める金の留め金が月光に反射して輝いていた。

「受付ってd……行っちゃったわね、どれだけ速いのよ」

仕方なく上着のポケットからくしゃくしゃになってしまった一切れの紙を取り出す、その扱い方から少女の性格が窺える。大雑把・活発・ツンデレである、最近の悩みは体のある部分のことであったりする。

「……まったく、本校舎一階総合事務受付ってどこよ」

文句を言っても返事をするわけがない、多少イライラしながら紙を上着のポケットに仕舞う。また中でぐしゃりと聞こえるが気にも留めない、遠くから「邪魔すんなコラ!」とか「いや〜!」とか聞こえるが気にしない。今は目的の場所へと移動するのが先決なの

だから。ちなみに思考より行動なやり方である、悪く言えば「良く考えない」である。

「だから・・・つまり・・・という感じでだな」
「いや、それ分らないって」

聞き覚えのある懐かしい声、歩きながらふと聞こえたそれに少女の胸は高鳴る。予期しなかった再開に思わずガッツポーズをとってしまふ、しかし聞こえたのは意中の相手だけでは無かった。

「くいつて感じってなんだよ」

「・・・くいつて感じた、理解しろ一夏」

「あのなあ・・・」

影から覗いて見えたのは見覚えのある男子と今まさにすたすたと立ち去る少女の姿だった、知らない女子と親しそうに話している・・・さきほどまでの高揚は嘘だったかのように消え、ひどく冷たい感情が胸の中を埋め尽くす。苛立ちが沸き起こるがどうにか押さえつけて歩く。

「時間に間に合わないって言ってるだろうが!!」

「とおっ!」

「あ、また逃げやがった・・・ったく」

総合事務受付の看板が見えたところに丁度、先ほどのコック服を着た人物が一人の女子を逃がしたため息をついていた。黒の左サイドテール、特徴的な優しげのある声に高めの身長。頼りがいのあるその背中、かつて実家の常連であり世話になった人物。

「まだ、30分はあるか・・・仕方ないメール送信つと」

「もしかして・・・音羽？」

「・・・ん？」

なんか懐かしい声を聞いたような・・・どこからだ？見回してもどこにもいないな、俺も幻聴聞こえるようになったのかなあ・・・シヨックだ。さて、気を取り直して食堂行くか腕によりを振るつたら全員満足なはず。盛り付けがまだ終わってないんだよね、某美月さんのおかげで。

「ちょ、ちょっと。無視しないでよ！」

「また幻聴か、疲れてるのかなあ・・・お？」

なんか下から聞こえたので視線を向けてみたら・・・どこかで見たことあるようなツインテ少女がいた。あれ？

「もしかして鈴ちゃん？」

「そうよ！なんで気づかないのよ、嫌がらせなわけ！？」

「ああいや、悪い。もしかして転入か？おそろく一夏目当てか」

「まあね、本校舎一階総合事務受付つてあそこで良いのよね？」

「ああ、あそこだ。一夏は一組だから・・・つとやべ時間だ、じゃあな」

「うん！ありがと」

後ろで「クラス代表変わってもらおうと思って」とか聞こえたが、

俺には多分関係無いだろう。どうせクラス代表は一夏だし、っと就任祝いパーティーの準備しなければ！！腕時計を確認し、俺は全力で一学年食堂へと走って飛んだ。どうせなら祝いは派手にやりたいたいじゃないか。

「というわけで、織斑君クラス代表。如月君副代表決定おめでとー
！！」

『おめでとー！！』

パン、パパンと景気良いクラツカーの音が鳴り響く。俺と一夏の頭の上に乱射されたクラツカーのテープが大量に着地して結構重い、ついでに火薬の匂いがすごい。まあ、祝ってもらうのは誰だって嬉しいよね一夏はいまだにどよんとしてるけど。ここは一学年食堂、時間は夕食後の自由時間を貸しきり。一組のメンバー勢ぞろいで飲み物片手に並べられた料理をつまんでいる。

「これ全部如月君が作ったの？」

「おう、特製ダレに付けて食べてな」

この、後ろの横断幕にも書いてあるが「織斑一夏・如月音羽就任パーティー」は一組女子と料理担当の俺で企画されてる。というか、小耳に挟んだから俺も協力することにした、こういう祝いは楽しくて意味があるからな。って、一夏がまだ暗いなおい。

「これでクラス対抗戦も盛り上がるよね」

「ほんとにね」

「ラッキーだったよね、同じクラスで」

「ほんとほんと」

「俺も楽できるし、一夏は良い力試しになる。ホントに良かった」

今相槌打った娘って2組の人だったと思うんだが、いや、居ても良いんだけどね。てか、一組の人数余裕で超えてるなこの状況は、クラスの垣根越えても別に良いじゃないか。確実に40人越えてるよ
うな感じがするけども。

「人気者だな、一夏」

「・・・本当にそう思うか？」

「ふん」

「素直じゃないねえ、箒も」

「ええ、もう少し素直になれば良いですけど」

「まったくだ」

ちなみにセシリアが俺に腕を回して右側に座ってる、動きにくいんだが。当たって落ち着かないし、まあ、前にそれ言ったらなぜか怒られたからもう言わないけどもさ。あれだよあれ、傍目から見ると羨ましいけど実際は大変なんですよって状況。・・・そーいやセシリアも女の子から女になり始めてるんだよね、成長したのはちよつと嬉しいけど寂しくも感じる。これが親の気持ちなのかなあ・・・ハッ、不穏な気配！

「どうも」、新聞部です。今話題のお二人に取材を・・・あれ音

「つちどこ？」

オーと歓声が沸き起こる、俺はオーな気分じゃないんだが。音っち・
・音兄のことか？ホントだ、いない。

「まあいいや、新聞部副部長の黛薫子よ、よろしくね」
『イエーイ！！』

名紙を受け取る、書くとき大変そうだなあと思った。画数多すぎる
ってこれ・・あ、音兄が観葉植物の陰に隠れてる『教えるな！』
わざわざプライベートチャネルで話すなよな。そこまで嫌なのか、
というか音兄をそこまでさせるって何者さ。

「ではズバリ織斑君、クラス代表になった感想をどうぞ！」
「え・・・えーと」

いきなりボイスレコーダーをずいっと出されても、言う事なんて決
まってるんだがなあ。うーん、どういえば良いんだ？期待のこも
った視線がたくさん突き刺さって大変なんだが、むーん。

「まあ、なんとか頑張ります」
「えー、もつと良いコメントちょうだいよ。『俺に触れるとやけ
どするぜ！』みたいにさ」

そんなこと言われてもなあ・・・あ。

「俺だって、やれる！」
「おおー、かつこいいじゃない。じゃあまあ、あとは良い感じに捏
造しておくね」

そんなので良いのか新聞部、ここに現代の報道の腐敗を見たような気がする。いや、大げさか・・・というかこういうことなのか隠れてる理由は。コクコク頷いてるし、いつもの頼りになるあの面影はどこへやら。セシリアはなんとも言えない顔でため息ついてるし。

「あ、音っちに言っておくけど。取材拒否したら”あの”写真ばら撒くから」

「させるかああ!!っていうか、脅すな薫子」

「あらら、まあいいや。はいはい、譲った理由は?」

突然飛び出てきた音兄、一体どんな写真なんだろうか・・・聞かないほうが良いだろうなああの慌てぶりからすると。なぜかセシリアが顔赤くしてるし、うん、俺は何も聞いてなかったことにしよう。それが一番だ。

「利害一致で押し付k・・・任せた」

「うんうん、よしオツケー。じゃあお礼にたっちゃんにあの写真見せておくね」

「大丈夫だって、一枚だけだから セシリアちゃんも良いよね?」

「はい」

「俺に味方はいないのかよ・・・」

orz状態になっている音兄、なぜ今日は貴重な姿ばかり見れるんだろう。明日は雨でも降るのか?

「じゃあ、ほら音つちも並んで。写真撮るから」

「わあつたよ、俺真ん中で良いのか？」

「（合法的にアピールですわ!）」

「専用機持ちだから良いの!」

「（肩組んでつていうのも久しぶりだな）」

カメラを向けられる、薰子つてのが心配だ。いつだかも転んでセシリアを押し倒しちゃったように見える写真を撮られたし、あれつてこれのことだよちくしょう。まあ、セシリアとの写真なら良いか。俺がいたころの写真は残ってないし。

「じゃあ撮るよ、 $35 \times 51 \div 24$ は？」

「あ、2か？」

「ぶぶ、74・375でした！」

パシャッと音がしたところにはフレームにクラスの皆が入っていました。たどさ、なにいまのみんなの移動速度。人のレベルじゃなかったぞ。・・まあ、十代乙女には物理法則や常識は通用しないってことが。

「なんで入っていらつしやるのかしら？」

「まあまあ、大勢のほうが良いだろ。なあみんな」

「そうだよ」

「抜け駆けなんてさせないもんね」

そんな楽しい宴は11時ころまで続いたとき、俺はすぐに帰ったけど。十代女子のスタミナ侮ってたよ。

43・祝賀会だって(後書き)

どうでも良い作品情報

音羽の総資産(作者のガチ計算結果)

薬品企業の年収からライセンス料3%×5年

約200億円なり

(本人と一部企業関係者しか知らない)

44・記憶の断片（前書き）

少し動くかな、短いです

44・記憶の断片

夢を見る

どこか暖かく

どこか寂しい

最初に目に入るのは透明なチューブのようなもの、液体が満たされた中に幼い男の子が見える。隣には同じようにチューブがありその中に同じ言ように女の子が入っていた。腕を動かしても温度を感じない液体しか触れない。外を見れば白衣を着た研究員らしき人ばかり。

「・・・・・・・・だ・・・・エク・・・・ド・・・・」

「・・・・・・・・マシン・・・・調整・・・・」

「・・・・・・・・DNA・・・・L3・・・・設定・・・・」

とぎれとぎれに言葉が聞こえる、どこかの研究室のようなのだが。それ以上はわからない。

『生体部品生成開始』

『D8筋繊維にエラー自動修正開始』

チューブに繋がれた機器を操作する白衣の男性、女性。若い者から、白髪の年寄りまで。ときどき、身体に痛みを感じる。中身から弄られているかのような不快感、でも嫌にならない。むしろ心地良い。それを感じているということはこの男の子の視点で夢を見ているのだろう。

場面は変わり、同じ場所。でも、研究員たちの顔には焦りが見え隠れしていた。

「強制・・・・・・・・コア・・・・・・・・埋め込み・・・・・・・・」
「不可・・・・・・・・耐久・・・・・・・・エネルギー・・・・・・・・」
「失敗作・・・・・・・・100体・・・・・・・・もう・・・・・・・・」
「・・・・・・・・IS・・・・・・・・無理だ・・・・・・・・」

血眼になって機器を操作する研究員。近くのモニターには数式や複雑な設計図のようなものが大量に羅列され、延々と流れていた。

再び場面は変わる・・・・・・・・視界に映るのは、廃墟。輝が入ったチューブ、血が付いた右手、銃声。

「成功体・・・・・・・・させるか・・・・・・・・」
「撃ち殺せ・・・・・・・・逃がすな・・・・・・・・披検体・・・・・・・・」

なぜか左手には赤い液体の付着したナイフ、右手にはハンドガン。

足元には息絶えた人間だったもの、床はそれから流れ出す液体に染められて小さな水溜りになっていた。後ろには女の子、怯えたような表情で蹲っていた。

「大丈夫、
は俺が守るから」

「ホント？」

「うん」

ふと見上げたそこには自分が入っていたであろう大きなチューブ、下には小さな金属プレートが貼り付けられていた。ところどころ赤いなかがかびり付いているが、かすかに刻印された文字が見える。この夢の主役であるう少年の存在を示す名前。

『一戦闘特化遺伝子強化披検体N - 35』
エクステンデッド

「・・・・・・・・んあ？・・・・・・・・」

何か懐かしいものを見ていたような気がする、幼き日の思い出のような。それしか感じないが・・・・まあ、所詮夢か、それにしてもなんだったんだろうな。

「ほら、起きろ。朝食食いそびれても知らないぞ」
「うにゃ」

「うおわぁ！馬鹿、なんで下着だけで寝てるんだよ！」

中々起きないので布団をめくると、最初に見えたのは紫の・・・所謂勝負用とかって言われそうなブラとパンティー。正直言うと、とても艶やかです、こいつも体型は結構良い方というか良いので。俺だって普通の男子高校生であり思春期ですよ！朝からはダメだってこれは、前屈みになっちゃうから。

「ん、誘惑ですけど。なにか？」

「せんでいい、早く着替えろ。俺は向こう向いてるから」

「中学のときは普通に着替えてたじゃない、もしかして・・・」

あゝ、この後ろから聞こえる布擦れの音が落ち着かん。落ち着け俺、後ろにいるのはただの幼馴染・・・で会ってるのかわからんけど。幼馴染に反応してどうする、ただの節操なしじゃないかよ。早く男同士の部屋になりたいです、むしろセシリアと同部屋だったらもう少し落ち着いてくれたかもしれん。

「わひゃあ！？な、な、にやにを・・・／／」

薄手のシャツごしに感じる二つの暖かくて柔らかいなにか、こいつ・・・わざと当てる反応楽しんでやがる。よく知った相手とはいえこいつのができる女子っていないよね、普通は、こいつが特別なだけかもしれないが。

「そういえば、クラス対抗戦頑張ってたね」

「俺は副代表だから関係無いだろ」

「さて音羽分も補給できたし、私は行くわね」

「説明してけ！・・・行っちまったし」

音羽分つてなによ、そんなことを疑問に思った朝だった・・・。

44・記憶の断片（後書き）

というわけでどちらかと言うと楯無さんの出番でした

どうでも良い作品情報

今作品で打鉄は結構バリエーション多い

45・つるべたツンデレ中華娘登場（前書き）

ISガチャでお嬢様が一発で当たりテンションがヒヤッハーしています

予約投稿の日時間違えてしまっていました、すみません

45・つるべたツンデレ中華娘登場

「おっはよ〜！」

朝の挨拶は元気にしよう、勿論笑顔で。最近は挨拶ができる人が減っているらしい、人との付き合いは挨拶から始まるんだ、しっかりすれば良い人間関係が築けるぞ。

「おはよ〜如月君。転校生の噂って知ってる〜？」

「おう、おはよう。ああ、中国からだったっけ」

遅く起床したために今日は朝食を一人で済ませた、もとい栄養ドリンク。時間が時間だったから遅刻するわけにもいかなかったんだよね、すまん俺の体。千冬さんの出席簿のほうがダメーじ大きいから優先させてもらった・・・転校生ねえ、無粋だから言わないけどね。

「しかも代表候補生なんだって〜」

「へえ、ほお。ふ〜ん」

代表候補生と言えば……………。

「あら、わたくしの機体データでしょうか」

「どっちかって言うと俺らのデータだろうな、タダではやらないけど」

いつもにも増して腰に手を当てるポーズが似合ってる、一夏が考えているようにイギリス人全員が綺麗にできるわけでは無い。これも威厳と嗜みの一つである、俺は一応できるが特に使う用事も無いからやってない。ひとまず、今日もセシリアは可愛いとだけ言っておこ

う。

「このクラスには無いのだろう、ならば騒ぐほどのことでもない」
「そうか？」

さっきまで遠くの自分の席にいた篤がいつの間にか一夏の席へと移動してきていた、もしや忍者か？違うか、そうか、空気なだけか「誰が篠ノ之空気だ馬鹿者」だそうだ、まあいいけど。なんか一歩乱起こりそんな予感がするなあ、原因は主に一夏とか一夏とか一夏とかry。

「どんなやつなんだろうな」

「気になるのか？」

「候補生ということですからお強いのでしょうかね」

つまり・・・優勝景品の「食堂スイーツ一年分フリーパス」が手に入りにくくなるということか、確実に候補生機体データとかでこういうイベントには出る。というかデータ取りのために来ていると言っても過言ではない、ちなみにセシリアもそんな感じである。ついでに言うところのクラス対抗戦とはクラス代表同士による、本格的なIS実習が始まる前の・・・えーっと・・・スタート時点での実力指標を作るためにやるらしい。やる気出すためにフリーパスとかが景品にされるらしい、粋なはからいをするものだ。え、そっちの説明が重要だって？俺にはスイーツのほうが重要なんだよ。

「対抗戦は負けられないぞ一夏」

「まあ、やれるだけやってみる」

「やれるだけでは困るぞ一夏！男たるもの頂点目指していかなば意味が無いだろう」

「織斑君が勝つとクラスみんなが幸せだよ」

「今のところ専用機持ちは1組と4組だけだから余裕だよ」

いや、仮にもクラス代表だから油断できないと思うんだが。専用機持ちじゃない候補生だっているんだから、機体性能が勝利の絶対条件じゃないんだぞ。どこかの池田声の仮面彗星も言ってたじゃないか、え、分からないって？ g g r k s

「その情報、古いよ」

突然教室の黒板側の入り口から昨日ぶり ああ、一夏には1年ぶりか の声が聞こえる、その懐かしい声に一夏が振り返る。俺は最初からそっちを向いていたので問題ない。あ、筭の視線が真剣を抜いた侍のように鋭くなった。いや、元からが余計に鋭くなっただけかって鈴ちゃんそいう風になると

「2組も専用機持ちが代表になったから、そう簡単に優勝させないから」

「鈴……？お前、鈴か！」

「そうよ。中国代表候補生、フアゼンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ！」

おお、なんというカッコつけ。まあ、カッコよく決まってるけどボーイッシュってこういうのを言うのか。うん、勉強になった、いつ役立つかわからないけど。今日もサイドアップテールが陽光に反射して輝いている、健康的ってのは良い事だな。ちなみに鈴ちゃんも一夏のことが好きである、この女泣かせ！「音羽……それ、あなたが言えることですか？」どこがだよ、俺のどこが鈍感でビン・カン燃えない奴だっって言っただ。

「何格好付けてるんだ？ すごい似合わないぞ」

「な、なんてこと言うのよ！ 台無しじゃない！」

流星KYキング、せつかくのシーンを根底から破壊してくれた、おのれデイクイドオオ！！ まあ、某10周年はどうでもいいが、というか、何時になったら一夏はまともな男になるんだろうか。まさか、ここからまた増えないよな一夏ハーレム。一瞬、金髪貴公子と冷水って単語が思い浮かんだが関係ないよなあ！？ まあ、昔から嫌な予感はあるから……ま、一夏のことだからもはや驚かないけどな。

「一夏エ……まったく、お前は……」

いかん、新たな犠牲者が出てしまう。ここは伝統のやり方で伝えねば、一夏と一瞬視線を交わし鈴ちゃんの背後を指差して叫ぶ。

『志村うしろ、うしろ！！』

「え？ ぴぎやア！！」

無慈悲に振り下ろされる名刀『出席簿』、その迷い無き一閃は鈴ちゃんの額に吸い込まれるように命中した。振り返ったら視界から外れなくちやいけないだろ千冬さん！ 叩くのはまだ早いよ、ああ、でも千冬さんがなんか堪えてるようにしてる。ドリフSUGEEEEEE！！

「凰、もうSHRの時間だ。さつさと戻れ」

「は、はい！ 一夏、また来るからね！！ あ、音羽も」

そう言っただけチャームポイントのサイドテールを揺らし、身を翻して

去っていく。その身軽さはさながら猫のようだ、そついや猫つて可愛いよね。まあ、セシリアのほうが何倍も可愛いかな！それは譲れん、あ、SHR始まる。ってか、俺はついでかよ、まあ別に良いけどさ。

「さつさと戻れ」

「はいいー！」

結局今も千冬さん苦手なのか、昔からだよね。懐かしい、っと席に戻らないと大変だな。一夏はどうせ自分に迫る危機に気づかないで「なんで格好つけようとしたんだ？」とか考えてるんだろ、目の前に武神が立っているけどもシラネ

「あいつ、IS操縦者になったのか・・・」

「一夏、あいつは誰だ！」

あ、あ、あ・・・どんどん他のクラスメイトも一夏の元へと質問に行ってしまう、数人は俺の動きと表情と時計を見て自重したかな。

ズバンズバンズバンズバン！！

『・・・・・・・・！！』

「席に着け馬鹿者共」

スライドしながら残像を残して振り下ろされる出席簿が火を噴く、並んで頭を抑えて蹲る女子とその中心にいる一人の少年という不思議な構図が出来上がった。なんだこれ。

ちなみに鈴ちゃんのが気になって仕方ないのか、箒がその後の授業で6回叩かれたのは不可抗力でもあると思いたい。

45・つるべたツンデレ中華娘登場（後書き）

どうでも良い作品情報

セシリアと楯無にしてほしいコスを作者がこっそり教えて欲しがっていたりする

46・通常営業の喧騒（前書き）

ネタ会話多目です

46・通常営業の喧騒

「お前のせいだ！」

「なんでだよ……」

昼休み、昼食をとろうと食堂に向かったところ。一夏が箒に理不尽な説教をしていた、いくらなんでもそれは無いだろよ。自業自得だし、よりによって千冬さんの授業で考え事して話聞いてないでいたらそりゃあ叩かれるわな。しかも6回も、見てるこっちからすれば年頃の乙女らしいんだが、タイミングが悪かった。鬼の……いや、鬼神の居る前ではそういう行動はそれこそネイキッド（ナイフ縛り）でBB部隊同時相手にしてるようなものだ。この例えが分かる奴がいるかどうか知らないけど。

「まあまあ、話は飯食いながらでいいだろ。な？」

「ずっとここで立つてるわけにもいかないしな」

「ええ、座ってゆっくりお話するのが良いと思いますわ」

三人による自然な口撃に箒がわかったとでも言うように頷いて歩き始めた、あ、向こうで鈴ちゃんか仁王立ちして待ってる。心なしかイラついてるように見える、右足の爪先を何回も上下させているからなんだが。そういえば俺はカルシウムを過剰と言えるまで摂取してるのにイラつくことがあるんだが、誰だろうね「イライラするのはカルシウムが足りないからだ」とか言ったのは。まあ、そのために俺は味噌カレー牛乳ラーメンなるものを注文したけど。美味しいのかこれ？

「待ってたわよ、一夏！」

それぞれの昼食をおばちゃんから受け取り、席に着こうと視線を食堂に巡らした先に鈴ちゃんがどくと構えていた。さっきからずっとそのままだったのか、心なしかラーメンの麺がスープを吸って延びてるように見えるんだが。ラーメンに限らずできたてが美味しいんだぞ、てか、結局カツコつけするのか。似合ってるけどさ。

「まあ、とりあえず座ろうぜ。あそこ空いてるし、鈴も早く食わないとダメだぞ」

「わ、わかってるわよ!」

ともあれ、一夏が先導して空いていたテーブル席に座る。円形のテーブルを囲むようにしていつものメンバーが座る、順番は一夏・篤・鈴。丁度鈴が一夏の隣に自然な感じで座っていた、俺とセシリアはそれに向かい合うようにして座っている。

「それにしても久しぶりだな、一年ぶりか?元気にしてたか?」

「元氣も元氣よ、誰かさんのおかげで(チラ)」

「……(プイツ)」

「どうしたんだ音兄?」

「なんでもない」

そうだ、なんでもないんだ。別に月1で一夏の写真をメールで送っていたんだ、とか言えない。しかも涙目+上目遣いのコンボで撃墜されたから断れなくてとかも言えない。まあ、好きな人に突然会えなくなることになるなんて悲しいからな。まあ、並木野で生徒会長やってたときの癖というか「いつでも、どんなときでも生徒会長は生徒の味方」っていうのが固定観念であるというかなんとか。まあ、それはいいや。

「俺が良く行つてた料理屋の娘さんなんだ（ボソリ）」

「やはり・・・一夏さんのことを？」

「うん、結果はこのとおりだけでも」

目の前では二人の少女が互いに火花を散らせて睨みあっていた、一夏、幼馴染にファーストとかセカンドって付けるなよ。ついでに言えは一夏曰く、簪ちゃんはサードらしい。だから幼馴染にファ（ry

「付き合ってるのか一夏！？」

「つ、付き合ってるなんてそんな・・・／＼」

「なんでそんな話になるんだよ、ただの幼馴染に決まってるだろ」

『・・・・・・・・・・』

「なんで睨んでんだ？」

「なんでもないわよ！！」

一夏エ・・・・・・・・どうしてそこでわからないんだ、そこで！諦めんなよ！できる絶対できる・・・・・・・・わけないか。まあ、そういうことはお構いなしに俺は味噌k（ryラーメンを、セシリアは煮魚定食を食べる。おお、結構美味しいなこれ。（作者も食べた経験あり、美味しかったよ）

「鈴音さんですね、わたくしイギリス代表候補生のセシリア・オルコットと申します。よろしくお願いいたします」

「・・・・・・・・誰？」

「なっ！？同学年の候補生も把握しておりませんか？」

「うん、興味ないし」

「なっ！？な、ななあ！？」

セシリアのコメカミに四つ角が見える、突如言われた驚愕の事実によろめきそうになるもどうにか抑えたその顔は真っ赤になっていた。まるでマンガのゆでだこのようだ・・・喋ったら超速で撃ち抜かれるから言わないけど。ひとまず落ち着かせよう。

「言っておきますけど、あなたには負けませんわ!」

「あつそう、まああたしが勝つけどね。悪いけど強いもん」

ふふんと強気な鈴ちゃん。相変わらずだなあ、妙に確信的だし嫌味には感じないんだよね。素で言ってるからなんとも言えない、素で思っつてそのまま口に出すからなあ。嫌味じゃないからもちろん怒る人もいるよ?

「言ってくれますわね・・・」

「変わってないなあ、鈴ちゃんは」

俺がしみじみと昔を思い出して懐かしんでいると鈴ちゃんが一夏にクラス代表か否かを聞いていた、ああ、2組の代表になったって言うってたな。確かもう決まっていたと思うけど、おそらく候補生ってことでの措置か?専用機持ちって言うってたし、中国も第三世代機できたって聞いたけどどんなのだろう。某ナタクみたいにクローが付いてて伸びるんだろうか、それはそれで強そうだな。

「音羽、そんなのなわけ無いでしょ」

「じゃあ、隠し腕」

「気味が悪いでしょ」

「NT-D」

「ここから出て行け!!」

「エネーコントローラー!」

「右上上下A B！つてできるかあ！！」

『いい加減にしろお（なさい）！！』

痛い、人の頭を雪片とスターライトで叩くなんて。なんかズガベシッ！！つて聞こえたぞ、およそ人体から聞こえてはいけない音だと思っんだが。え、ギャグ補正？ふざけるな。てかメタネタやめろ。それ以前にIS用の特殊合金で作られた装備をハリセン代わりにするな、俺の体内に物理的な突っ込み（誤字にあらず）になるから。

「まあ、いいや。じゃあごゆっくり」

「では、わたくしも」

昼食を終えた俺とセシリアは背後から聞こえるいつものどおりの喧騒を聞きながら、教室へと歩いていった。ふと掲示板が目に入ったので何か連絡事項などがないか確認する。ちよつとした連絡事項などはここで開示されるために、食事を終えた生徒がまばらではあるが集まっていた、大きな行事の連絡や情報確認もできるんだよね。

「え？」

「あら」

そこには、クラス対抗戦の出場がクラス代表と副代表の二名に変更されたという事項が表示されていた。

美月が言ってたことって……こういうことだったのかよ、m j k

46・通常営業の喧騒（後書き）

どうでも良い作品情報

原作2巻終わるまで音ucciの本当の専用機は出てこない予定

47・当然の報い

IS学園第4アリーナ、その中央には4機のISが展開されていた。無論、白式とブルー・ティアーズに打鉄のF型と貸し出しの一般機だ。

「まさかタッグになるとは思わなかったよ」

「これも良い経験だろう」

「後で楯無シメる」

「ともかく始めましょう、私と箒さんで攻めますから。お二人で連携してくださいね」

白と蒼、二つの黒が舞い上がった。そういえば何故が一夏が箒とセシリアに追いかけられてボコボコにされるようなイメージが思い浮かんだんだが気のせいだろうか。それはそれで見てみたいような感じもするけど、言っておくが俺はSでは無いぞ。断じて。まあ、美月の困った顔を見てどこかゾクゾクするようなことはあるけども。

「では、行くぞ！」

「上等！」

「全速全身DA！」

「音羽は危ないネタを使わないでください！」

ちなみに俺はいつもの赤縁眼鏡をかけたままである、右目の抑制も兼ねているからな。じゃないと関係ないときに起動して面倒なことになる、この右目のこと知ってるのは俺とセシリアと美月に千冬さんだけ。何かあったときのために敵を騙すなら味方から実践しているのだ。事実、俺がIS学園に入ってから裏で動きが活発になっ

た組織があるとか。正体不明だけど。亡国とかつて名前だったな、
イージス？違うか。

「せやあああああ！！」

「やらせるか！」

篤が一夏にブレードで切りかかるところをハンドガンで牽制する。
もちろんセシリアがスターライトでの正確な射撃をしてくるのでシ
ールドで防ぐ。

「一夏、今だ！」

「おう！」

それから2時間、みっちりとISでの訓練をした俺達。一夏は汗だ
くで疲れきっていた、まあ、何も運動してないでいればそうなるよ
な。今は一夏と篤が反対側のピットにいるのだろう、なんか鈴ちゃ
んが上の通路歩いてそっちに歩いていったけど。

「ふは、ISってのは結構使いにくいな」

「まあ、慣れなければ大変ですからね。安心してください、私がし
っかり教えてさしあげますわ」

「ありがたき幸せでございます、お嬢様・・・ってな」

「やっと様になりましたのね、今更だと違和感ありますけど」

まあそりゃあ、本邸では普通にタメ語っていう暴拳を犯していたけども。良くあんなんで俺やっていれたな、そりゃまあ警護は体に覚えさせられて反射でしちゃうレベルにはなってるけど。執事的スキルは皆無だからな、どっちかっていうと年の離れた妹に今日はをするよって教えて連れて歩いたようなものだからなあ。護衛のほうメインだったし。

「俺の体のことがはつきりして片付いたら良いんだけどなあ」

「何か新しいことは分かりましたの？」

「裏でどこかの組織が動き出したってくらい、俺が一夏のどっちが狙いかも分からない」

死亡扱いになってたらしいけど、世界的ニュースになったからまた振り出しだ。中々俺自身の情報も出てこないし、結局俺はキャベツ特化56円なのか？近所のスーパーで1玉40円だったぞおい。

「右目のあれを使わなければ大丈夫だと思いますが」

「まあ、そうなんだけども」

コネ使ってフランス経由でドイツ軍に聞いてみるかな、こんな造った記録あるか？みたいに、確か遺伝子強化体が部隊配備されてるところがあるって噂程度に聞いたことあるし。そこらへんでなにかしら無いだろうか、せめて56円の本当の意味を知りたいです先生。

「は、厄介な体なこと」

「例えあなたがどんな存在だろうと、私は傍に居ますわよ」

「……（涙目）」

「あ、あら？どうしたの音羽」

「いや、嬉しくて……ああ、俺は今猛烈に感動している！」

いかん、嬉しすぎて涙が止まらない。何時振りだろうかこんなに泣いたのは、おそらくミリアさんに直々に鍛えられてそれがきつくて泣いた以来か。セシリアは何時の間にこんなに人間が出来上がっていったんだ、俺は嬉しいよ！あゝ、涙がやばい。汗みたいになんと流れる。

「もう、そんな大げさな」

「ありがとうな、セシリア」

「まあ、それは良いですから。夕食にでも行きましょう、ね？」
「そうだな」

二人して笑顔で食堂に向かって歩いてみると、何故か一夏と箒の部屋が騒がしい。またなんかやってるのか、どうせ性もないことなんだろうなあ。竹刀と金属がぶつかる音がするし、どうしてそうなった。

「またか」

「またですわね」

はあ、とため息をつくと突然鈴ちゃんがドアを蹴破り走っていつてしまった。……。仕方ないので箒に経緯を聞き、なんでも鈴ちゃんが昔に約束した「料理の腕が上がったら毎日酢豚を食べてくれる？」という「毎朝味噌汁を」擬似四次元ボケットというものを「毎日タダ飯」と勘違いしていたらしい。腕時計からハーフサイズ月光を一機召還して痛みだけを与えるように命令して一夏をボコらせておいた。ついでに捨て台詞も。

「牛に蹴られて死ね！あ、箒も飯行かないか？」
月光

「ああ、一夏。死ねとはいわん、だが死ぬ気で反省しろ」

アッー！ー！とか遠くから聞こえたが気にしない、乙女の純情を弄んだ人間に当然の報いだ。え、月光だからシヤレにならないって？まあ、そりゃあ生体部品じゃなくて電磁人工筋繊維で脚部を作ったからやるうと思えばコンクリートくらいは砕けるが。非殺傷、痛覚のみっていう稼動命令だから死にはしない。痛みは半端ないだろうけども。精々ワイヤーアームで痺らせるくらいだし。

「は、まったく一夏が将来暗い夜道で刺される未来しか思い浮かばない」

「同感だ、鈴音とやらが不憫でならん。いくら恋敵とはいえあまりにあまりだ」

「いつから一夏さんはああでしたの？」

箒と俺が向かい合ってため息を吐く、そこからかよ。

「小学生のころからか、道理でなあ」

「やはり中学も変わりなくか、まったく」

「・・・一夏さんは一夏さんですね・・・」

食堂に三人のため息が響くように吐き出されたのは言うまでもない。

47・当然の報い（後書き）

どうでも良い作品情報

作中に出てきた月光は音羽宅にも一機オリジナルサイズで配備中
（ステルス状態で）

48・番外編 IF その1「幻想入り」(前書き)

息抜きに番外編、時間軸は音羽が高1のとき

本編のIFですので平行世界のことだと思ってください

(作者は詳しくなく、ノリですので細かいツッコミは無しが嬉しいです)

48・番外編 IF その1「幻想入り」

「あ？」

とある休日の土曜日、銃器などを裏ルートで仕入れてほくほく顔・
・・・それはそれでおかしいか。まあ、例えて言うならISの8巻
がやっと出て買えたぜ！って感じるくらいに嬉しいみたい感じた。
例えばメタなんて言っちゃいけない、分かりやすければ良いんだ。
で、なにこの足元の穴は。

「おわあ！？なんだこれ？ってか、落ちるゝ！」

どうにか飲み込まれまいと道路を掴むも、穴がそれ以上に広がり飛
ぼうにもジェットパックが整備中であり手元に無いことを思い出し
た。あれ、詰んだ？なにこの状況、え、え？

「NO~~~~~!!」

最期の踏ん張りも効かず、その真っ暗な穴に俺は飲み込まれてしま
った。藍越学園に入学して初めての夏休み、初日の出来事である。

「どこだこい」

気づけば見知らぬ森の中、周囲には青々とした森林が遠くまで広がっていて、イオンが過剰摂取できそうなくらいだ。過剰摂取とかイオンにあるかどうか知らないけども、人っ子一人見当たらない、動物の気配も感じない。あるのは視界いっぱい広がる森林、もとい樹海だけである。

「携帯は圏外、GPSも不可。どうということなの」

衛星の回線に乗っ取る魔改造を施してあるにも関わらず、携帯の左上にはどや顔で圏外が鎮座している。まだ買って改造してから三日しか経ってないぞおい、すぐに使えなくなるとは何事だよ。せつかく米軍の軍事衛星乗っ取れるレベルにしたっていうのに、あ、身の安全って意味でね。軍用レーザー砲搭載されてるから。

「まあ、悩んでも仕方ないか」

まずはどこか人のいるところに出て、ここがどこかなど情報を手に入れなければいけない。悩んでいる暇なんてないんだ、早く家に帰らなければ・・・あのままイギリスに墓参りに行く予定だったけども。ひとまず、現状を打破するために俺は森を歩いていった。風の向きからしておそらくこっちに行けばいいはずだ。

そうは言ったものの、かれこれ二時間。さきからぐるぐると同じ場所を歩いているような気がしてならない、目印を付けてきたからそれは無いとわかるが・・・景色が変わらない。このままでは結局遭難してしまう、すでに遭難してるような気がするけども。

「まいったな」

諦めて死神の瞳を起動させようと眼鏡に手をかけようとした途端、リーバース・アイ近くの草むらから何かが動く音が聞こえた。

「リスか？流石に熊は無いだろうが」

とりあえず気になったので自身が遭難状態にあることも忘れて音の発生源へと近づいていった、できればリス所望、可愛いは正義である。誰か・・・確かジャックがそんなこと言ってた、絶対違うと思うが。

「うおっ!？」

突然足元に飛び出てきたものだから、思わず驚きのあまり後ずさり。そのまま後ろへと倒れこむように転んでしまった、丁度尻が当たったところに小石が突き出ていたみたいで痛い。まだ痛みが残るそこをさすりながら飛び出てきたそれをようやく見る。白い・・・毛玉？目と口はついていてみたいだが、何も言わない。じつと俺の顔をガン見している、なにか言ったら言っただけ怖い感じもするけど。油で揚げたらおいしそうだなこれ、抹茶塩を少し振りかけてサクツと。ひとまず初見の生物であるのは確かだ、なんだこれ。

「・・・・・・・・・・じゅるり」

「・・・・・・・・・・（ガン見）」

小腹が空いてるし、捕獲してみるか。新種だったらおそらく研究所とかから報酬とかも貰えるかもしれない、既に総資産が企業のそれを超えてるけど。一昨日に銀行口座の金額見たら大企業の年収数年分になつていたけども、どう使えと？オルコット家には裏ルートで送金したけどもさ、それより今はこいつを捕まえるのが先だ。

『・・・・・・・・・・』

今まさに手を伸ばそうとした手前で、その美味しそうな毛玉は素早い身のこなし（？）で遠くへと飛び跳ねて逃げていつてしまった。ああ、貴重な不思議生物兼食料になりそうだったなにか……。名残惜しくそれが居なくなつた方向を見ると、いくらか明るく見えた。どうやらその先は開けているようだった。

「お、おお！出れたー！！」

5分ほど歩いていくと、見渡す限りが広大な草原になっていた。まあ、濃い目の霧がかかっていて地平線が見えないんだがな。それでも森の中で過ごすようなことにならなくて良かった、持つてる食料なんてカロリーメイト食いかけの一本しか残ってなかったからな。流石に寝袋無しで野宿はきつい、いくら大丈夫なように鍛え上げられてしまったとはいえ。

「どうするか、このままここに突っ立つてるわけにもいかないし」

ここから人が住んでいそうな集落は見えないが、森と反対側になら人里くらいはあるはずだ。というか、無かつたらマリアナ海溝なみに深いため息を限界まで吐くことになりかねない。ジェットパックが手元に無い以上、上空から飛行して調べることもできないし。・

・・・歩くしかないか。

歩き始めて既に10分が経過した、どこにも集落なんて見えないし水田のようなものも見えない。心地良いそよ風が俺の顔を優しく撫で付けるだけ、あゝ静かだなあ。まあ、まさかこんな場所で迷子とは夢にも思わなかったわけですが。平原で迷子とかどうやったらできるんだろうね、俺がなうな感じでそれだけど。

俺のチタン合金ハートが傷ついてため息をはあと吐いていると、どこからか声が聞こえた。

「どうして迷子になっているか知りたい？」
「ん？」

項垂れていた顔を声の聞こえた方向に向けると、そこに青い服を着た小さな女の子がどしつと構えて立っていた。軽そうなのにどっしりとはこれいかに、帰れたら一夏にでも教えておこう。で、迷子の理由だつて？

「道に迷うのは妖精のせいなの」
「・・・厨二？邪気眼でも発動した？」

というか、このISっていう科学技術の塊が世界の中心となっていて世の中にそんな非科学的なものを出されても。普通ならはいそう

ですかつて納得できるわけがない、というか中二病患者を相手に話している暇など無いんだが。見たところ小学生っぽいし、ひとまず人里まで案内してもらおう。

「違うわよ！いきなり失礼ね」

「ああ、すまん。ところでどこか近くの人里まで案内してくれないか？君はどこに人が住んでるか知ってるかな？」

「もちろんよ！」

おお、助かった。元気に返事をしてくれただってことはもう安心だ、無事に人里に行ける。

「じゃあ、案内お願いしても良いかな？」

「道を教えてほしいの？それじゃあ・・・」

「勿論お礼はするよ、できる限りだけど」

俺が言い終わった瞬間、両手をこちらに向けてくる女の子。なに
するんだろっ、おんぶでもすれば良いのか？気の強い子みたいだから、それは流石にありえないか。以上、セシリアを相手に頑張った俺の経験による考察終了。

シユパン

「え？」

視界を埋め尽くすつまではいかなないものの、多数の小さな氷塊矢のように放たれて。そのうちの数個が俺のすぐ真横を通り過ぎていった。当たりはしなかったものの、サイドテールに少し掠った。体に命中しなかったものの、掠った髪が少々散らばったことから相当の威力を持つことがわかった。体に当たれば怪我だけでは済まないと

直感で理解した。

「いきなり何しやる！」

「案内してほしかったら最強のアタイを倒してみなさい！！」

「は！？」

一体何がどうしてこうなった、道案内を頼んだら何故か戦うことになったし・・・それ以前にあの女の子から氷の弾撃ち出したぞ。教えてくれないか、ジャック。ここに居ないから意味無いけどもさ。そうだ、良く考える俺。きっとこれは夢だ、幼女が手から氷塊撃ちだして俺を狙ってくるなんてことあるわけないジャマイカ。どこのゼビウスでも相手は女の子じゃないぞ。

「あいたたた・・・流石にこんなリアルじゃ夢なわけないか」

頬をこれでもかとおつねって見るが、考えるまでもなく非情なまでの痛みが伝わってきた。認めたくないが認めるしか道は無いらしい、これは紛れも無く現実だった。大人しくやられるわけにもいかないが。

「あんたを冷凍保存してやるわ！」

「話を聞きやがれ！！！」

「当つたれ！！！！！」

「言葉のキャッチボールしてくれ！」

いくら氷塊をばら撒いてくるとは言え、相手は女の子。むやみやたらと銃器を出すわけにもいかず、彼女の撃ちはなってくる氷弾の雨を避けるはめになってしまった。弾薬に非殺傷のゴム弾なぞ入れているわけもなく、対抗もできるわけがない。

「誰か助けてくれ！ help me！！！」

「あらあら……幻想郷に来て早々、大変な目に会ってるみたいね」

さらにそれは言葉を続ける。

「まあ、私が助けてあげるのも良いのだけれど」

悩むような声を出す、気にせず続ける。

「こんなに面白いことに手を出すのもあれだし……もうちょっと様子を見ても良いかしらね」

ふふふと笑いながらその光景を見ていた。

「ここは一つ、彼のお手並み拝見ね」

48・番外編 IF その1「幻想入り」(後書き)

どうしても良い作品情報

本編に関する情報も一部出る予定

49・夏が原作読者に恨まれる理由（前書き）

今回はgottaってしまった感がヤバイです

49・一夏が原作読者に恨まれる理由

一夏に私的制裁を加えてから、一晚。

クラス対抗戦の初戦の相手は・・・鈴ちゃんと元二組代表さんであつた。

ついでに言えば、5月に入つたというのに鈴ちゃんは一夏と話すことなく嫌悪感をオーラとして見えるんじゃないかというほどに露骨に出していた。小さい虫くらいだったならその気迫でやられそうだなと思うくらいだった、一夏、早く謝ってくれ。いくら自分に向けられたもので無いとはいえあの空気は気持ちが良いものではない。

「IS使つた訓練も今日で最後か、心配だなあ」

いつもどおりの一日を終え、日が西に傾き始めた放課後。明日からクラス対抗戦用にアリーナが試合用に調整する期間に入るため実質最後のISを使つた実習時間となる。まあ、これだけ大きいアリーナを使うんだから剣道などのスポーツとはする作業が比べ物にならないほどに多くなるので仕方ないことではある。

まあ、ISが飛び回つても端から反対側まで行くのに結構かかるかなあ。

「IS操縦もそれなりに様になってきたからな」
「まだまだ俺は足りないよ」

ちなみにメンバーは俺とセシリア、一夏に空気「空気ではない！」・
・ 箒である。最近ではクラスの女子が慣れたためか落ち着いてきたために質問攻め（主に一夏が、俺は避けた）や追っかけ（俺は空の旅、一夏は放置）も収まっていた。まあ、俺は見つかる前に逃げたり捲き菱をばら撒いていたから主に逃走手段を持たない一夏が楽になっただけなんだがな。

「せめて助けてくれよ、男は二人だけなんだからさ」

「いや、そういうのは中学で十分だ。月単位のほうがマシだろう」

思い出すは、生徒会就任後から始まった俺の追跡劇。校内にいる間はどこからか視線を感じ、カメラのシャッター音が聞こえ、知らない間に生徒の間に俺の写真が広まっているという状況。IS学園祭に美月が招待してくれたときは同期の並木野出身生徒による伝言であれこれ追われて女装する羽目になったりした。黛にはそのときの写真を撮られた……一生の不覚！！

「それにしても、音兄の専用機って何時来るんだ？」

「早くても臨海学校ころ、遅ければ夏休み終わってからだってさ」

なんでも英国王室で、認定騎士だからと現在急ピッチで建造が進んでいるらしい。しかも女王陛下直々の命令で……まさかの稼働データは機体の性能評価のだけで良いという計らい。逆にそれで良いのか？とこちらが心配になるほど、「騎士としての生き方が対価です」と言われてしまったので……どうしようも無いけど。

「まあ、セシリアのおかげで良く動けるようになったし。フリーパスのためなら……ふふふふ」

「少しどころか結構怖いんだが」

「待つてたわよ一夏!!」

いつもと変わりなく、第三アリーナのAピットのドアを指紋・静脈認証で開けると。そこにとある人物が仁王立ちで待つていた、腕組みをしているのは良いが一夏を籠絡させるには一部分が足りなかった。箒がやると威力抜群だろうなゝなんて考えながら痴話喧嘩をセシリアとともに紅茶を飲みながら眺める。我ながらどうでもいいことを考えるようになったものだ。

「で、一夏、反省した？」

「は？なにが？」

「・・・だから、あたしを怒らせて悪かったなあゝとか無いの？」

「そう言われてもなあ、お前が避けてたんじゃないか」

その瞬間、一夏を覗いた空間が凍りついた。ビシッという嫌な音がしたのは気のせいではない、決して。

頭痛が痛くなった（日本語がおかしいのはイギリス育ちだからと思いたい）、目の前に原因候補がいるけども。

「あ、あんたねえ。女の子が放っておいてって言ったたら放っておくわけ？」

「おう！」

「・・・一夏、お前に分かりやすく教えてやる「押すなよ！絶対押すなよ!!」だ」

「なるほど、勉強になるな」

「例えばそれなのはまあいいとして、そういうことよ」

これで理解する一夏も一夏なんだけどな、いつも面白いかどうかは知らないが洒落を思いついてるみたいだし。これくらいが丁度良いだろう、うん。セシリアは良く分かってないみたいだけど。

「謝りなさいよ！」

まあ、一夏が理由を説明しろとか言い始めて口喧嘩が勃発。理由を言えるわけがない鈴ちゃんが謝罪をとにかく要求し無限ループ・・・お前らなあ、もう少しお互いを理解したらどうなんだよ。ほら、鈴ちゃんなんて恥かしくて顔真っ赤にしちゃって、そろそろ仲裁しないとヤバイかな？

「じゃあ、負けたほうが買ったほうの言うこと一つ聞くつてのでどうよ！」

うげ、いきなり巻き込まれた。

「じゃあ、勝ったら理由説明してもらうからな！」

もうやめて、鈴ちゃんのライフはもう0よ！というか、それって死ねってことかよ。朴念仁って怖いな。

「い、いや説明は・・・／＼」

「なんだ、怖いのか？恐怖なんか捨ててかかってこい！」

負けず嫌いに挑発とか、そんなこと言ったら鈴ちゃんが対抗しないわけじゃないか。これって俺も巻き込まれたってことだよな、確実に。ねえ？セシリアは「頑張って！」って顔で笑顔を向けたあ

と視線逸らしたし、筈は頭抱えてため息ついてるし。

「い、言ったわね！そっちこそ覚悟しておきなさいよ、この馬鹿！
鈍感！朴念仁！」

むかつ。

何か嫌な予感、こういうときは大抵良い事が起こらない。というか
起こせない。

「うるさい、貧乳」

『！！！！？』

瞬間、爆発音とともにピットが揺れた。音の先には、凹んだ壁と右
腕が部分展開されたISを纏った鈴ちゃん。どうやら壁を直接殴っ
たわけではないことから、とてつもない強い力だということがわか
る。え、え、どうしてこうなった。つか、酷いな一夏。

「い、言ったわね・・・禁句を言いやがったわね！！」

あ、ISアーマーがどれだけ強く握られているのかみしみし言いな
がら紫電を放ってる。これはマジで怒ってるな、昔から気にしてた
からなあ、それは一夏も重々承知していたと思ったんだが。おそら
く売り言葉に買い言葉ってところか、ガチで焦ってるし。まあ、自
業自得だよな！

「い、今のは悪かった！す、すまん！」

「今の「は」？今「も」よ！！対抗戦、覚悟しておきなさいよ！？」

鈴ちゃんがガチギレして去ってから……

「ひとまず、しっかり謝れよ？」

「……わかつてる、はあ」

「……まあ、頑張るしかないよね。プライベート・チャネルで鈴ちゃんが「一対一^{サシ}でやらせて」って言ってたし、本気で痛めつけるんですね、わかります。」

49・一夏が原作読者に恨まれる理由（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽の呼称

美月・箒・セシリア・鈴音・虚・雅〓音羽

一夏〓音兄

黛・本音・ジャック〓音うち

千冬・山田〓如月

50・クラス対抗戦！！貞操と約束を懸けた戦い（前書き）

だいたい自業自得

50・クラス対抗戦！！貞操と約束を懸けた戦い

試合当日、第二アリーナ第一試合。対戦カードは織斑一夏 & a m p ; 如月音羽 V S 鳳鈴音 & a m p ; 河西愛理、二つの黒い影と赤と白が向かい合う。噂の新入生の試合と聞いてアリーナの観客席は満員御礼、通路で立ち見する人も現れるほど。それでも入りきらなかった生徒は中継モニターで観戦するんだって、風に聞いたところによると賭けをしている輩もいるとか。

それにしても、鈴ちゃんの専用機「甲龍」^{シェンロン}だっけか。スパイクアーマーが付いた非固定部位^{アンロックユニット}が特徴的である。殴られたら痛そうだが、それ以前に第三世代兵器が搭載されているからそれにも注意が必要だ。白式ならまだしも、こちらは所詮量産機。しかも高機動型だから射撃は避けなければすぐに撃墜される。しかも、今の一夏の技量ではおそらく二対一は無理がある。

『それでは規定位置に移動してください』

無常にも考え事をする暇も無くなる、お互いに向き合う。その距離5メートル、既に試合は始まった。

「一夏、謝るなら手加減してやつても良いわよ」

「そんなの、雀の涙くらいだろ。真剣勝負だ、そんなの要らない。全力で来い」

空気が張り詰める、河西さんもにこにこ笑顔で会話を聞いている。どうやら言わずとも良かったらしい、話が分かる人でとても嬉しい。鈴ちゃんがいなければクラス代表になっていたことから相当の実力者であることは………確実だ。そこらへんを一夏が理解している心配でもあるが。

「ISの絶対防御も完全じゃないのよ、シールドエネルギーを突破できる攻撃力があれば本体に直接ダメージを与えることも可能なのよ」

事実なんだよね、これがまた。秘密裏に操縦者にダメージを与えるためのだけの武装も開発されているからな、いつだか実物を見る羽目になったときはその趣味の悪さに気分を害したこともある。条約違反だから競技では使用が禁止されているがもし戦争になったらあちこちからそういうのが出てくることだろう。まあ、普通の武装でもやろうと思えばできるんだがな。つまりは。

『殺さない程度にいたぶることは可能である』

この事実揺るがない、代表候補生レベルともなるとそれも容易くできるほどらしい（セシリア談）それほどまでに操縦技能レベルが高いということの証拠なんだよな。だから、一夏がセシリアにあそこまで迫れたのも、俺がセシリアに勝てたのも運が良かったからに過ぎない。俺の場合はほとんど不意打ちだったからな、まあ、だからこそ負けないためにこれまで特訓してきたんだ。奇跡は、自分から起こすためにある。

『それでは、試合開始！！』

同時に開始を知らせるブザーがけたたましく鳴り響く、その音が鳴

り終わる前に4機の影が素早く動き出した。

「悪いが、あいつらはあいつらでやらせてやってくれないか？」

「勿論、邪魔はしないわ。生徒会長さ・ま？」

ビクツと背筋に悪寒が走る、俺をそう呼ぶってことは・・・並木野出身か！しかも俺が逃走のためにばら撒いた撒き菱用写真の弊害、なぜか息を荒くして迫ってくる女生徒という理解できない事態。楽だからとやった結果がこれだよ！

「うふふふふ、会長の体をふふふふふ」

「させるかぁあー！！」

瞬時に大型対物ライフル「レインスピア」を展開し、三点バーストでタングステン合金弾 驚異的な貫通力を持ち対物射撃に良く用いられる、某13なスナイパーもそれで階下から上階の戦闘員を床を介して撃ち抜いていた を全て当てるつもりで撃つ。

「はぁはぁ、銃を撃つ会長も素敵！！」

しかし、普通ならば避けられない軌道のそれをこんな言葉とともに余裕で回避しているのだからすごい。そのセリフが無ければもつと素敵だったと思うんだ、あとそんなに怖い目で息荒く迫ってこないでくれ。まさかISの試合で貞操の危機を感じる事になってしまふとは思ってもいなかったよ、マジで。はぁはぁ言いながら銃弾を

横にずれて避けるし、スラスタ―使った三次元跳躍してショットガン「アンブレラ」を二挺持つて襲い掛かってくる。

「ヒッハー！！」

「でえい！！」

銃撃の応酬が延々と続く、これは良い勝負になりそうだ。

「つぐ、重い！」

「初撃を防ぐなんてやるわね一夏！」

試合開始とともに先制攻撃で雪片を振るうも、巨大な青龍刀・・・もはや大剣と呼べるそれによって見事に防がれてしまった。しかもそれが二本、バトンを扱うかのように華麗な剣捌きでの連撃はどうにか防ぐので精一杯だった。あまつさえこちらは細身の刀一本、どうにか防ぎきっただけでもマシなほうだった。

「（このままだと消耗戦だ、どうにかして一回離れないと・・・）」
「フッ、甘い！！！」

後退しようとした姿勢を変えた瞬間、あの痛そうな棘付きアーマーが上下にばかりとスライドして開く。その中に見える球体が光り輝いた瞬間、俺は見えない衝撃に『殴り』飛ばされた。あまりにも大きい衝撃に気を失いそうになってしまいが、ISのブラックアウト防護によってどうにか意識を保つ。

「今のはジャブよ、貰ったア!!」

にやりと笑った鈴、先ほどのそれを警戒してどうにか回避行動を取った瞬間。間髪要れずに権勢ジャブの後の本命が二発撃ち込まれた。その結果、着弾の反動と重力の相互効果でアリーナの地面に強く叩きつけられる。ずきりという鈍い痛みで立ち上がるのもままならない、見えない拳は言葉通りシールドエネルギーを貫通していた。既にシールドエネルギーが76も削られていることからその威力の高さに納得した。

「なんなのだ、あれは・・・?」

試合管制とモニターのためのピットで試合を見ていた篤が呟く、それが聞こえたのかセシリアが答えた。

「『ショックキャノン 衝撃砲』ですわ、空間自体に圧力を加えて砲身を形成して余剰で生じた衝撃を強固で不可視の弾丸として撃ち出す第三世代兵器ですわ」

しかし、その説明を篤は聞いておらず。モニターに映し出される一夏を心配そうに見つめていた。

山田先生が「流石、代表候補生ですね」と嬉しそうにしていたのはここだけの話である。

50・クラス対抗戦！！貞操と約束を懸けた戦い（後書き）

どうでも良い作品情報

作者がPV20万・ユニーク3万突破記念話のやってほしい内容を聞きたそうにしている

51・番外編 IF その2「冷静になろう」(前書き)

本編のストックが切れていて無理だったので番外編です

51・番外編 IF その2「冷静になるう」

「喰らえっ!!」

「のわあっ!？」

少女からの弾幕をどうにか避ける、どうして氷が銃弾レベルで襲い掛かってくるのさ。どうにか話し合いで解決したいのだが、相手は聞く耳を持たない。耳はあるけども、コミュニケーションが取れない。怒り狂ったブラコン全開の千冬さんでもしっかり話せば和解できると言うのに・・・結局拳骨一発は食らわされるけども。このままだと全身が氷だらけになるのも時間の問題だ、多少力づくで取り押さえるしかないか。

「当たりなさいよ!!」

「誰が好きこのんで弾に当たるか!」

それにしてもどうやって捕まえようか、あの高速の弾幕をどうにか掻い潜って彼女に近づかなければいけないのだが・・・あ、使うのは少々気が引けるが・・・仕方ない。怪我したくないし、怪我させるわけにもいけない。いくら氷塊を大量に撃ち放って来ても、相手は小さな女の子なのだから。子供を傷つけるのは流石になあ。

「ああもう!!」

「なんなんだよ!!」

付近には立体機動装置のアンカーを打ち込んで使えそうな木も見当たらないし、機動隊が使うようなシールドも格納していないから使えない。まあ、ゴム弾でもあれば良かったんだが・・・生憎日常

で相手するのは実銃を使うお兄さんとお姉さんばかり。いつだかは重機の事故に見せかけて殺そうとしてきたこともある、俺って何者よ。なんかドイツ語が良く聞けたけどもさ。

「・・・お？」

しかし、避け始めてから結構経ってから気づいたのだが。この氷の弾幕には規則性があるみたいだ、右目を使わずともある程度の軌道は読めてきた。接近するのは無理だが、弾速がそれなりにあるので避けるので精一杯ってところ。

「（このまま弾切れとか無いものか、当たらないから奴さんも焦ってきてるみたいだし）」

できればお互い怪我もなく穏便に解決したい、既にそれは無理っぽいけども。弾幕が広がっている時点で・・・なんであるときはISに勝てたんだか。まあ、学園で破損したメーカー修理中のを強奪したのみたいだったらしいが。それでも、IS倒しておいて目の前の少女に苦戦してるってなによ。

「こうなったら当てて見せるわ、凍符『パーフェクトフリーズ』！」

「なあっ！？仕方ない！」

彼女が叫んだ途端、色とりどりの氷弾が俺に向かって先ほどまでとは比べ物にならないくらいに飛んでくる。さっきのよりも弾速が上だな、色々諦めてデフォルト装備だった眼鏡を耑るように外して死リ神の瞳を起動させる。同時に鞭型のワイヤーソーを召還して迫り来る氷塊を音速の一閃で弾き始めた。

「せいやあ!!」

「ええっ!？」

なんか・・・うん、結構これ脆いんだな、硬いけどワイヤーソーを振り回して叩きつけるだけで簡単に砕ける。割れた破片がナイフみたいに鋭くて油断できないけども、刺さったらおそらくその部分は凍りつくだろう。割れたところから異常なまでの冷気が噴出している。

「つて、やあ!!」

しかし、叩き落せるからと言って安心はできない。その氷塊が白くなつて縦横無尽に動き回ってくるのだからよそ見をしようものならすぐに直撃してしまう。ワイヤーソーもある程度休ませないと冷え切つて干切れてしまう可能性もある。持久戦もこのままでは逆転されてしまいかねない。

どうにか持ちこたえるも、そろそろワイヤーが撓りにくくなつてきた。限界が近くなつてきた証拠でもある、飛来する氷弾が最初のものに戻ったが。結局近づけずにいる、滅茶苦茶に撃つてくるおかげで弾幕が自然に激しくなっているのだ。例えるならば、子供が両腕をぐるぐると振り回してきたような状況。迫るのが可愛らしい手ではなく氷の弾なのだから甘んじて受けることなどできるわけもない。というかしたくない。

「そろそろ止めに「するわけないでしょうが!」ですよね」

そういえば、非殺傷のつて言えば候補があつた。確か、結構前にテスト格納つてことでゴムボール（近所の百均にて）を入れていたような記憶がある。確かそのままになってたはずだから今も格納されたまま眠つてるような気がする・・・多分。

「おっしや、そおい!!」

「へ、ぶへっ!・・・」

まさに神速とも言えるほどの速さでそれをイメージし、投げつける。俺の手から離れたそれは放物線を描いて少女の顔に金属光沢を見せ付けながら・・・顔に直撃した。ガツン!!とか聞こえたけど、なんか手が軽く冷えてるし、投げたのがゴムボールではないことは確かではある。

「やべ」

「ふにや~~~~・・・」

そのままふらふらとよろめきながら少女は地面へと倒れこんだ、まづつた、投げたのは球体ではあるが全然の別物であつた。何を投げつけてしまったのかと良く見てみると、見慣れた銃器的特徴的な金属光沢。・・・ガバメントアーミーカスタム用の50連ドラムマガジンだった、通称「かたつむり」。一番投げてはいけないもののような気がする、主に重量的な問題で。ぶつかって気絶しただけであざなどは見受けられないのがせめてもの救いである。

「キュー・・・」

「はあ・・・」

ゴムボールだからと全力で投げたのが原因だろうか、ものの見事に

気絶してのびていらっしやった。それはそれとしてどうするか、目を覚ますのを待っていると日が沈んでしまいそうだし。かといってここに置いていくわけにもいかない。

「どうしたものか……」

あてもなく彷徨うわけにもいかなかったが、だからと言って立ち止まるわけにもいけないという今現在。唯一の頼みの綱は気を失っていてどうしようもなく、八方塞だった。誰か助けてくれないかな、主にこの状況から。どうしようもなく、近くの岩に腰掛ける。はあ。

「なら、助けてあげましょうか？」

「はい？」

いま、どこからか声が聞こえたような。辺りを見回すも、いるのは俺と気絶して倒れたままの女の子だけ。俺は幽霊とかお化けとか苦手なんだが、それこそ縁日で開かれるお化け屋敷に入れないほどに空耳にしてははつきり聞こえたし……イヤアアアアア！！

「てえい！！」

嫌な予感がした俺は即刻、その場からイグニッションブースト瞬時加速もかくやというほどの速度で飛び跳ねて離れた場所に着地した。ここに来る前に飲み込まれた落とし穴に似た空気を感じたからである。

「まあ、上手くいくとは思ってないけどさあ！！」

着地した場所に、待ってましたとばかりに例の落とし穴がぽつかりと口を開けて待っていたのだから。

「……ここは……？」

気がついたころには、先ほどまでいた広大な草原ではなく、見知らぬ家の中にいた。どちらかと言うと伝統的な和風の住宅、掛け軸や生け花が飾りつけられていることから客間であることはすぐに理解できた。柱が綺麗に磨かれていて、ほこり一つ無いことから長年大切にされている歴史有る住居であることは理解に容易い。まさにTHE和室のようである、招かれた記憶が無いことは確実であるのだが。

「あら、気づいたみたいね」

背後からさつき聞こえた声がする、まあ、部屋の中をきよるきよるで見回していても結局は俺も人間である。首は180度回らないし、後ろを見ることもできない。ひとまず、振り返ることにした。

「ようこそ、幻想郷へ……とでも言っておきましょうか」

そこには、セシリア並みの長さの金髪ストレートな女性が立っていた。どことなく不思議な印象を受ける気がする、ひとまず初対面であることは確かである。というか、金髪の知り合いなんて数えるくらいしか居ないよ。米軍のISパイロットとオルコット家くらいだよ！

「如月音羽と言います、あの、どちらさまでしょうか？」

「あら、どうも。私は八雲紫、境界を操る妖怪よ」

「……妖怪？溶解……熔解……用かい？ＹＯかい？まさか、そんな空想上のものが居る分けないジャマイカ、しかもこんな美人な人が？妖怪ってあの某ゲゲの人に出てくるみたいなのじゃないのか？」「このロリコンどもめ！」のあれとかさ。なにも俺の髪はアンテナ立たないよ？

「妖怪……ですか？」

「ええ、そうよ」

につこりと笑うその顔はとてもふつくしい、うん。でも……どう見ても妖怪なんてのは見えない、というか今の科学万歳な世の中で生きてきた身としてははにかにも信じがたい。まあ、さっきまでの出来事を思い返してみればそれを認めるしか無いのだが。

第一、実際にそうだとしても俺の目の前にわざわざ現れたのだろうか。それに……幻想郷ってなんだ？東京と京都の仲間か？日本国内にそんな地名なんて無かったと思うが。わけがわからないよ。

「まだ、今の状況に混乱してるみたいね。……無理も無いけど」

そりゃあ、そうだ。さっきまでの出来事を振り返れば冷静にいられるわけがない、冷静にしたら見る奴がいたら見てみたいわ。

「あなたの身に一体何が起こったか、説明したほうが良いかしら？」

「是非とも、k w s k」

「分かったわ、ひとまず座りなさい」

「はい」

説明中

「……つまりここは俺が居た世界とは別の世界と……」
「そういうこと」

ここは幻想郷という場所で、俺は彼女(?)、八雲紫の手によってこの世界に連れて来られた……ふん。まあ、一応状況と経緯については理解。納得はしてないがな。妖怪や能力の存在を認めればこれまでの出来事が説明できてしまう……から、この話を認めるほかない。

「分かってくれたかしら？」
「まあ、なんとか。……ただ」
「ただ？」

俺は、今までの話を聞いてきて一番気になっていた疑問をぶつけた。

「紫さんが俺を誘く……ここに連れてきたってのは分かったんですけど。他の人じゃダメだったんですか？」

「ついなんと言ったら……？」

「泣けるな、確実に。もちろんそんな理由では無いですね？」

「ええ、一応理由があるのよ、一応」

え、一応ってなに、一応って。一気に心配になったんですけど、ひとまずどうしようもない事ではないだろうと俺は耳を傾けた。

51・番外編 IF その2「冷静になろう」(後書き)

どうでも良い作品情報

番外編では原作とは矛盾、キャラ崩壊アリ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8335v/>

訳有りの記憶喪失でも生きていける

2011年10月16日20時32分発行